

南陽市遺跡分布調査報告書（4）

2016年3月

南陽市教育委員会

南陽市遺跡分布調査報告書 (4)

南陽市埋蔵文化財調査報告書第13集

平成28年3月

南陽市教育委員会



西原遺跡 TT1 一括出土遺物

序

この度、「南陽市遺跡分布調査報告書（4）」を発行する運びとなりました。本書は、南陽市教育委員会が平成27年に国庫補助事業（市内遺跡発掘調査等事業）として各種の開発事業と埋蔵文化財保護との調整を図るために実施した踏査、試掘調査、立会調査等の分布調査の成果をまとめたものです。

昨年、一昨年と続いた豪雨災害や昨年末からの大雪被害で河川、山林が荒廃し、復旧事業が進められるなか、今年度は山地を中心に新たな中世城館址の発見が相次ぎました。特に最上領と伊達（上杉）領を結ぶ小滝街道が山間部から平野部に入る位置にあたる金山地区で複数の中世城館址が確認されたことは、金山城の実態解明とともに本市の歴史を考える上で貴重な発見となりました。また、周知の遺跡である宮沢城や梨郷地区の山の尾根に分布する4つの古墳群等についても遺跡台帳整備のための調査を進め、新たな知見を得ることができました。

本市は、北に丘陵、南に沃野と豊かな自然に恵まれ、旧石器時代から中世に至るまで、数多くの遺跡が存在します。人々が生活した住居跡・古墳・役所跡・城館等の「遺跡」と、石器や土器等の「遺物」は、大地に埋まっている貴重な文化財であるため「埋蔵文化財」と呼ばれ、市内各地には、悠久の歴史を物語る埋蔵文化財が眠っております。土地を離れて人の生活は無く、その土地にはその土地の歴史が息づいております。埋蔵文化財は、その土地や地域の歴史を明らかにし、地域の宝として世代を越えて伝えられ、人々の地域への愛着やそこに生きる人々の誇りと自負を育んでいくものとなります。

現代を生きる私たちは、様々な営みの中で土地を利活用し、開発を行うこととなりますが、埋蔵文化財を大切に、ふるさとの歴史を守ることを忘れてはなりません。

私たちには、埋蔵文化財を保護し大切に後世へと引き継いでいく責任があります。分布調査は、埋蔵文化財の所在を把握し、埋蔵文化財を保護するための第一歩となるものです。

最後になりましたが、調査にご指導、ご協力をいただいた関係各位に、厚くお礼を申し上げます。

平成28年3月

南陽市教育委員会
教育長 猪野 忠

凡例

- 1 本報告書は、文化庁の補助を受けて平成27年度に南陽市教育委員会が実施した開発事業との調整並びに遺跡台帳（遺跡地図）整備に関する市内遺跡分布調査報告書である。
- 2 調査は南陽市教育委員会が実施した。
- 3 調査期間は、平成27年4月9日から平成28年3月31日までである。
- 4 調査体制は次のとおりである。

調査主任 角田 朋行（課長補佐兼埋蔵文化財係長）
調査補助員 鈴木 輝生（埋蔵文化財係技能士）
主 幹 課 社会教育課
主幹課長 社会教育課長 田中吉弘
- 5 本報告書の作成、執筆は、角田朋行が担当し、遺物実測は、山田渚が担当した。
- 6 挿図の縮尺はスケールで示した。
- 7 写真図版は任意の縮尺で採録した。
- 8 挿図における踏査範囲は薄灰色の塗りつぶしで示し、これによらない場合は各図に個別に示した。なお、中世城館址の略側図中の薄灰色の塗りつぶしは河川、堀、堤を示す。
- 9 小字名は、地名記録の観点から明治期の地籍図によるものとし、現小字名を括弧書きで採録した。
- 10 本調査にあたっては、次の方々によるご指導、ご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。（敬称略）

佐藤鎮雄、佐藤庄一、長井謙治、三上喜孝

目 次

I 調査の概要	
1 調査の目的と概要	1
2 調査方法	1
3 調査位置図	2
4 調査実施一覧	4
II 遺跡台帳・遺跡地図整備に係る分布調査(踏査)	
1 「赤湯」古墳群	7
2 二色根古墳群	9
3 七両坂古墳	10
4 金沢地区字十分一山二(十分一山古墳群(仮))	10
5 金沢地区(字外山・字外林)	11
6 松沢地区	12
7 細田遺跡	13
8 漆山字西高堰一(西高堰古墳(仮))	14
9 平野古窯跡周辺	16
10 町河原遺跡	17
11 金山字南沢周辺・金山字砥石沢周辺	18
12 漆房遺跡	19
13 平野山田遺跡	20
14 砂塚字堂ノ越、下ハッ口遺跡	21
15 打越遺跡	22
16 稲荷山物見跡、阿弥陀山物見跡	23
17 羽付字児子神周辺	25
18 竈山館跡	26
19 金山地区城館群	29
①金山橋山館跡	30
②金山橋山館跡北側の尾根	31
③金山橋山館跡東側の台地上	31
④天ヶ澤館跡	32
⑤七瑳古山物見跡	32
⑥田中館跡	33
⑦立石館跡	34
⑧字寺清水(寺跡)	35
⑨字八幡山周辺	35
@大平山周辺(字大平)	36
20 石切山城	38
21 宮沢城	41
22 岩部山周辺(岩部山岩陰、岩部山館跡)	49

23	天王山古墳群	52
24	竜樹山古墳群	56
25	稲荷山古墳群	59
26	経塚山古墳群	61
27	砂田遺跡	66
28	坂井字戸瀬土、字下中島	67
29	宮内字関口	68
III 試掘調査		
1	長岡山東遺跡	69
2	沢田遺跡	74
3	沢見遺跡	76
4	萩生田字上河原	79
5	萩生田遺跡・高木遺跡	80
6	宮内字大清水	81
7	西原遺跡	82
8	植木場一遺跡	85
9	三間通字円蔵西	86
10	宮内字桜田一	88
11	東六角遺跡	89
12	郡山字前田	90
13	三間通字西野々(古墓地)	91
14	岩屋堂遺跡	94
15	檜原遺跡	97
16	若狭郷屋字石田(字西田)	98
IV 立会調査		
1	太子堂遺跡	99
2	萩字神明森	100
3	神明前遺跡	101
4	宮内字桜田二	102
5	漆山字広面四	103
6	若狭郷屋敷跡	104
7	東屋敷遺跡	105
8	粗柳字中丸	106
9	市内全域(防災無線)	107

挿図目次

第 1 図	調査位置図	2	第 47 図	宮内字間口踏査範囲図	68
第 2 図	「赤湯」古墳群調査位置図	9	第 48 図	長岡山東遺跡開発予定地位置図	69
第 3 図	字十分一山二の石村群模式図	11	第 49 図	長岡山東遺跡グリット配置図	69
第 4 図	七坂古墳及び金沢地区踏査範囲図	11	第 50 図	長岡山東遺跡遺構平面図	70
第 5 図	松沢古墳群周辺踏査範囲図	12	第 51 図	長岡山東遺跡トレンチ柱状図	71
第 6 図	細田遺跡踏査範囲及び位置図	13	第 52 図	長岡山東遺跡出土遺物(1)	72
第 7 図	明治 8 年字西高塚一(部分)	15	第 53 図	長岡山東遺跡出土遺物(2)	73
第 8 図	西高塚一踏査範囲図	15	第 54 図	沢田遺跡開発予定地位置図	74
第 9 図	平野古窯跡位置図	16	第 55 図	沢田遺跡グリット配置図	75
第 10 図	平野古窯跡踏査範囲図	16	第 56 図	沢田遺跡トレンチ柱状図	75
第 11 図	町河原遺跡踏査範囲図	17	第 57 図	沢見遺跡開発予定地位置図	76
第 12 図	金山地区(川樋境付近)踏査範囲図	18	第 58 図	沢見遺跡遺構平面図・断面図	77
第 13 図	法師柳地区踏査範囲図	19	第 59 図	沢見遺跡出土遺物	78
第 14 図	平野地区踏査範囲図	20	第 60 図	沢見遺跡トレンチ柱状図	78
第 15 図	下八ッ道跡出土遺物実測図	21	第 61 図	沖郷条里制推定ラインと調査地	78
第 16 図	砂塚地区踏査範囲図	21	第 62 図	字上河原開発予定地位置図	79
第 17 図	漆山字打越・字屋敷浦踏査範囲図	22	第 63 図	字上河原トレンチ柱状図	79
第 18 図	稲荷山物見跡踏査範囲図	23	第 64 図	萩生田遺跡開発予定地位置図	80
第 19 図	阿弥陀山物見跡踏査範囲図	24	第 65 図	萩生田遺跡トレンチ柱状図	80
第 20 図	羽付字兒子神浦踏査範囲図	25	第 66 図	字大清水開発予定地位置図	81
第 21 図	龜山館跡周辺字境図	27	第 67 図	字大清水トレンチ柱状図	81
第 22 図	龜山館跡踏査範囲図	27	第 68 図	字大清水トレンチ配置図	81
第 23 図	梨郷・漆山地区城館群位置図	28	第 69 図	西原遺跡トレンチ配置図及び立会調査地点	83
第 24 図	平館跡・金山橋山館跡略測図	30	第 70 図	西原遺跡出土遺物実測図	83
第 25 図	金山橋山館の北側・東側略測図	31	第 71 図	西原遺跡 T T 1, T T 5 及び立会地点断面図	84
第 26 図	天ヶ澤館跡略測図	32	第 72 図	西原遺跡トレンチ柱状図	84
第 27 図	七塚古山物見跡略測図	32	第 73 図	植木場一遺跡トレンチ配置図	85
第 28 図	田中館跡概略図	33	第 74 図	植木場一遺跡 T T 1 平面図・断面図	85
第 29 図	立石館跡概略図	34	第 75 図	三間通字円蔵西トレンチ配置図	86
第 30 図	字寺清水の寺院跡概略図	35	第 76 図	東唐越館跡と開発予定地	87
第 31 図	字八幡山踏査範囲図	35	第 77 図	字円蔵西 T T 1, T T 2, T T 3 平面図・断面図	87
第 32 図	字大平踏査範囲図	36	第 78 図	字桜田一トレンチ配置図	88
第 33 図	金山地区城郭群概要図	37	第 79 図	字桜田一 T T 2, T T 10 断面図	88
第 34 図	石切山城跡略測図	40	第 80 図	字桜田一トレンチ柱状図	88
第 35 図	宮沢城跡ボーリング調査断面図(1)	45	第 81 図	東六角遺跡トレンチ配置図	89
第 36 図	宮沢城跡ボーリング調査断面図(2) <small>(西の部北西部分)</small>	46	第 82 図	東六角遺跡トレンチ柱状図	89
第 37 図	宮沢城跡略図	47	第 83 図	郡山字前田トレンチ配置図	90
第 38 図	宮沢城及び周辺城郭群と石切山城	48	第 84 図	郡山字前田トレンチ柱状図	90
第 39 図	岩部山踏査範囲図	50	第 85 図	三間通古墓地調査位置図	92
第 40 図	岩部山館跡縄張り図	51	第 86 図	三間通古墓地 A トレンチ配置図	92
第 41 図	天王山古墳群踏査範囲図	55	第 87 図	三間通西野々方形墳エベレーション図	92
第 42 図	竜崎山古墳群踏査範囲図	58	第 88 図	古墓地 A T T 1 断面図	92
第 43 図	稲荷山古墳群踏査範囲図	60	第 89 図	古墓地 A T T 2 柱状図	92
第 44 図	経塚山古墳群踏査範囲図	63	第 90 図	西野々古墓地内 墓石配置図及び一覧表	93
第 45 図	砂田遺跡踏査範囲図	66	第 91 図	岩屋堂遺跡開発予定地位置図	94
第 46 図	坂井地区踏査範囲図	67	第 92 図	岩屋堂遺跡トレンチ配置図	95

第93図	岩屋堂遺跡T・F、K断面図	95	第104図	神明前遺跡調査位置図	101
第94図	岩屋堂遺跡トレンチ柱状図	96	第105図	宮内字桜田二調査位置図	102
第95図	楡原遺跡トレンチ配置図	97	第106図	宮内字桜田二柱状図	102
第96図	楡原遺跡トレンチ柱状図	97	第107図	漆山字広面四調査位置図	103
第97図	字石田トレンチ配置図	98	第108図	若狭郷屋敷跡調査位置図	104
第98図	字石田トレンチ柱状図	98	第109図	若狭郷屋敷跡柱状図	104
第99図	太子堂遺跡調査位置図	99	第110図	東屋敷遺跡調査位置図	105
第100図	太子堂遺跡深掘部西壁	99	第111図	東屋敷遺跡柱状図	105
第101図	字神明森調査位置図	100	第112図	字中丸調査位置図	106
第102図	字神明森立会調査図	100	第113図	字中丸柱状図	106
第103図	字神明森柱状図	100			

図版目次

図版 1	字夷平山、秋葉山、団子山、蒲生田山、名子山	1	図版 24	長岡山東遺跡(2)	24
図版 2	字大沢山、上野山坑道、長峰山、二色根古墳群	2	図版 25	長岡山東遺跡(3)、沢田遺跡試掘(1)	25
図版 3	七坂古墳、字十分一山二の石材群	3	図版 26	沢田遺跡試掘(2)、沢見遺跡試掘(1)	26
図版 4	松沢地区、松沢古墳群、細田遺跡、字西高塚、平野古塚跡	4	図版 27	沢見遺跡試掘(2)	27
図版 5	町河原、金山字南沢・字砥石沢、漆房遺跡、平野山田遺跡	5	図版 28	沢見遺跡試掘(3)、字上河原試掘(1)	28
図版 6	字堂ノ腰、下八ッ口遺跡、打越遺跡、漆山館跡、稲荷山物見跡	6	図版 29	字上河原試掘(2)、萩生田遺跡試掘	29
図版 7	阿弥陀山物見、字兒子神、字毘沙門沢	7	図版 30	字大清水試掘、西原遺跡試掘(1)	30
図版 8	龍山館跡	8	図版 31	西原遺跡試掘(2)	31
図版 9	金山橋山館跡及びその東側	9	図版 32	西原遺跡試掘(3)	32
図版 10	天ヶ澤館跡、七塚古山物見跡	10	図版 33	植木場一遺跡試掘、字円蔵西試掘(1)	33
図版 11	田中館跡、立石館跡、字寺清水、字八幡山	11	図版 34	字円蔵西試掘(2)、字桜田一試掘(1)	34
図版 12	字大平(山)、平館跡付近	12	図版 35	字桜田一試掘(2)	35
図版 13	石切山城跡(1)	13	図版 36	字桜田一試掘(3)、東六角遺跡試掘	36
図版 14	石切山城跡(2)	14	図版 37	西野々古墓地試掘、岩屋堂遺跡試掘(1)	37
図版 15	宮沢城跡	15	図版 38	岩屋堂遺跡試掘(2)	38
図版 16	岩部山岩陰、岩部山館跡(1)	16	図版 39	楡原遺跡試掘、字石田試掘(1)	39
図版 17	岩部山館跡(2)	17	図版 40	字石田試掘(2)	40
図版 18	天王山古墳群	18	図版 41	字太子堂立会、字神明森立会、字桜田二立会(1)	41
図版 19	竜樹山古墳群(1)	19	図版 42	字桜田二立会(2)、字広面四立会、若狭郷屋敷跡立会	42
図版 20	竜樹山古墳群(2)、稲荷山古墳群	20	図版 43	東屋敷遺跡立会、字中丸立会	43
図版 21	経塚山古墳群	21	図版 44	長岡山東遺跡出土遺物	44
図版 22	経塚山、砂田遺跡	22	図版 45	沢田遺跡出土遺物	45
図版 23	字戸瀬土、字間口、長岡山東遺跡試掘(1)	23	図版 46	沢見遺跡出土遺物(1)	46
			図版 47	沢見遺跡出土遺物(2)	47
			図版 48	西原遺跡出土遺物	48

南陽市遺跡分布調査報告書（4）

I 調査の概要

1 調査の目的と概要

近年、郊外への住宅地造成が増加傾向にあり、各種開発との調整を図り遺跡の保護を図るための試掘調査及び立会調査を実施した。

本市では平成27年度現在で274箇所の遺跡を把握しているが、未調査地域も多く残されている現状である。また、発見が古く、容易に立ち入ることのできない山間部の古墳群等、情報が少ない遺跡も存在するため、遺跡台帳整備のための調査を継続して実施している。

平成27年4月から12月までの開発行為に伴う遺跡所在の有無に関する照会は計51件であった。踏査は88件、試掘調査は15件、工事立会は13件である。試掘調査は、埋蔵文化財包蔵地及びその隣接地・分布調査未実施地において実施に努めた。工事立会は、工期に余裕がない場合や工事面積が狭い場合、埋蔵文化財を破壊する恐れが少ないと判断された場合及び分布調査未実施地において実施した。

2 調査方法

(1) 踏査及び分布調査

踏査は、開発事業計画地の範囲内及びその周辺の踏査を行い、遺跡の範囲と開発予定区域の平面的な関係を確認する調査である。分布調査は、主に遺跡台帳整備のための踏査である。いずれも事前・事後に周知の資料により、地形状況や従来報告等の内容を確認している。GPS付のカメラやスマートフォンを活用し、簡易な位置情報を記録しながら踏査した。

(2) 試掘調査

試掘調査は、坪掘りやトレンチ調査を行って遺構や遺物の平面的な分布範囲や遺構確認面までの深さ等を把握し、遺跡内容の把握を行う調査である。開発予定地内にグリットを設定し、試掘溝又は試掘穴を配して人力で表土及び堆積土を除去し、遺構の有無を確認した。

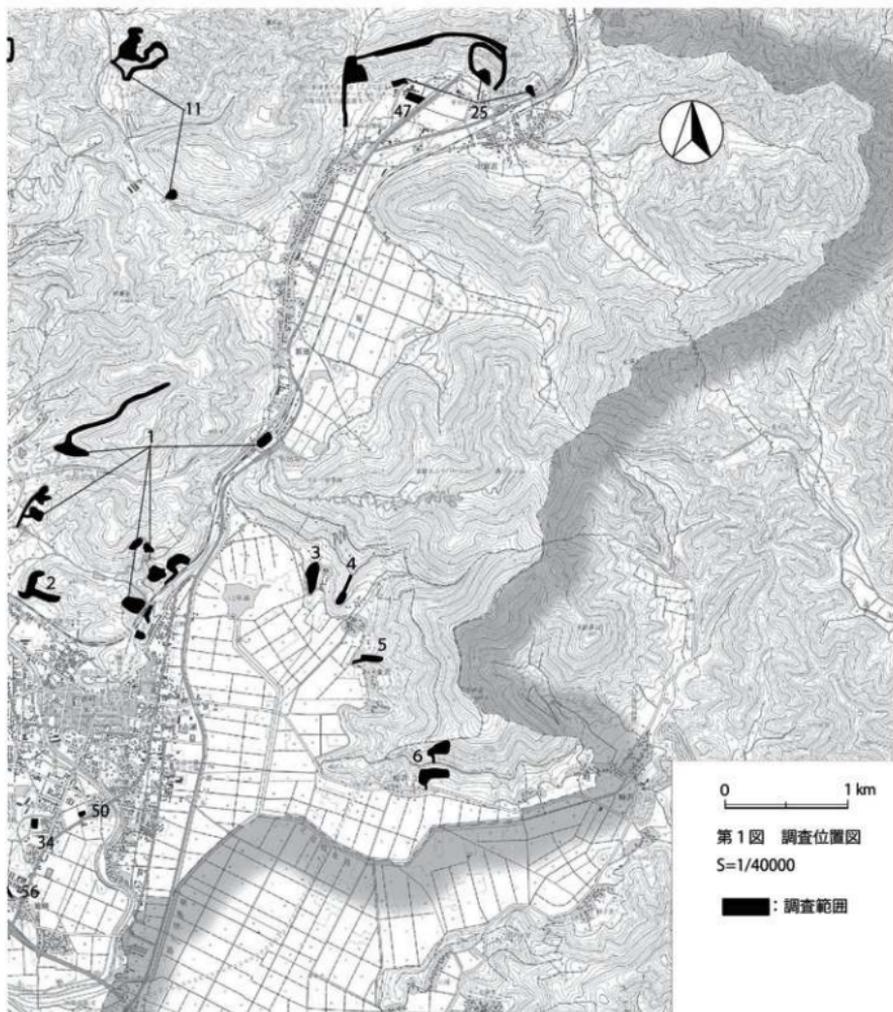
(3) 立会調査

立会調査は、基本的に開発事業による遺跡への影響が軽微な場合に、工事施工に立ち会って実施し、遺構や遺物が発見された場合には記録保存を行う調査である。工事の進捗にあわせ、土工事を行う際に立ち会いを行い、遺構・遺物の確認及び土層の確認を行った。掘削深度は工事の掘底面である。遺跡未確認地の場合もできるだけ工事立ち合いを行い遺跡の把握に努めた。

3 調査位置図



- | | | |
|--|--|---------------------------|
| 1 赤湯地区 (字夷平、字夷平山、字秋葉山、字団子山、字大沢山、字蒲生田山、字名子山、字長清水、字山居沢山、字北ノ沢山) | 10 町河原遺跡 | 20 田中館跡・立石館跡・字寺清水・字八幡山 |
| 2 二色根古墳群 | 11 金山字南沢・砥石沢 | 21 七塚古山物見跡 |
| 3 七両坂古墳 (字松林道下) | 12 漆房遺跡 | 22 金山地区 (字大平) |
| 4 金沢地区 (字十分一山二) | 13 平野山田遺跡 | 23 石切山城跡 |
| 5 金沢地区 (字外山、字外林) | 14 砂塚地区 (字堂ノ越) | 24 富沢城跡 |
| 6 松沢地区 (字赤石山) | 15 打越遺跡、漆山館跡 | 25 岩部山館跡 |
| 7 細田遺跡 | 16 阿弥陀山物見跡・稲荷山物見跡、羽付地区 (字児子神、字児子神浦) 和田地区 (字里沙門沢、字宝島) | 26 天王山古墳群 |
| 8 漆山地区 (字西高塚一) | 17 窟山館跡 | 27 稲荷山古墳群 |
| 9 平野古栗跡 | 18 金山桶山館跡 | 28 龍樹山古墳群 |
| | 19 天ヶ澤館跡 | 29 経塚山古墳群 |
| | | 30 梨郷地区 (字小寺坂、字冷水返り、字石ヶ窪) |
| | | 31 砂田遺跡 |



- | | | |
|-----------------|-----------------|----------|
| 32 坂井地区 (字戸瀬土) | 44 東六角遺跡 | 56 姐柳字中丸 |
| 33 宮内字関口 | 45 郡山地区 (字前田) | |
| 34 長岡山東遺跡 | 46 三間通地区 (字西野々) | |
| 35 沢田遺跡 | 47 岩屋堂遺跡 | |
| 36 沢見遺跡 | 48 檜原遺跡 | |
| 37 萩生田地区 (字上河原) | 49 若狭郷屋字石田 | |
| 38 萩生田遺跡 | 50 太子堂遺跡 | |
| 39 宮内字大清水 | 51 神明前遺跡 | |
| 40 西原遺跡 | 52 宮内地区 (字桜田二) | |
| 41 柿木場一遺跡 | 53 漆山字広面四 | |
| 42 三間通地区 (字円蔵西) | 54 若狭郷屋敷跡 | |
| 43 宮内地区 (字桜田一) | 55 東屋敷遺跡 | |

平成 27 年度埋蔵文化財分布・試掘・立会調査実施一覧（地区別）

地区	事業名	現場調査期間	遺跡名・地名	場所	区分	試掘結果等
赤湯	分布調査	4月8日	七両取古墳等	赤湯字十分一山一	踏査	古墳の現状を確認
	分布調査	4月9日	未確認	上野字蓮生田山一	踏査	なし。
	分布調査	4月9日	山沢沢山遺跡	上野字山沢沢山	踏査	古墳等はなし。
	分布調査	4月9日	未確認	赤湯字夷平山～秋葉山	踏査	古墳等はなし。
	分布調査	4月9日	二色根字南宮～横沢裏		踏査	古墳等はなし。
	分布調査	4月10日	上野山古墳群	赤湯字大沢山	踏査	古墳等はなし。
	分布調査	4月10日	未確認	赤湯字名子山～新田字長 清水	踏査	島上取、古墳等はなし。
	分布調査	4月13日	未確認	松沢字赤石山	踏査	古墳等はなし。
	分布調査	4月13日	上野山古墳群	赤湯字大沢山	踏査	古墳等はなし。
	分布調査	4月15日	金沢字十分一山二	金沢字十分一山二	踏査	七両取古墳と立地や形状の類似する石材群を 確認
	分布調査	4月23日	松沢古墳群	松沢字赤石山	踏査	1号墳の下にあったという横穴を探索、確認 できず。
	分布調査	4月23日	字外山、字外林	赤湯（金沢）字外山、字外 林	踏査	尾根上を踏査、遺跡なし。
	分布調査	4月23日	字十分一山二	赤湯（金沢）字十分一山二	踏査	古墳可能性の踏査、石材群を確認し、記録
	民間開発	5月18日～21日	長岡山東遺跡	長岡字西田	試掘	須恵器・土師器等出土
	民間開発	6月1日	太子堂遺跡	樺原字太子堂	立会	昨年発掘中のS D1が西に続くことを確認
	民間開発	6月25日	太子堂遺跡	樺原字太子堂	立会	なし
	民間開発	6月30日	長岡南森遺跡	須藤字六百町	立会	なし
	民間開発	8月26日～27日	未確認	三間通字西野々	試掘	幅広い溝状の落ち込みを検出。さらに明治期 の溝と道路跡を確認
	河川改修	9月28日	未確認	三間通字西野々	踏査	低平な方墳(9.7m×9m)の上に江戸中期 の墓地が立地する。
	民間開発	10月16日	東六角遺跡	三間通字六角西	試掘	なし
河川改修	10月20日	未確認	三間通字西野々	試掘	方形墳は近世墳墓に伴うとみられる。	
分布調査	12月7日、21日	山沢沢山A・C遺跡	上野字山沢沢山	踏査	A遺跡で須恵器残片	
中川	分布調査	4月10日、13日	小沢沢墳墓	小沢沢	踏査	場所確認、墳墓は確認できず。平安時代の墳 墓とされる。墳丘を有する可能性あり。
	民間開発	4月13日	未確認	川種字高野	立会	掘削は盛土内、遺物等確認できず
	分布調査	5月22日	岩部山南部	岩部山南部	踏査	岩部の位置等を確認
	分布調査	5月30日	未確認	元中山字金神林山	踏査	なし
	分布調査	6月8日	岩部山遺跡	川種字岩部山	踏査	岩陰や礎石調査を確認。岩部山館跡土葬の現 況を確認
	分布調査	6月11日	岩部山遺跡	川種字岩部山	踏査	遺跡西側確認。尾根中央付近に1辺約6mの 方形壇を新規確認
	分布調査	6月19日	未確認	日影地区（日影街道）	踏査	日影街道の日影地区側の入口を確認
	民間開発	10月30日	岩屋堂遺跡	川種字岩屋堂	踏査	縄文土器片
	民間開発	11月6日、9日	岩屋堂遺跡	川種字岩屋堂	試掘	縄文土器片、石器
	分布調査	11月9日	岩部山遺跡	川種字岩部山	踏査	日影街道切通し南側で曲輪を確認
	民間開発	4月15日	藤生田跡	藤生田字清水上	踏査	石器片
	分布調査	5月1日	町河原遺跡	中落合字町河原	踏査	須恵器片、土師器片、新規遺跡
公共施設 整備	5月7日～19日	沢田遺跡	若狭郷屋字沢田	試掘	土師器、須恵器、弥生土器出土。ビットあり。	
公共施設 整備	5月14日～19日	沢田遺跡	若狭郷屋字沢田	試掘	平安時代の大量検出。須恵器出土、新規遺跡	
道路整備	5月26日～28日	萩生田遺跡	萩生田字久保	試掘	須恵器片・土師器片出土、遺構なし	
民間開発	5月27日	萩生田遺跡跡地	萩生田字河原	試掘	なし	
民間開発	6月1日	坂井字下瀬戸	坂井字下瀬戸	踏査	須恵器残片1点	
分布調査	6月1日	未確認	法師柳字津房、長壽字柳 田	踏査	水田中の低平な小方形壇上に墓地が立地、遺 物なし	
分布調査	6月1日	津房遺跡	法師柳字津房	踏査	稲荷神社内境内で須恵器片表掘（新規確認）	
民間開発	6月15日	中の目字二反田	中の目字二反田	立会	土1事掘削状況を確認。盛土内での工事	
分布調査	6月15日	中落合遺跡	中落合字宅地	踏査	なし	
民間開発	8月6日～10日	植木堀一遺跡	路崎字地蔵堂	試掘	溝及びビットを検出し記録	
分布調査	9月11日	矢ノ目遺跡	郡山字沢無下	踏査	現況確認。掘削一部残存。土師器片表掘	
下水道整 備	9月30日～11月17日	若狭郷屋字敷跡	若狭郷屋字浦城	立会	水路跡を確認。須恵器1点	
分布調査	10月2日	間根柳跡跡地	間根字屋敷（金能寺周辺）	踏査	なし	
民間開発	10月19日	未確認	郡山字前田	試掘	なし	
分布調査	10月30日	未確認	坂井字下中島	踏査	石器片（チップ）1点	
民間開発	11月25日	繪原遺跡	西落合字東原	試掘	須恵器片1点、柱穴1か所	
道路整備	12月15日	西田遺跡跡地	若狭郷屋字福田	立会	なし	
民間開発	12月16日	西田遺跡跡地	若狭郷屋字石田	試掘	土師器片、須恵器片、遺構なし	
分布調査	12月21日	早稲田遺跡	郡山字早稲田、字塚田	踏査	須恵器片3点、石祠のある低平な方形壇有	

平成 27 年度埋蔵文化財分布・試掘・立会調査実施一覧（地区別）

地区	事業名	現場調査期間	遺跡名・地名	場所	区分	試験結果等
梨郷	分布調査	4月14日	未確認	和田字兒子神浦	踏査	なし。種字等の貯蔵穴あり。
	分布調査	4月14日	和田字壷ヶ入	和田字壷ヶ入	踏査	種字等の貯蔵穴跡あり。二重堀切を内確認
	分布調査	4月14日	平野古宮跡	梨郷（平野）字寺山	踏査	現状確認。竪跡の西側に新規遺構
	分布調査	4月16日	和田字龍山（龍山館）	和田字龍山	踏査	中世城址を新規確認
	分布調査	4月24日、27日	和田字龍山（龍山館） 周辺	和田字龍山～沢田山～沢田 周辺	踏査	谷内に散在遺構あり
	分布調査	4月27日	龍山館跡	和田字龍山、壷ヶ入、宿ノ東、 東大浦、沢田、八幡下、沼沢、 狩野	踏査	龍山館跡の略図図作成
	分布調査	6月8日	平野山田遺跡	梨郷字山田、七拾母	踏査	須恵器片を表採、新規遺跡
	公共施設 整備	9月16日～17日	ヌゲヅボ遺跡	梨郷字白山	踏査	沢から尾根頂にかけて。石器表採
	公共施設 整備	9月16日～10月2日	天王山古墳群	梨郷字天王山	踏査	古墳の位置、形状、規模の確認
	分布調査	10月5日、11月2日	稲荷山古墳群	梨郷字稲荷山	踏査	古墳の位置確認。稲荷山の西尾根を踏査した が遺構なし
	分布調査	11月4日～21日	竜嶽山古墳群	梨郷字竜嶽山一～五	踏査	古墳の位置、形状、規模の確認。
	分布調査	11月5日、12日	稲荷山古墳群	梨郷字稲荷山、字上館	踏査	古墳の位置、形状、規模の確認。
分布調査	11月13日～17日	経塚山古墳群	梨郷字鹿野、字梨子木、字 深沢、字経塚、字上町	踏査	古墳の位置、形状、規模の確認。	
分布調査	12月24日	平野古宮跡、平野山田 遺跡、竜嶽山北側山地	梨郷（平野）字寺山、字山田、 字金一	踏査	平野古宮跡の南約 100 m地点で城土・炭屑 あり。字金山の斜面に素掘土の落込みあり。	
宮内	民間開発	5月25日	未確認	宮内字大清水	試掘	須恵器片。遺構なし
分布調査	6月25日	宮沢城	宮内字龜崎神堂	踏査	遺跡の現況確認	
宮内・ 金山	分布調査	7月6日	石切山城	宮内字高日向山（通称 石 切山）・金山字字裏	踏査	中世城館址（曲輪・土橋・塹壕・土塁）を確認、 新規遺跡
宮内・ 金山	分布調査	7月7日、8日、12月 8日	石切山城	宮内字高日向山（通称 石 切山）	踏査	館跡の西側の一部を踏査。曲輪と切岸等を 確認
宮内	下水道整 備	7月29日～8月25日	未確認	宮内字板田二	立会	なし。河川跡。
分布調査	8月5日～11日	宮沢城	宮内字龜崎神堂他	踏査	縄張り図作成。城郭遺構の確認	
分布調査	8月19日	慶海山館、石切山城	宮内字高日向山	踏査	縄張り図作成。城郭遺構の確認	
分布調査	8月20日、21日	宮沢城	宮内字龜崎神堂他	踏査	植土杖により埋没している製等を確認	
分布調査	8月31日	宮沢城	宮内字龜崎神堂他	踏査	植土杖により埋没している製等を確認	
分布調査	9月3日	宮沢城	宮内字龜崎神堂他	踏査	植土杖により埋没している製等を確認	
分布調査	9月7日	宮沢城	宮内字龜崎神堂他	踏査	宮沢川と堀との位置関係を確認	
分布調査	9月9日	宮沢城	宮内字龜崎神堂他	踏査	蔵屋敷西側に植土杖により埋没している製 等を確認	
分布調査	9月16日	宮内慶海山西側	宮内字高日向山	踏査	慶海山館の北側の範囲を確認	
民間開発	10月26日	未確認	宮内字板田一	試掘	なし	
民間開発	12月15日	観音堂遺跡東側隣地	宮内字山口	踏査	なし	
金山	民間開発	4月15日	未確認	金山字南沢	踏査	なし
分布調査	4月15日	未確認	金山字砥石沢～川種字秀山	踏査	金山坑道とズリ山を確認	
分布調査	6月2日	平瀬跡周辺	金山字七塚古山	踏査	平瀬（色部館）跡の東側の地形を確認	
分布調査	6月2日	未確認	金山字八幡山	踏査	八幡神社のある尾根を踏査	
分布調査	6月9日	糠塚	金山字五貫場	踏査	糠塚の所在地を確認	
分布調査	6月9日	未確認	金山字明神堂	踏査	なし	
分布調査	6月15日	龍山館跡	金山字七塚古山	踏査	通称「橋山」に城館址。新規遺跡	
分布調査	6月16日	未確認	金山字大平	踏査	大平山尾根を踏査。明確な城館址は確認で きない。	
分布調査	6月18日	未確認	金山字七塚古山	踏査	「橋山」北側の道路沿いに地形確認	
分布調査	6月19日	天ヶ澤館跡	金山字七塚古山、字天ヶ澤	踏査	堀切、曲輪等を確認。新規遺跡	
分布調査	6月23日	龍山館跡	金山字七塚古山（龍山館）	踏査	曲輪等を確認	
分布調査	6月24日	田中館跡	金山字平瀬～字田中、稲山 館北側	踏査	地形・曲輪等の確認、新規遺跡	
分布調査	6月25日	七塚古山物見	金山字七塚古山（七塚古山 山原）	踏査	山頂に石砌のあるテラスを確認。新規遺跡 （山原）	
分布調査	6月30日	龍山館跡隣地	金山字七塚古山（龍山館の 東）	踏査	尾根頂に石祠	
分布調査	7月3日	立石館跡	金山字田中～字明神堂	踏査	現況地形を確認。新規遺跡	
分布調査	7月7日	龍山館跡隣地	金山字七塚古山	踏査	山ノ神の遺道から東の地形を確認	
分布調査	11月4日、12月8日	天ヶ澤館跡	金山字七塚古山・字天ヶ澤	踏査	曲輪等を確認	

平成 27 年度埋蔵文化財分布・試掘・立会調査実施一覧（地区別）

地区	事業名	現場調査期間	遺跡名・地名	場所	区分	試掘結果等
漆山	分布調査	4月14日	稲荷山物見	羽付字千代森	踏査	千代森から稲荷山にかけ中世城館址、新規遺跡
	分布調査	4月14日	漆山字西高塚一 (古墳跡)	漆山字西高塚一	踏査	現状確認、古墳は既に削平
	民間開発	4月20日～22日	西原遺跡	池黒字西原	試掘	須恵器・土師器、遺構なし、新規遺跡
	分布調査	4月22日	細田遺跡	池黒字細田	踏査	須恵器・土師器表採、新規遺跡
	分布調査	4月28日	阿弥陀山物見	羽付字阿弥陀山	踏査	中世城館址、新規遺跡
	下水道整備	7月22日～28日	神明前遺跡	池黒字神明前	立会	工事地周辺の畑地で須恵器表採、新規遺跡
	民間開発	9月9日	なし	漆山字広面四	立会	なし
	分布調査	10月5日	砂田遺跡	池黒字砂田	踏査	須恵器片・土師器片、新規遺跡
民間開発	10月5日～11月5日	西原遺跡	池黒字西原	立会	須恵器片	
道路整備	12月7日	東屋敷遺跡	漆山字東屋敷	立会	なし	
神郷 梨郷 漆山	分布調査	8月25日	下八ッ口遺跡、漆山館、 天王遺跡他	砂塚、漆山、長壽	踏査	砂塚字堂ノ越に1辺1.5mの方形壇を 確認（過去に遺物表採の記録あり）、 天王遺跡の範囲拡大。
	吉野 公共施設整 備（鉄塔）	5月30日	諏訪原D遺跡他	小滝、中川地区（13地点）	踏査	現地確認、遺構・遺物なし
全域	公共施設整 備（鉄塔）	5月29日～6月15日	萩生田遺跡他	赤岡、神郷、梨郷、漆山地区 (64地点)	踏査	現地確認、遺構・遺物なし
全域	公共施設整 備	9月30日	岩屋堂2遺跡、内城遺 跡、大橋城跡等	赤岡・神郷・宮内・梨郷・漆山・ 下萩地区内	踏査	開発予定地の現状確認
全域	公共施設整 備	10月29日～12月11日	下八ッ口遺跡、蒲生田 遺跡、萩生田遺跡他	赤岡、神郷、梨郷、漆山地 区	立会	防災無観局工事立会、遺物・遺構なし

調査者 角田朋行 鈴木輝生

II 遺跡台帳・遺跡地図整備に係る分布調査（踏査）

1 「赤湯」古墳群

- (1) 調査日 平成 27 年 4 月 9 日、10 日、12 月 7 日、21 日
(2) 調査場所 南陽市赤湯字夷平、字夷平山、字秋葉山、字団子山、字大沢山 字蒲生田山、
字蒲生田山二、字名子山、字長清水、字山居沢山、字北ノ沢山二

(3) 調査目的

「赤湯」古墳群は、現存する上野山古墳群、狸沢山古墳群、山居沢山古墳、蒲生田山古墳群、二色根古墳群を始め、赤湯地区北部の山地に存在していた古墳群の総称である。かつて古墳があったと伝わる地域を中心に「赤湯」古墳群の実態把握のため、古墳数及び位置を確認するため踏査を行う。

(4) 調査方法及び内容

GPS 機能付カメラ及び GPS 機能付スマートフォンにより簡易位置情報付の写真撮影を行いながら踏査した。調査範囲は、上野山の東南斜面（字大沢山）と上野山の枝尾根である夷平山、秋葉山の東斜面、狸沢山の西側（字蒲生田山、字蒲生田山二）、鳥上坂（字名子山）及び山居沢山周辺とする。

(5) 調査結果

①上野山東南斜面（字大沢山）について（旧「大沢山古墳群」）

昭和 42 年の赤湯地区文化財調査図に大沢山古墳群として標高 350 m 付近に 4 基の終末期古墳（OM1～OM4）が記録されている。現在の地図で位置を推定し、OM2～4 の踏査範囲を字大沢山中腹の南斜面とした。字大沢山一帯は荒廃園地が広がり隆起地形や石材等を確認しやすい。農道の下から踏査した。古墳構造材であった可能性のある石材散在するが古墳と判断される箇所は無く、農道の上でも古墳は確認できなかった。OM1 があったとされる東斜面は葡萄園で OM1 付近に比較的大きな石材が散乱する。東斜面には石材が散見されるが古墳は確認できない。さらに念のため調査範囲を広げ、南斜面下方の谷際（荒廃園地南端）まで踏査したが、石材が散見されるものの古墳は確認できなかった。

②上野山東斜面の陥没穴（坑道）について

上野山 14 号墳の下位斜面で昨年確認した陥没穴及び横穴を再調査した。荒廃園地斜面に開いた陥没穴は南北約 1.7 m × 東西約 1.9 m である。地表から約 1.6 m の深さで横穴の隅丸方形の天井部が現れる。横穴は横幅約 1 m である。かなり埋没が進んでいるが横穴の高さは現況で 1 m である。中に入ることはできないが、奥行きは 5 m 以上で西方向に続いていると見られる。今回、当該陥没穴から真西に十数 m 離れた箇所にさらにもう一つの陥没穴を発見した。角度的に 2 つの横穴は連続すると考えられることからこの横穴は坑道跡と考えられる。当該陥没穴から北東に数 m 離れた斜面に人為的な段差がみられ、そこが坑道入口の可能性があり、従来知られていない近世以前の鉱山跡である可能性が高い。

③通称「長峰山」について（旧「長峰山古墳群」）

上野山 15 号墳から南に下り、南面する沢の斜面を踏査した。古墳も構造材となる石材はわずかに有るが斜面に古墳は確認できなかった。字大沢山二の谷に開けた緩斜面付近まで下り、その後東側の尾根に登って字夷平山との境を北へ踏査した。字夷平山との境となる尾根は南北に長く尾根頂は広く平坦になっており、通称「長峰山」と呼ばれる。尾根頂付近では古墳は確認できず石材も全く見られない。「長峰山古墳群」は昭和 37 年赤湯町 7

遺跡台帳に位置図と所在地番の記載があり、位置図の地点は前回踏査で古墳が存在しないことを確認している。今回改めて地番から所在地を再検証したところ昭和37年位置図が誤っており、本来の所在地は今次踏査尾根の南斜面で、前回確認した「長峰山」南斜面（字夷平山）のマウンド（M1～4）の地点と一致していることが明らかとなった。このことから字夷平山のマウンド4基は当時「長峰山古墳群」と呼ばれていた古墳群の一部である可能性が高い。今後、この4基を上野山古墳群長峰山支群（NM1～NM4）とする。

④字夷平山について

夷平山マウンドがある谷状地形のさらに東北側の大きな谷地形内を踏査した。現況は荒廃園地で東南向きの急斜面に段々の葡萄園跡が残るが、古墳や石室を思わせる石材は見当たらない。尾根に近い上位にある大きな崖石に神社が祀られている。

⑤秋葉山東斜面（字秋葉山、字団子山）について

秋葉山東側には、かつて秋葉山東古墳があったとされる。現況把握を目的に踏査した。昨年度の踏査では秋葉山南斜面で遺物が確認されていることから、秋葉山山頂付近には古墳が存在した可能性が高いとみられる。今次調査地の東斜面は荒廃園地で見通しが良いが、古墳や古墳構造材となるような石は確認できなかった。

⑥秋葉山東側山麓の枝尾根（字団子山、字八幡沢）について

秋葉山東斜面の下方にあたる線路より東側の枝尾根である。字団子山の尾根には近世墓地があり、板碑が1基確認できる。字八幡坂には赤湯八幡宮が所在している。その尾根の上部を踏査した。境内上方の尾根に少なくとも2面のテラスが存在している。曲輪のような遺構か、または何らかの建物（お堂等）があった跡と思われる。

⑦上野字蒲生田山、蒲生田山二について

狸沢山古墳群の範囲を確定するため、上野山西側の枝尾根である字蒲生田山、蒲生田山二を調査し、併せて字寺山付近にあったとされる寺院跡周辺についても調査した。なお、字蒲生田山（二）は周知の蒲生田山古墳群からは東南へ約500m離れている。

寺堤東側の林道を北へ進み字蒲生田山の谷を東へ踏査した。谷の北側の山裾に石垣を組んだ3つのテラスが構築されている。何らかの建物があったと思われる、寺院跡とも考えられるが付近には墓等はない。谷北側の山の西斜面（字蒲生田山二）を踏査した。段々畑状になっているが古墳や石材等はない。次に南斜面から字蒲生田山の山頂まで登り東側の尾根を踏査したが、古墳や石材等は見られない。このことから狸沢山古墳群の範囲は、周知の狸沢山古墳A支群の範囲が西限と考えるのが妥当と思われる。

⑧赤湯鳥上坂（赤湯字名子山、新田字長清水）について

赤湯地区の鳥上坂や中川地区の新田にも古墳があったという記録があることから、未踏査地区について踏査した。調査地は赤湯と新田との境にまたがる小山中、山の下部をJ Rのトンネルが走り、山の東を国道13号線が走る。南西方向と北東方向にむかってなだらかな斜面が存在する。北側から南へ踏査したが、古墳や古墳構造材となるような石等は確認できなかった。山頂よりやや南東に下った位置に、山の神の小型石碑が祀られている。

⑨山居沢山A遺跡、B遺跡、C遺跡（上野字山居沢山、字北ノ沢山二）について

A遺跡は2つの谷地形が合流する平場で、須恵器大甕片を表採した。C遺跡はA遺跡の東南にあたる。山の尾根及び北側斜面に立地し、農道造成時に焼土と須恵器が出土したとされるが今回は遺物等は確認できなかった。B遺跡には山居沢山古墳（円墳）が1基残る。A遺跡から東北側の谷底には環流丘陵と同様な成因からなる塚状地形が散在する。

2 二色根古墳群

- (1) 調査日 平成 27 年 4 月 9 日
- (2) 調査場所 南陽市二色根字南京、字横沢裏
- (3) 調査目的

東置賜郡史に記録がある位置図を元に二色根 4 号墳の所在地を探索する。山の西側にも古墳があったという記録があることから二色根山西側南半の中腹より上位を踏査する。

- (4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査する。

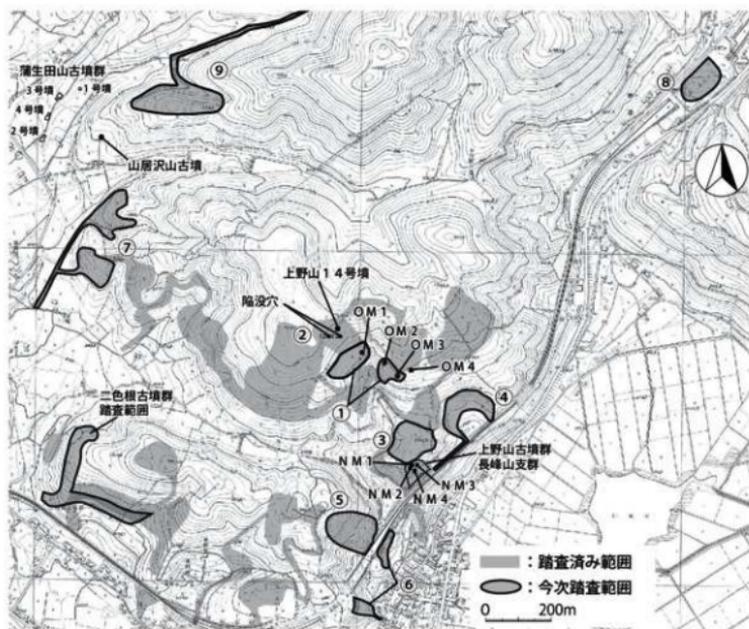
- (5) 調査結果

① 4 号墳踏査

4 号墳の立地地点として考えられる山裾付近の斜面に古墳は確認できなかった。4 号墳推定地点から東側上方には 5・6 号墳の可能性があるとした地点がある。東置賜郡史の地図では 5・6 号墳はもっと北の沢奥に立地するかのようになっているが、これより奥の沢は急な自然傾斜斜面である。東置賜郡史では 2・3 号墳より 5・6 号墳の標高が低く、4 号墳はさらに低く、5・6 号墳からはかなり南側に描かれているため、4 号墳は山裾からさらに南側、葡萄園内の緩斜面に位置する可能性も検討しなければならない。

② 二色根山西側

二色根山西側の新墓地から北へ尾根上を登り、西側斜面の中腹より上位を踏査した。範囲は西斜面の南半である。西斜面は自然勾配の斜面続き、人工的な地形の改変はみられないことから、かつて古墳があったとしても中腹以下に存在したものと思われる。



第 2 図 「赤湯」古墳群調査位置図 S=1/15000

3 七両坂古墳

- (1) 調査日 平成 27 年 4 月 8 日
- (2) 調査場所 南陽市赤湯字松林道下、十分一山一（七両坂周辺）
- (3) 調査目的

七両坂古墳は、昭和 56 年に市史編纂事業で現況を確認して以来、現況を確認していないことから、遺跡台帳整備のため踏査した。

- (4) 調査方法及び内容

G P S 記録付の写真撮影を行いながら踏査する。

- (5) 調査結果

尾根頂に古墳石室の残存を確認した。付近には昭和 56 年当時は葡萄園が存在していたが、現在は荒廃園地である。古墳は藪で覆われているが、ほぼ昭和 56 年に確認した状態のままであるとみられ、羨道の石が残存する。古墳は東に向かって開口していると考えられる。尾根の北側には山ノ神が祭られている。

七両坂古墳	緯度 38° 03'30.980 経度 140° 11'7.909 高度 241.57m
-------	--

4 金沢地区字十分一山二（十分一山古墳群（仮））

- (1) 調査日 平成 27 年 4 月 15 日、23 日
- (2) 調査場所 南陽市赤湯字十分一山二（尾根南端部）
- (3) 調査目的

当該尾根西側のやや低い尾根上には、七両坂古墳と金沢山の神遺跡が所在するが、昭和 37 年、50 年の埋蔵文化財調査カードでは、それらの所在地について字十分一山二の尾根と七両坂（字松林道下）の尾根のどちらに遺跡が分布するのか記述に混乱がみられ、市史考古資料編作成の段階で現行の所在地に整理された経緯を持つ。七両坂古墳は見晴らしの良い尾根頂端に築かれており、同様の地形である字十分一山二の尾根上にも古墳が存在する可能性がないのか調査を行う。

- (4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査する。

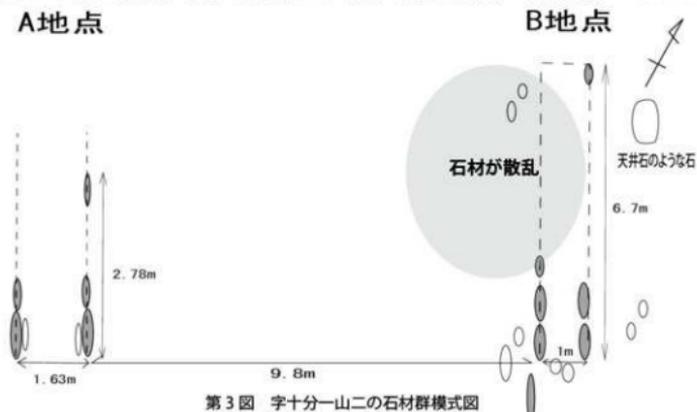
- (5) 調査結果

十分一山の通称「三段道路」の二段目を登り、当該尾根北端から南へ踏査した。尾根は葡萄園になっており、地権者に話をお聞きすることができた。「古墳は西隣の尾根（七両坂）にあると聞いている。この尾根についてはわからない。この尾根の上方の北東方向、三段目の道路から行くと、金掘り穴と呼ぶ坑道跡がいくつか開いている。」とのことである。了解を得て葡萄園内を通り尾根平坦面を南へ踏査したが葡萄園内には大きな石材はない。

尾根南端部は荒廃地になっていたが、尾根頂付近に大きな石材が集中して転がっており、先に踏査した七両坂古墳の状況と非常に良く似ている。尾根の東側に 2 枚の板石を縦に立て、板石が並列している箇所（A 地点）を確認した。板石の並びは古墳の羨道に類似する。古墳であれば東に開口するとみられ、立地状況や石列の向き等は七両坂古墳と類似し、古墳の可能性もある。A 地点を中心に隆起地形を呈する。

さらに A 地点の北側にも一組の石材群があることを確認した（B 地点）。2 枚の板石を縦に立て、板石を東西方向に並列させる状況は A 地点と同様で、周辺には大きな石材が散乱する。B 地点の石列を中心に直径約 10 m 程度の円形を思わせる隆起地形を呈する。

現在の葡萄園とその周囲では営農に伴い石を並列させる石材使用例は見られない。藪に覆われているため遺物は確認できなかったが、これら隆起地形を伴う石列群は古墳の可能性があるため幅と現況長の概寸を計測した。今後の調査上、十分一山古墳群(仮)としておく。



第3図 字十分一山二の石材群模式図

5 金沢地区字外山、字外林

- (1) 調査日 平成27年4月23日
- (2) 調査場所 南陽市金沢字外山、字外林(西へ張り出す尾根上)
- (3) 調査目的

対象地は遺跡未確認地である。白竜湖を臨む山地には七両坂古墳や山の神遺跡が立地するなど尾根上に遺跡が確認されていることから、地形的に類似する当該尾根について踏査を行う。

(4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査する。

(5) 調査結果

山裾の警鐘台から東へ尾根上を踏査した。尾根西端に小テラスが見られ、祠等があったのではないと思われる。尾根はほぼ自然地形に近く、果樹園跡が残る。果樹園利用の痕跡は尾根の途中でなくなり尾根頂は自然地形となり、古墳等は当該尾根上には確認できなかった。



第4図 七両坂古墳及び金沢地区踏査範囲図 S=1/10000

6 松沢地区

- (1) 調査日 平成 27 年 4 月 13 日、23 日
- (2) 調査場所 南陽市松沢字赤石山
- (3) 調査目的

松沢古墳群は合掌型石室を持つ積石塚古墳で、現在 2 基確認されているが、周辺にさらに古墳があったという聞き取り記録があることから古墳群周辺及び古墳群の立地する谷地形の中腹付近を踏査する。また、1 号墳の斜面下方にある作業小屋付近に、かつて人が数人座ることのできる広さの横穴があったという聞き取り記録もあることから、改めて現地を確認する。

(4) 調査方法及び内容

GPS 機能付スマートフォンにより位置情報付の写真撮影を行いながら、古墳を確認するため踏査する。

(5) 調査結果

①松沢 2 号墳の東側斜面の古墳状地形

2 号墳からその東に広がるゴーロ帯（崩れた巨石の集積地帯）まで踏査した。このゴーロ帯は山頂近くから中腹まで広がる。ゴーロ帯には古墳の石材に利用される岩が多量に積み重なっており古墳があっても外見からは確認できない状況である。ゴーロ帯西側、標高約 375 m の高所でマウンド状地形を 1 箇所確認した（A 地点）。さらにその下方の標高約 360 m 付近で石が積みまれている箇所を 1 箇所確認した（B 地点）。この標高には葡萄園の開墾が及んでいないことから、この 2 箇所は古墳状隆起地形として継続調査が必要である。

②字赤石山（農道より下方、赤石山中腹付近）

松沢古墳群の立地する広い谷地形西端を成す尾根から踏査を開始した。尾根南端に凝灰岩の石切り場跡を 2 箇所確認した。尾根上には大きな自然石の露出が見られるが古墳等は確認できなかった。谷地形内の山の中腹付近には巨石が散在し、旧葡萄園の段々や小屋の基礎の石組み等の積み石がいたるところに見られ、この中に積石塚古墳の一部が紛れていたとしても現況で外観から判別することは困難である。

③赤石山の横穴

横穴は平成 7 年の地権者聞き取りに記録されている。地権者によれば、現在の小屋の下に横穴があり、横穴は「石小屋」と呼ばれ、昼食場として利用していたという。小屋から西に約 400 m の地点には松沢山横穴が存在する。小屋の背後に巨大な岩があり、小屋は積み石の上に建てられている。小屋の周囲に横穴は確認できなかったが小屋の基礎の積み石で穴が覆われている可能性もある。



第 5 図 松沢古墳群周辺踏査範囲図 S=1/6000

7 細田遺跡

(1) 調査日 平成 27 年 4 月 22 日

(2) 調査場所 南陽市池黒字細田

(3) 調査目的

遺跡分布調査未実施地区につき、遺跡台帳整備のため地表面踏査を実施する。

(4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査する。

(5) 調査結果

池黒字細田の畑地を中心に遺物が散布している状況を確認した。遺跡の現況は、畑地及び荒地で織機川左岸の自然堤防上に位置する。遺跡のすぐ北側には織機川の旧河道が現織機川に合流する地点があり、旧河道の窪地が残存する。遺物は、須恵器片及び土師器片である。遺跡の上流方向には猫子前遺跡や富貴田遺跡が所在し、下流方向には西原遺跡が所在する。西原遺跡とは一体の遺跡である可能性もある。新規遺跡である。



細田遺跡表採遺物



第 6 図 細田遺跡踏査範囲及び位置図 S=1/5000

8 漆山字西高堰一（西高堰古墳（仮））

- (1) 調査日 平成 27 年 4 月 12 日
- (2) 調査場所 南陽市漆山字西高堰一
- (3) 調査目的

対象地は遺跡分布調査未実施地であり、かつて円形の高塚（円墳？）があったとの記録があることから遺跡台帳整備のため現況確認を行う。

- (4) 調査方法及び内容

過去の資料等の調査を行った後、写真撮影を行いながら踏査する。

- (5) 調査結果

市史編さん室に集められた資料の中に「漆山字大仏の北 300 m 位に直径 16 m、高さ 2 m の円形の塚があった。昭和 34 年に武田好吉先生の指導を受け、地元有志が発掘を実施した。宝物は出なかったが、塚は人工的に盛り土されたものあることが分かった。墳頂からは川原石が多く出たため、武田先生の所見では河川に絡む経塚ではないかという結論であった。」という調査記録が保管されていたことから調査を実施した。

- ①旧土地所有者からの情報について

昭和 30 年代当時の旧地権者から聞き取り、塚の形状や位置（地番）について具体的な情報を得た。「畑の脇に薄暗い林があり、その中に大人の背丈よりも高い塚があった。その場所は現在宅地と畑になっている（民家の西側で工場の北側）。塚の上は円形で平らになっていた。発掘では塚を十字に掘り下げていたことを覚えている。」とのこと。

- ②明治 8 年字限図について

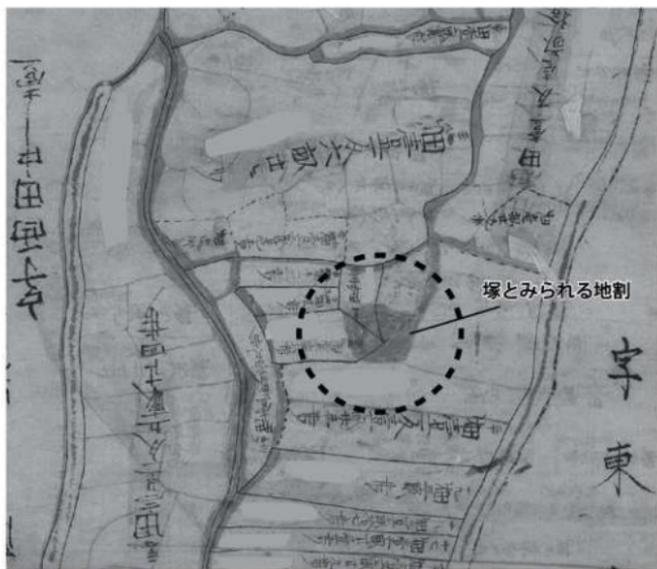
旧地権者から聞き取りした情報から、所在地が字西高堰一であることが判明したため、明治 8 年の字限図を確認したところ、畑地の中心に丸みを帯びた方形の草地の地割りがあり、地点も旧地権者情報と一致することから、これが当該塚であると思われる。字境線が当該地割り中心部で四方向に分かれている様子も、山頂上で分筆する場合の特徴に一致し、この草地が一定の高さを有していたと読み取ることが可能である。また北西側では頂点から放射状に地割している点から、方形ではなく円形であったと推測できる。

大きさや立地状況等からみると、近隣の天王遺跡発掘調査の古墳の例等から、当該塚は元々古墳で、円墳であった可能性が高いと思われる。昭和 34 年の発掘では十字トレンチ状に塚を断ち割ったとみられるが、発掘現場に考古学専門者が参加していなかったため、調査手法が荒く、宝探的な意識であったことから、残念ながら精度的に遺構や遺物を検出することが困難であったものと推測される。

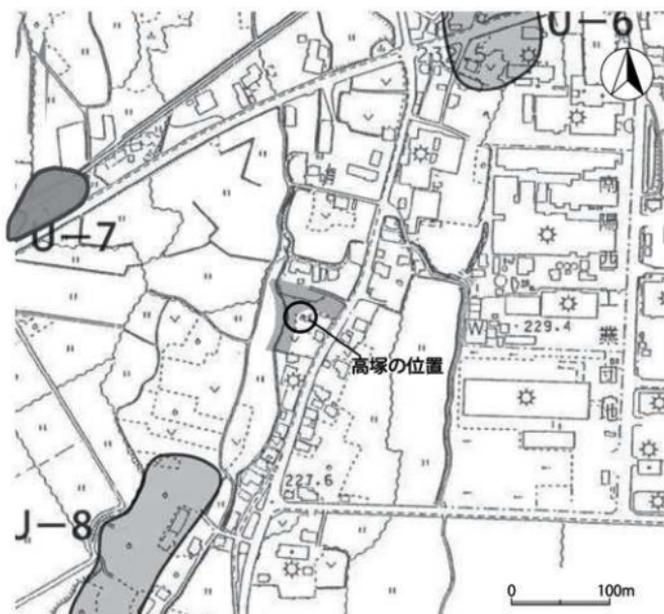
- ③踏査結果

塚跡の現況は、畑地である。宅地の西側に庭木が植えられている場所がやや地膨れしており、字限図でも塚は現在の宅地西側に位置すると考えられるため、この部分が塚の痕跡の可能性がある。しかしながら、これ以外は一面に削平されており、現況で古墳と判断できる地形はない。遺物も今回は採取できなかった。

立地的には天王山遺跡の古墳群から北東約 630m に位置し、天王山古墳群と同じ自然堤防上であることから、北から南へ自然堤防上に古墳群が存在していた可能性はある。今後の調査のため西高堰古墳（仮）としておく。



第7図 明治8年宇西高塚一(部分)



第8図 西高塚古墳踏査範囲図 S= 1/5000

9 平野古窯跡周辺

(1) 調査日 平成27年4月14日、12月24日

(2) 調査場所 南陽市梨郷（平野）字寺山

(3) 調査目的

対象地は、昭和40年に発掘調査が行われた平安時代の古窯跡である。窯跡は1基確認されているが、窯跡は複数検出される事例が多いことから、周辺を踏査する。

(4) 調査方法及び内容

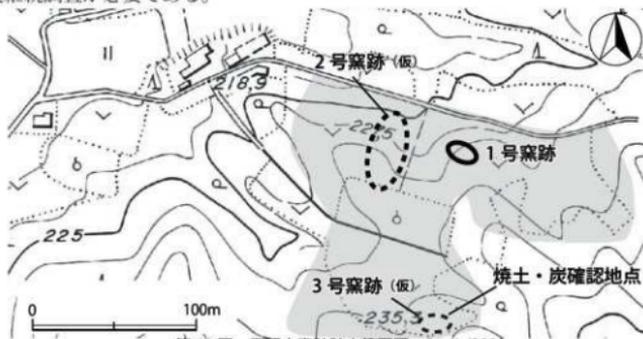
写真撮影を行いながら踏査する。窯跡南側山裾をボーリングステッキで調査する。

(5) 調査結果

経塚山の北西に延びる枝尾根の末端、山裾部の西北側斜面に平野古窯跡は立地している。その西側に広がる丘陵を踏査した。1号窯跡から西へ約38メートルの畑地内に炭が混じり黒色土が楕円に広がる遺構を確認した。黒色土は、丘陵の北側斜面に南北方向に幅約2m×長さ約10mで広がり、周辺を暗褐色土(黒色土と地山の黄褐色土が混じる)が取り囲み、全体では幅は5~6mになっている。立地や形状から窯跡や灰原の可能性が高い。黒色土の尾根側は農地造成で切土されており、上部遺構は削平されていると思われ、遺物は採集できなかった。昭和50年調査カードに「窯跡の南西約30mの地域に須恵器散布地あり」とあり、楡原遺跡発掘調査報告書(2007 県埋文センター)に2号窯(仮称)の出土遺物の記載があることを確認した。立地情報が概ね一致することから今次確認地点を2号窯跡(仮)と判断する。さらに1号窯跡から南へ、数m間隔で等高線に概ね平行にボーリングステッキで土層を確認していったところ、1号窯跡から南へ約100m、谷の出口にあたる西向き緩斜面で、地表下約30~40cmに縦約8m×幅約2mの範囲で焼土と炭が広がる地点を確認した。笹藪と枯葉で遺物は採集できなかったが窯跡の可能性が高い。3号窯跡(仮)とし今後継続調査が必要である。



第9図 平野古窯跡位置図 S= 1/1200



第10図 平野古窯跡踏査範囲図 S= 1/3000

10 町河原遺跡

- (1) 調査日 平成27年5月1日
- (2) 調査場所 南陽市中落合字町河原東、字町河原南、字町河原北
- (3) 調査目的

遺跡台帳及び遺跡地図整備のため、遺跡の未確認地について分布調査を行う。特に郡山周辺については、郡山郡衙関連遺跡の把握に努める。中落合地区には、郡衙関連遺跡として知られる中落合遺跡があり、郡山遺跡群の重要遺跡である。今次調査地は中落合地区の飛地で、旧吉野川旧河道が三日月状に蛇行する内側の高燥地（中州）にあたり、中落合館から東南方向に伸びる運河状遺構が旧吉野川と合流する地点の先に位置する。平安時代の正倉の立地は運河や河川と密接な関連性があることや郡山遺跡群の重要地域である中落合の所属地になっていることから、当該地に奈良・平安時代の遺跡が存在する可能性があるため確認する。

(4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査する。

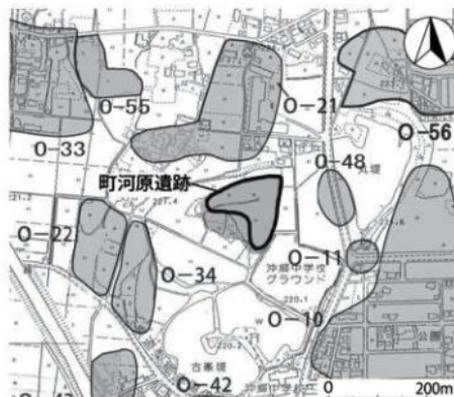
(5) 調査結果

調査地は、旧吉野川旧河道に取り巻かれた中州状の地形である。東側の低地（旧河道）は沖郷中学校のグラウンドとして数年前に埋め立てられている。北、西、南側に旧河道の窪地形と小崖状の岸が明瞭に残る。現況は、果樹園及び畑地である。地元の方によれば以前は桑畑で戦後に果樹園に変えたが大規模な切土・盛土は行ってないとのこと。

中州北半の果樹園及び畑地で多くの須恵器片、土師器片を表採する。遺物の散布は北半から中州中央付近までが多く、南半はほとんど無い。微高地も北側が高く、南に進むにつれて低くなることから、中洲内でも微高地を中心に遺跡が立地すると思われる。新規遺跡である。



町河原遺跡表採土器



第11図 町河原遺跡踏査範囲図 S= 1/1000

11 金山字南沢周辺・金山字砥石沢周辺

- (1) 調査日 平成27年4月15日
- (2) 調査場所 南陽市金山字南沢・字小弓ヶ沢(碎石場)、字砥石沢～川樋字禿山
- (3) 調査目的

対象地に碎石場の計画が生じたことから、遺跡分布調査未実施地である開発予定地域について事前に調査を行う。併せて山の斜面にマウンド状のものが目視された未踏査地区(字砥石沢～川樋字禿山)の踏査を行う。

(4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査する。

(5) 調査結果

①金山字南沢・字小弓ヶ沢(碎石場予定地)

市道大弓ヶ沢線沿いに登り山の南側尾根から踏査を開始した。広く緩やかな尾根を活かして果樹園等で利用したとみられ地形改変は尾根頂付近に一部見られるのみである。遺構・遺物は確認できない。次に尾根頂から細い尾根上を南西から東北方向へ踏査した。尾根南半部にある山頂付近に凝灰岩の石材が数個埋没している地点があった。山体は頂上まで風化した花崗岩系の岩であることから、人為的に凝灰岩を運んできたものと思われる。経塚等の可能性もあるものの、立地的に山の神等を祀っていた可能性が高い。尾根を事業予定地西端まで踏査し、西側から谷に下りながら確認した。谷内の斜面に人工的な改変はみられないが、谷底付近は植林で手を加えているとみられる。

谷を抜けて、小扇状地状の緩斜面を踏査した。荒廃田で一面葎の枯れ草で覆われており、一部畑部分でのみ地表面を確認できた。畑地部分では遺物等は確認できなかった。事業地外の尾根中腹(踏査地北端の尾根)には山の神がある。

②字砥石沢～川樋字禿山(坑道)

山の南斜面を踏査したところ、市道から目視したマウンドは鉱山の坑道前に掘削した土石を捨てた「ズリ山」であることが確認された。周辺の斜面には複数の素掘りの跡があり、ズリ山の北側に坑道入口が開口している。坑道は横幅約2.1m、開口部高さ80cm、内部の横幅約1.6m、高さ約1.7mである。この地域は近世に金山の開発、採掘が盛んに行われた地域であり、近世鉱山の砥石沢鉱山の坑道のひとつと考えられる。



第12図 金山地区(川樋境付近)踏査範囲図
S= 1/2000

12 漆房遺跡

- (1) 調査日 平成 27 年 6 月 1 日
- (2) 調査場所 南陽市法師柳字漆房
- (3) 調査目的

対象地は、遺跡分布調査未実施地である。遺跡台帳の整備を図るため踏査する。

- (4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査する。

- (5) 調査結果

対象地は、法師柳の稲荷神社の周辺で、現況は社寺、畑地及び果樹園である。長湍地区から法師柳地区にかけては微高地が広がっており、踏査により稲荷神社を中心に奈良・平安時代の須恵器片数点を表採した。新規遺跡である。

遺物の散布がみられるこの微高地は、南流する織機川旧河道（又は織機川支流）が西に屈曲する地点にあたる。河川のカーブの外側にあたるため土砂の堆積が多く、周辺に広く自然堤防が発達したものであると思われる。

稲荷神社の境内には、庚申塔、湯殿山、金華山等 9 基の石塔がある。



漆房遺跡表採土器



第 13 図 法師柳地区踏査範囲図 S= 1/300

13 平野山田遺跡

- (1) 調査日 平成 27 年 6 月 8 日、12 月 24 日
- (2) 調査場所 南陽市梨郷（平野）字山田、字平野、字中島平、字七拾刈
- (3) 調査目的

対象地は、遺跡分布調査未実施地である。収蔵資料の整理を実施したところ 1987 年に市教委に持ち込まれた遺物の出土地点が従来考えられていた位置（二本木遺跡）とは異なる可能性があることが判明したことから、その出土地点と思われる一帯を調査し、遺跡台帳の整備を図る。

- (4) 調査方法及び内容

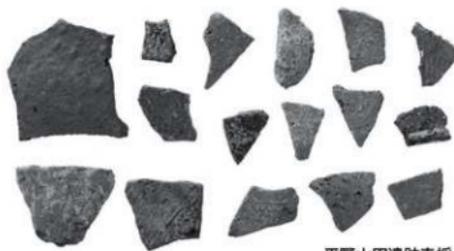
写真撮影を行いながら踏査する。

- (5) 調査結果

調査地は、梨郷の平野地区に位置する。出土地点と思われる範囲は、平野古窯跡の立地する尾根から北へ 2 つ目の尾根の北側に流れる小河川の両岸にあたる斜面（字山田）である。現況は畑地、葡萄園、堆肥場、荒廃園地である。小河川は深い谷川を成し、出土地点と思われる範囲を南北に分けていることから、河川南側を先に踏査した。農道が東南に折れる地点の畑を中心に須恵器片の散布が見られた。地形は緩斜面で傾斜方向は北西～西向きである。下草の繁茂により遺跡の広がりを十分に把握しきれないことから、今後も継続調査が必要である。

地元の方に話をお聞きしたところ、今次調査地の東南側の尾根を越えた湧水が多い浅谷地形の奥に斜面が不自然に窪んでいるところがあり、遺物が拾えたとのこと。未確認の窯跡である可能性もあり、今後調査の必要がある。

次に河川北側を踏査した。出土地点と思われる場所に堆肥場が建てられ、遺物は確認できなかった。しかし、出土地点情報に一致する状況が確認できることから堆肥場付近が収蔵遺物が出土した地点である可能性が高いと判断された。谷川の両側とも字山田であること及び山田遺跡が市内に別に存在することから、新規遺跡の名称は平野山田遺跡とする。



第 14 図 平野地区踏査範囲図 S= 1/600

14 砂塚字堂ノ越、下八ッ口遺跡

- (1) 調査日 平成27年8月25日
- (2) 調査場所 南陽市砂塚字堂ノ越、字下八ッ口
- (3) 調査目的

対象地は、遺跡分布調査未実施地である字堂ノ越と下八ッ口遺跡の範囲である。防災無線の鉄塔整備計画があることから事前に踏査を行い遺跡の保護を図る。

(4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査する。

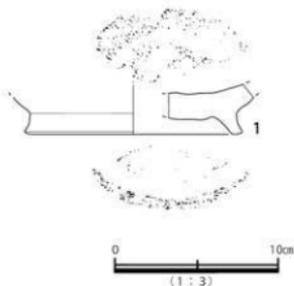
(5) 調査結果

①砂塚字堂ノ越（天王遺跡隣地）

字堂ノ越は、天王遺跡の隣地にあたり、自然堤防上に古い墓地在立地している。墓地は1辺15m～20mの方形壇状の地形上につくられており、壇は北辺で1m以上の高さがある。天王遺跡では古墳が確認されており、当該地の東南には字名「塚原」があることなどから、方形壇が古墳の残存である可能性も考える必要がある。壇の南東側の畑で石器の石材（硬質頁岩）を表採した。昭和60年頃の市史編さん関連資料に字堂ノ越に古墳状の塚が2つあり、そのうち墓地のある塚付近から土器や石器を採集したという記録と位置図が残ることを後日確認した。表採地点が今次踏査地と一致することから天王遺跡の範囲拡大が必要であろう。

②下八ッ口遺跡

防災無線鉄塔建設予定がある砂塚公民館敷地内を踏査。敷地内には木造の恩賜郷倉が建っている。予定地は盛土されているとみられ遺物は確認できなかった。敷地縁辺で近世とみられるすり鉢片（第14図）を表採した。



第15図 下八ッ口遺跡出土遺物実測図



第16図 砂塚地区踏査範囲図 S=1/6000

15 打越遺跡

- (1) 調査日 平成27年8月25日
- (2) 調査場所 南陽市漆山字打越、字屋敷浦
- (3) 調査目的

対象地は、遺跡分布調査未実施地及び漆山館跡の範囲である。館跡の所在する山付近の一部が山林伐採されていたことから、開発の有無確認と遺跡台帳整備のため踏査する。

- (4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査する。

- (5) 調査結果

漆山中学校跡地から谷沿いに北へ農道を進み珍藏寺の墓地に出る。西斜面の木が広く伐採されており谷部から尾根が見える。確認したところ、伐採されている尾根は周知の漆山館跡の範囲外であった。念のため伐採地点の尾根治いに北へ踏査したところ、尾根南端部に堀切1箇所とマウンドかテラス状の地形が確認された。おそらく曲輪と思われる。漆山館跡の範囲を北に広げる必要がある。後日地権者に確認したところ、当該地に造成工事等の予定はなく管理上立ち木を伐採したとのこと。

漆山館の北西側の谷部、山裾に広がる南西向き緩斜面の字打越の畑で石器を数点表採した。小川に面し、日当たりが良いことから縄文時代の集落跡がある可能性もある。新規遺跡である。



打越遺跡表採石器



第17図 漆山字打越・字屋敷浦踏査範囲図 S= 1/5000

16 稲荷山物見跡、阿弥陀山物見跡

- (1) 調査日 平成27年4月14日、28日、5月2日
- (2) 調査場所 南陽市羽付字手代森、字稲荷山、字平林、字阿弥陀山、字手代山
- (3) 調査目的

山間部の古墳は、梨郷(竹原)～梨郷(平野)地区の古墳群や赤湯(上野)地区の古墳群等が把握されているが、これら古墳群の中間地点にあたる梨郷(和田)から宮内の山地は遺跡未確認地が多いため、遺跡台帳整備のための踏査を行う。

(4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査する。

(5) 調査結果

① 稲荷山物見跡

漆山小学校西に位置する字手代森付近の山々を踏査した。字坂之下付近から東へ農道を登る。山頂に稲荷神社が祀られており石段の参道が整備されている。尾根東側の沢からの道はつづら折りになっている。稲荷神社は独立する山頂の平坦面に建てられている。山頂から南と東方向へ枝尾根が延びており、北側の山に続く細尾根が二重堀切で断ち切られており、中世城館址と判断される。稲荷神社の西斜面下には古道が見える。

稲荷神社東側の枝尾根を踏査した。尾根はなだらかな自然地形である。尾根両側は急斜面で帯曲輪等は見られない。東の尾根は途中でさらに南と東の枝尾根に分岐する。分岐後の南の尾根上には3箇所にマウンド地形が見られるが自然地形とみられる。

稲荷神社南側の枝尾根を踏査した。尾根は途中まで参道となっている。参道が東西に道別れる地点から南側の尾根は自然地形の瘦尾根である。字手代森から阿弥陀山に移る付近で尾根が葉研堀に深く断ち切られており、その南側の阿弥陀山山頂は広く平坦になっており眺望が良く物見の可能性がある。阿弥陀山と稲荷山は距離があるため、それぞれ別の中世城館址としておく。

稲荷神社から北側の二重堀切を越えてさらに北側の尾根を踏査した。急な尾根を登ると主尾根南端に小規模な曲輪を確認、曲輪の西斜面下に南北に走る古道が見える。曲輪の東方向に平坦でゆるやかな尾根が延びている。曲輪の北西方向には細い平坦な尾根と尾根に並行する帯曲輪状のテラスが存在し下方に古道が並走する。古道を監視する物見としての機能が考えられる。新規遺跡である。



第18図 稲荷山物見踏査範囲図 S= 1/5000

②阿弥陀山物見跡

阿弥陀山の背後の大きな堀切と山頂の平坦面を確認後、その他の斜面に曲輪等があるかどうか確認のため、字手代森の不動尊方向から登り堀切を略測したあと阿弥陀山の山頂に登る。平坦部西北側付近には土塁状の地形が残る。平坦部を略測し、東側に延びる尾根を踏査した。尾根上はゆるやかに東に延びるが、両側の斜面は急で南側は崖である。尾根を戻り途中から南斜面を踏査したところ数箇所のテラスと腰曲輪的な細いテラスを確認した。

阿弥陀山は、薬研堀の堀切を持ち山頂の平坦面を主郭とする小さな城館址若しくは物見としての機能が考えられるが、稲荷山も阿弥陀山も堀切を有するものの帯曲輪等の防御施設が少ないことから、物見跡としておく。新規遺跡である。



第19図 阿弥陀山物見跡踏査範囲図 S= 1/5000

17 羽付字兒子神周辺

- (1) 調査日 平成27年4月14日
(2) 調査場所 南陽市羽付字兒子神、字兒子神浦、字坂之下
和田字毘沙門沢、字宝島、字天神平

(3) 調査目的

遺跡地図整備のため遺跡分布調査未実施地について踏査する。稲荷山物見跡・阿弥陀山物見跡が確認されたことから、西隣に位置する字兒子神浦の尾根について踏査を行う。

(4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査する。

(5) 調査結果

字坂之下から踏査を開始し、その西側にある兒子神浦の尾根に東から農道沿いに入る。字兒子神浦の尾根は南東と南西方向に二股に分かれており、初めに南東方向の尾根を北から踏査した。北方の山体と接する地点で農道が尾根を断ち切って横断する。堀切の底を農道に利用しているような形態であるが、稲荷山物見跡や阿弥陀山物見跡でみられる堀切に比べ浅く、館に関連する堀切とは言いがたい。農道から外れて、南東方向の尾根を踏査したが、地形は自然地形であった。

続いて字宝島から孔子神社へ踏査し、孔子神社の裏山にあたる字兒子神浦の南西方向の尾根を南から踏査した。字宝島では地元の方から周辺のお話を伺った。孔子神社の東側に穴（種芋等の貯蔵穴）があり狐が棲んでいたのも、孔子神社裏山を狐山と呼んでいた。毘沙門沢に毘沙門天があったが梨郷神社に合祠し今は何も無いとのこと。字名の宝島（タカラハタケ）は、タタラ（製鉄遺構）関連地名として注意が必要である。尾根の麓から踏査し、孔子神社の東側の山の中腹に坑道入口を思わせる穴が穿たれていることを確認した。穴は横幅約1m、開口部の現況高さが約80cm、内部の高さ約150cmで、入口から数m先で右に曲がっている。尾根上を踏査し西側斜面から字毘沙門沢方向に下る。尾根上及び斜面は自然地形で人工的改変は特にみられない。館跡や古墳は確認できなかった。今後、この地域の山頂方向の確認が課題である。



第20図 羽付字兒子神浦踏査範囲図 S= 1/5000

18 竈山館跡

- (1) 調査日 平成27年4月14日、16日、24日、27日
- (2) 調査場所 南陽市和田字竈山、字竈ケ入、字宿ノ東、字東大浦、字沢田、字八幡下、字沼沢、字狩野

(3) 調査目的

遺跡地図整備のため遺跡の詳細把握を目的に踏査する。竈山館は平成7年にその一部を確認しているがその後調査が継続されなかったため遺跡台帳上の位置が誤っているなど不明確な点が多く全体を把握していないことから改めて調査を実施する。

(4) 調査方法及び内容

GPS機能付カメラ等による写真撮影と簡易略側図を作成しながら踏査する。

(5) 調査結果

①字竈ケ入、字宿ノ東、字東大浦

子易神社の管理者や周辺農家の方々から周辺の歴史、神社及び祭について地元で伝わる話をお聞きしたが、竈山の城館址については地元には何も伝わっておらず、まったくわからないとのことであった。子易神社境内から尾根（字竈山）、西側の谷（字東大浦）を踏査した。尾根南側の二重堀切を確認し、尾根の西側谷方向に踏査する。竈山西側の谷部（字宿ノ東、字東大浦）では館に関連するような遺構等は確認されなかった。

②字竈山～字沼沢・字狩野

子易神社東側にある幾つかのテラスの略図を取りながら尾根に登った。尾根南端にも2箇所小規模な曲輪がある。二重堀切の奥は切岸となる。西側斜面から尾根上につづら折りに細道があり小規模な腰曲輪が続く。尾根頂には段差50cm～1m程度の小規模な曲輪が階段状に北に続く。尾根両側斜面の中腹には帯曲輪が存在し、片側3箇所ずつ計6箇所の壘状崩落地形を有している。尾根最高所の曲輪の北側に一段低い曲輪を配した後、大きな二重堀切で尾根を断ち切っている。以上から竈山は、尾根の最高部付近を主郭とする中世城館址（竈山館）と考えられ、館の形状は調査地東側に所在する周知の赤松山館に類似している。

さらに北の山地に館跡が存在するかどうか確認のため、北側の二重堀切を越えて踏査した。尾根は自然地形となり、テラスや曲輪等は確認できない。尾根北端の最頂部で尾根が東西へ分岐するが、その山頂部は円形塚状の地形になっており西側にわずかにテラス帯を持つ形状である。直径は底辺で7～8m、上面で約3.7m。円墳状であるが、小規模でありながら分岐後の西と東南方向の尾根上には類似の塚状地形は無く単独であることなどから古墳よりも経塚等信仰に関わる塚の可能性を検討する必要がある。

分岐した尾根を西に進むと土砂採石場があり、全城院北側の山の尾根となる。字狩野の山頂は平坦になっており石祠（虚空蔵様）が祀られているが、周辺には堀切や曲輪等は確認できないことから城館址とは考えにくい。山頂から南は急な直線の下り道となり、梨郷神社東側に位置する稲荷神社に出る。

③字竈ケ入、字竈山、字沢田、字八幡下

字竈山は、平面で見るとちょうど竈の両袖のように2つの尾根が南方にせり出し、煙出しにあたる位置が山頂になっており、両袖の間が字竈ケ入という地名でまさに竈のような地形である。字名の「カマ」地名からは、竈跡、炭窯跡及び製鉄遺構等の存在も注意しなければならぬが、今回は確認されなかった。

未踏査である竈山館の東側の谷（字竈ヶ入）とさらにその東側の尾根（字竈山）を踏査した。

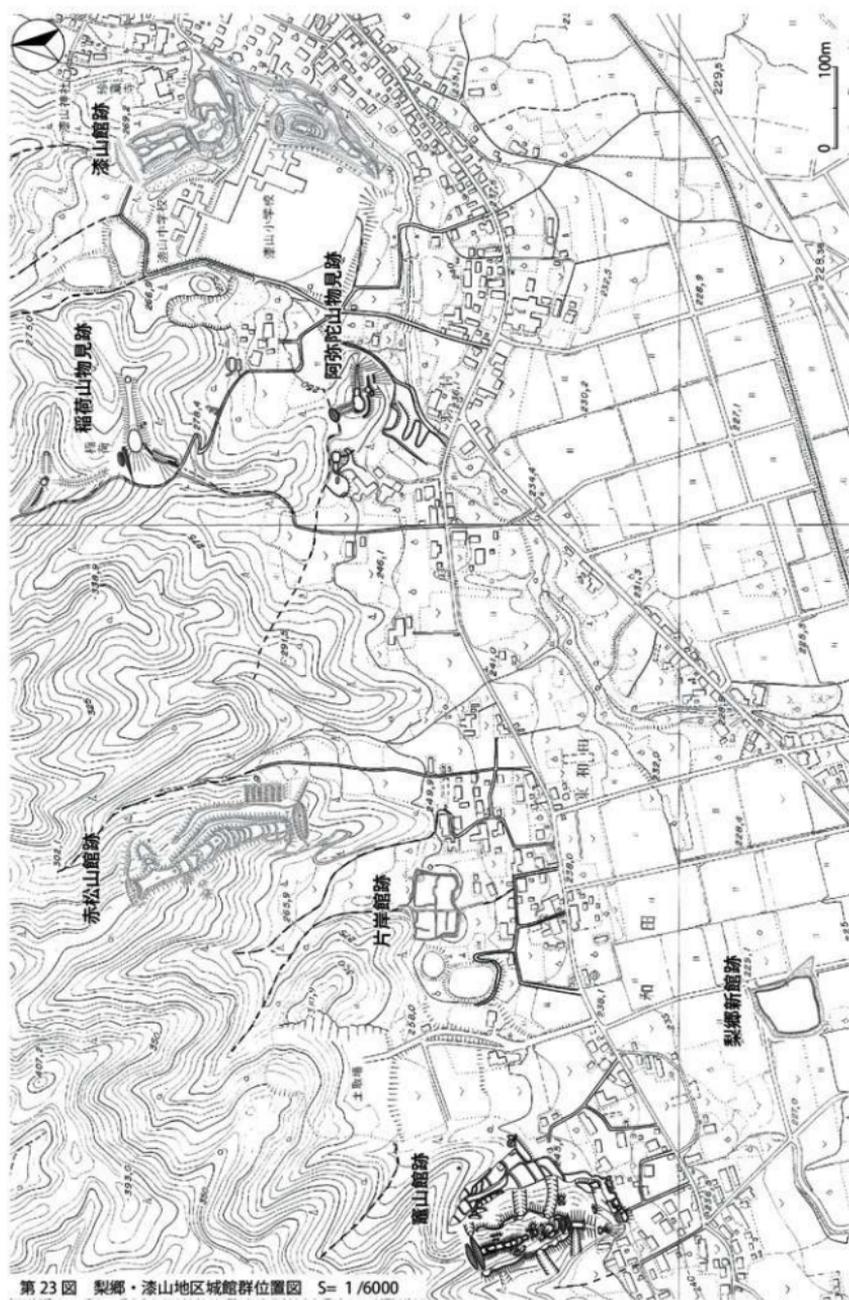
竈山東側の尾根に東（碎石場側）から近づいたが、尾根の東側は急峻な谷川（字沢田）となっており登ることができず南へ回り込む。尾根南端のテラスに神社がある。そこからさらに西側へ踏査した。谷の内側には多くのテラスが組み合わさっていることが確認される。1箇所の湧水窪地（井戸か）と3箇所の古墓地があり、その付近には土塁状の遺構も見られる。竈山館東斜面に続く曲輪群も確認されることから、この谷の内側にも館関連施設や寺跡等、何らかの施設があった可能性がある。谷部の略測後、南端の神社から尾根へ踏査した。途中1箇所に小テラス状の地形を確認したが、それ以外は自然地形と判断される。全般に両斜面は急峻だが、尾根上は比較的なだらかで整地せずとも小規模な陣地を確保することは可能な広さを有する。竈山館は規模は小さいが小規模な曲輪を連郭させ、斜面に豎堀状の崩落地形を有する特徴を持つ。新規遺跡である。



第21図 竈山館跡周辺字境図



第22図 竈山館跡踏査範囲図 S=1/4000



第 23 图 梨郷・漆山地区城館群位置图 S = 1/6000

19 金山地区城館群

(平館跡、金山橋山館跡、天ヶ澤館跡、田中館跡、立石館跡、七瑳古山物見跡)

- (1) 調査日 平成27年6月2日～7月3日
(2) 調査場所 南陽市金山字平館、字七瑳古山、字天ヶ沢、字大平、字大平山、字谷地田、字明神前、字明神堂、字立石、字田中、字堂田、字官代林、字寺清水、字八幡山
(3) 調査目的

金山地区には平館(色部館)跡が所在するが、文献では宮沢城以上の要害性を持ち、比較的大きな枝城とされる金山城の実態把握(位置と範囲の確認)のため遺跡分布調査未実施地となっている金山地区の丘陵、山地を中心に踏査を行う。

(4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査する。文献調査を行うとともに、明治8年字限図及び昭和23年空撮写真等をもとに歴史地理学的手法による地形の分析を行い、立地環境と埋没遺構の把握を行う。

(5) 文献調査結果

金山地区には上杉家家臣である色部氏が新潟県村上市の平林城(国指定史跡)から移り住んだと伝えられる平館(色部館)がある。色部氏は、上杉家が慶長3年(1598年)の会津120万石への国替えに伴い4868石から1万石に加増され、金山城に入ったとされる。

①金山城の築城と廃城時期について

南陽市史では、尾崎文書(市史資料集10号)を元に、1598年3月に宮内城(宮沢城)に入った尾崎重誓が、最上領と接する小滝口の押さえのために宮内城の枝城として金山に砦を構え、子息土佐重雪に15騎の家臣を付けて固めさせ、尾崎氏が同年9月に福島城へ移る命を受けたとき、宮内城を破却し、要害の地である金山城に色部氏を移居させた。色部氏は1598年3月に米沢市窪田に入り、9月の知行割替によって金山城代に任じられたとしている。その3年後の慶長6年8月上杉氏は米沢30万石に減封され、色部氏も3333石となり米沢市へ引き上げ、金山城は廃城となり城郭は焼き払われたという(米沢市史資料10号)。

②金山城の位置づけについて

上杉景勝は、120万石の領土を統治するため、会津の府城のほか各地の要地に支城を設け、重臣を城代として配置した。米沢城の直江兼統を筆頭に28の支城が置かれ、その支城のひとつとして金山城が出てくる(米沢市史第2巻)。置賜地方に置かれた支城は下記のとおりである。金山城は、当地域の有力城郭の一つに列し、城代の知行高も他城に比べ遜色がない。色部氏には宮内村、郡山村など金山城付近の14カ村に1万石の知行地が給せられている(色部家知行目録)。

支城	城主・城代	知行高	知行地	石高	知行地	石高
米沢城	直江山城守兼統	60,000	宮内村	2763石9斗5升	落合村	665石8斗4升
高畠城	春日右衛門元忠	4,000	郡山村	800石	高梨村	398石6斗
金山城	色部与三郎光長	10,000	法師柳村	332石5斗	坂井村	181石3斗8升
中山城	横田式部少輔信俊	3,000	真板柳村	327石1斗1升	伊佐沢村	1568石5升
荒砥城	泉沢河内守久秀	11,000	嶋貫村	167石5斗2升	鴨生田村	1218石6斗8升
鮎貝城	中条与次三盛	10,000	長とろ村	300石3斗6升	池黒村	956石4斗6升
小国城	三瀬等在番	-	中ノ目村	361石3斗8升	二色根ノ内	148石1斗6升

関が原の戦いにおける上杉氏による最上出兵の際には、6方向からの最上攻めルートのうち2ルートに色部の名がみられる。荻野中山口の直江本隊に色部衆（金山城・色部竜松歳配下）、小滝口には色部衆とある（米沢市史第2巻）。

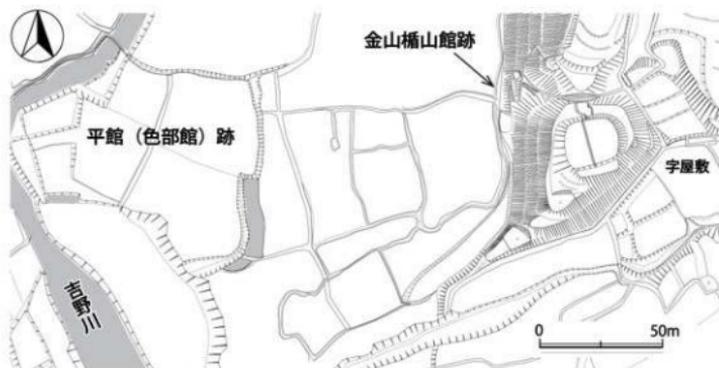
現在、金山城に比定されている平館跡は、平地に築かれた平城とされ、周囲の水田からの比高はわずかに約1m、平面形態は不整四角形で長軸150m、短軸80mと小規模である。他の支城に比べると小さいうえに、堀、土塁、切岸といった防御施設も少なく宮沢城を捨てて要害の地に移したという記述と一致しない。これらのことから金山城に関する従来の調査が不十分で、平館跡周辺の丘陵や山地に本来の金山城跡（未発見の城館址）が存在する可能性もあると考えられた。

(6) 現地調査結果及び明治8年字限図等調査結果

① 金山橋山館跡（字七瑳古山）

金山公民館での情報収集で、平館の東側にあたる字七瑳古山の南端に位置する台地状の山を通称「橋山」と呼ぶことを確認した。また、場所は不明だが橋山付近には「馬場」と呼ばれる場所があり、橋山の南側（字大平）には「色部様のお堂」と呼ばれる祠もあることが判明した。

字平館の東、道路北側の尾根の先端に古い墓地がある。旧地形ではこの尾根先端は低地に小高く突き出し南側は谷川になっている。この墓地のある平場も曲輪の可能性はある。墓地の背後は切岸になっており、その脇斜面から上り、西及び南斜面に曲輪が何段か存在することを確認した。山頂は広く平坦になっており主郭と思われる。その北側の尾根は堀切で分断されており、水田に面した主郭西側の斜面は高さのある切岸状の急斜面が北へ続く。中世城館址である可能性が高く、新規遺跡の金山橋山館とする。曲輪は一段一段の高低差が大きく、主郭と東側の曲輪の高低差は約4.2m、市道から主郭までは10m以上の高低差がある。主郭東側のコの字に入り組んだ谷地形が枡形のようにも見えることから、今次確認した金山橋山館の東側に城郭域が広がっており、当該館はその一部に過ぎない可能性もある。



第24図 平館跡・金山橋山館跡略測図 S=1/2000

②金山橋山館跡北側の尾根（字七瑾古山）

金山橋山館北側は南北方向に尾根が続き、山の西斜面は高い切岸状になっている。尾根上には何段かの曲輪状の平場があり、崖の肩部には幅約1mの帯曲輪とも考えられる細長いテラスを1段巡らす。尾根東側の浅谷地形に面した緩斜面にも数段の帯状テラスや階段状テラスがあるが荒廃園地のため営農によるものか遺構かの判断は困難である。尾根は北端に到る手前で谷を形成し一旦途切れ、台地北西端で再び隆起し東へ折れる。

③金山橋山館跡東側の台地上（字七瑾古山）

金山橋山館東側の丘陵地は、コの字状の谷地形に面する斜面が切岸状になっている。市道沿いの南斜面には小規模な曲輪群が見られる。コの字状の谷地形が開く南側の字名は「屋敷」で、祖先が越後から来たと伝わる家があり、色部氏家臣等の屋敷が立地していた可能性がある。地元住民の話によれば、コの字状の谷地形の中やその西側の山上にはかつて部分的に石垣状の石積みが残っていたという。

コの字状谷地形東側の切岸の上にはやや広い緩斜面が北へ広がる。削平は甘い三の丸、二の丸的な曲輪の可能性も検討が必要である。その1段上に切岸と小曲輪を有する南向きの緩斜面がある。現況は桜桃園で緩傾斜地は途中からやや急な斜面になり丘陵北半へ続く。この緩斜面も曲輪の検討が必要だが果樹園により崩されており判然としない。北半に至る斜面の最高地点付近に石祠があり宮内の町が一望できる。丘陵北半は山林と藪で熊が多く出没することから踏査を控えた。石祠から東は斜面が緩やかに低くなり、山ノ神社から上る農道の付近で谷状に窪み、東に続く台地を区切る。

山ノ神社の農道から東側は、ゆるやかな起伏を持つ果樹園が広がり、地権者によればこの丘陵は開墾のため広く重機で切り崩して均したとのことである。城郭遺構があったとしても大半が既に破壊された可能性が高いが、台地の北側縁辺に尾根を削り残した土塁上の高まりが東西に長く伸びており、その北側斜面にもテラスをいくつか見ることができることから、城館址がこの台地全体に広がっていた可能性もある。この台地の南側、市道までの南斜面は藪と山林で今回は踏査できなかった。継続調査が必要である。

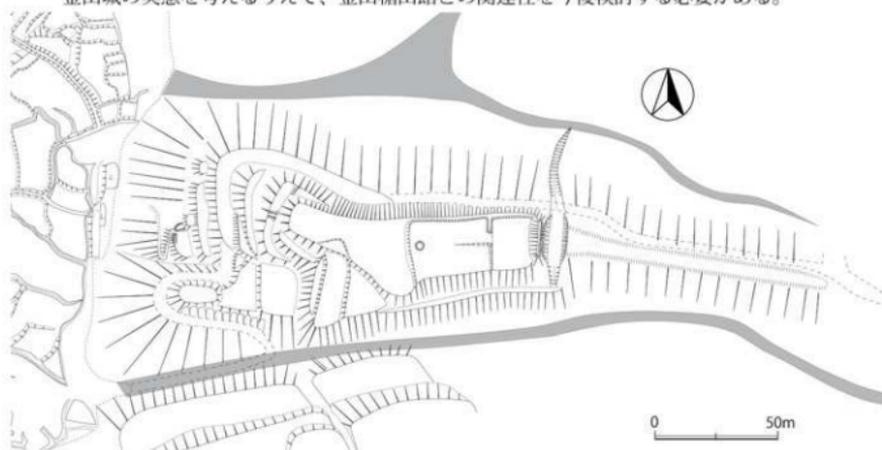


第25図 金山橋山館の北側・東側略測図 S=1/4000
※未踏査エリア有り。一部航空写真読取含む

④天ヶ澤館跡（字天ヶ澤、字七瑳古山）

金山橋山館跡の所在する台地の北側に字天ヶ澤一、天ヶ澤二の急峻な谷に挟まれた独立尾根が東西に延びている。尾根を通る農道沿いに東から踏査し、堀切が尾根を断ち切っているのを発見した。堀は箱堀で幅は上端約10m、下場で7～8m、高さは約4mで尾根を断ち切り両側の谷斜面下方に豎堀として延びる。

この堀切を基点に東側と西側の尾根を踏査した。東側は細尾根で城郭施設は確認できなかった。西側では、堀切上に土塁があり、西に主郭と思われる曲輪が広がっている。両谷側の斜面には帯曲輪等がみられ、尾根の西端には多くの曲輪が確認された。これらのことから、当遺構は中世城館址である可能性が高く、天ヶ澤の谷に挟まれた山であることから新規遺跡の天ヶ澤館跡とする。館の正面は西側とみられ、西斜面につづら折りの道が一部残存する。城館址西側に広がる小扇状地の扇端部の字名は字谷地田で、広く湿地帯であったと思われる。遺構は、現農道で曲輪等の一部破が壊されており、北側は帯曲輪を道路にしている可能性がある。天ヶ澤館は山城として単独でも要害性が高い。金山城の実態を考えるうえで、金山橋山館との関連性を今後検討する必要がある。



第26図 天ヶ澤館跡略測図 S= 1/2000

⑤七瑳古山物見跡（字七瑳古山）

七瑳古山は急峻な断崖絶壁の岩山で西側から登ることはできない。東から農道を通り山頂付近を踏査した。山頂東側は谷地形で、山頂西斜面には直径2mほどの窪地があちこちに掘られている。鉱山か松根油採取跡か掘削理由は不明である。尾根はやや広く山頂の手前に小規模な谷状地形がある。山頂は平坦に整地されており、山頂南側は1段高くテラスが作られ、石祠と灯籠があり参道跡が尾根沿いに南へ続く。山頂からの眺望は非常に良く、物見跡の可能性が高い。

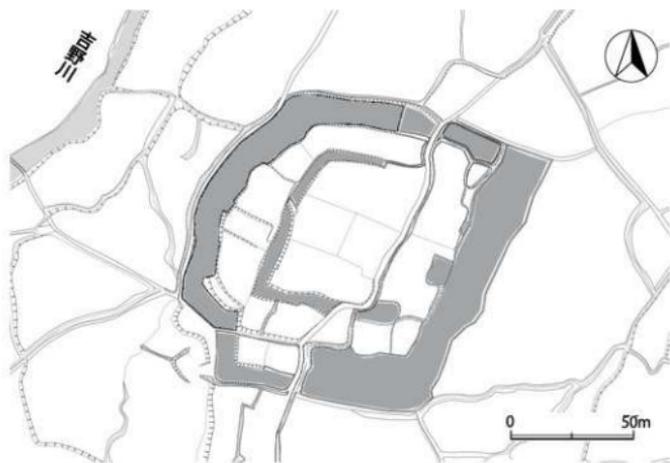


第27図 七瑳古山物見跡略測図
S= 1/2000

⑥ 田中館跡（字田中）

平館から北へと吉野川による高さ1～3m以上の河岸段丘が1km以上続いており、段丘は字田中付近から徐々に高低差を減らしながら、竜ノ口明神の付近まで続く。吉野川方向からみると段丘地形が総構造的に平館～天ヶ澤館を囲み、その要害性を高めていることがわかる。

平館周辺は耕地整理された水田地帯が広がり、旧状は既に分からない状況になっている。旧地形を把握する目的で平館周辺の明治8年字限図をデジタルトレースし土地利用図を作成、現地確認や航空写真も利用しながら土地の高低を読み取り字限図上で旧地形を把握した。字限図でも発達した段丘が上流に向かって延びることが明瞭にわかることから、南から北へ順次字限図を調査したところ、現地踏査で河岸段丘の高さが変化することを確認した字田中において、一部二重に堀で囲まれ1辺の長さ約100mの方形の平城が存在していたことが明らかとなった。遺構は既に地表面では確認できないが、中世城館址として把握し字名から田中館跡とする。新規遺跡である。



第28図 田中館跡概略図 S= 1/2000

⑦立石館跡（字立石、字河原、字明神堂）

田中館跡からさらに上流に続く河岸段丘の先に竜ノ口神社が祭られている。この竜ノ口神社が在する地点を東南角として西と北に続く堀状の地形があることを明治8年字限図で確認した。田中館跡と同様の方形地割が存在する可能性が高く、昭和23年の航空写真でも、堀の内側に方形の高燥地があり、竜ノ口神社を含む水田がその高台を囲むように水分量が多いことを示す黒色を呈することを確認した。新規遺跡の立石館跡とする。現地踏査を実施し、字明神堂付近の南側の堀状地割は現在でも1段低い水田が連なっていることを確認したが、西側の堀状地割りは、近年開通した県道の真下に位置しており確認できなかった。

当該地の字名は字立石である。付近に巨石等は見られず、字名の立石の立は「館」の可能性があり、竜ノ口神社は、立石館の辰ノ口（東南方向の入口）の名称の名残とも考えられる。これらのことから当該方形地割は、河川の氾濫で西半を削られた古館跡の可能性が高い。立石館跡の東に立地する七堯古山物見は眼下に立石館跡を見下ろす位置にあたる。



第29図 立石館跡概略図 S=1/2000

田中館跡も立石館跡も既に耕地整理で削平されており文献資料も無いことから、築城時期や存続期間は不明であり金山城との関係も不明である。しかし、廃城になっていた場合でも堀の機能はあったと思われることから、色部氏が金山城に入った時代でも、かなりの要害性があったものと考えられる。また、立石館跡と田中館跡の背後（東側）には広範囲に谷地が広がり、金山橋山館跡や天ヶ澤館跡の前面にまで広がっている。以上のことから各城館の存続期間は不明であるが、総構え的な自然地形を有効に活かした金山地区城館群とも呼べる要害の地に金山城が置かれたことが伺える。

また色部氏の家臣団には筆頭存在の田中氏がいるが、金山城の周辺に字名として田中が存在し、そこに館跡があることは興味深い。今次調査した金山橋山館、天ヶ澤館、七堯古山物見は全て七堯古山になっている。この範囲が一字名で一つのつながりのある範囲として認識されていることは、金山城の所在地や実態を考えるうえで留意する必要がある。

⑧字寺清水（寺跡）

色部氏は、越後（神林村）から金山へ千眼寺^{せんげんじ}を移し、上杉氏の滅封後に米沢へ移したとされるが金山における寺院跡（千眼寺跡）は明らかになっていない。

千眼寺跡は、伝承等から金山橋山跡南側の大平山近辺の可能性はあるが、今次の明治8年の字限図による調査において、字寺清水という地名が残る地点に小方形区画が並列する地割りが見られ、その北側には中央に島を残す池（庭園遺構か）の存在が読み取れた。山際には墓地の表示もみられることから、この付近にも寺院があった可能性が高い。

金山地区には色部氏に関連する尼寺があったという伝承が伝わっており、尼寺である可能性がある。

現地を確認したが、耕地整理がなされて水田になっており、池跡等は確認できなかった。

宮内野史（昭和16年羽田隆助著）に、岩瀬地図（米沢市立図書館蔵）に「色部氏の叔母と称せられる人、今、寺清水と称する所に居を構え、永住した。」と記されていることを後日確認した。



第30図 字寺清水の寺院跡概略図
S= 1/2000

⑨字八幡山周辺

七塚古山の西にあたる八幡山を踏査した。山裾付近の墓地の隣に一字一石経塚があるとの情報があったが位置は確認できなかった。山の上の八幡神社周辺の地形を把握するため石段を登り神社拝殿に至った。神社は西向き平坦面に建っている。背後の東側の山頂は周知の地藏山物見跡となる。東側を下り、三ノ入沢遺跡方向に出た。途中、古い墓地があり近世板碑を確認した。



第31図 字八幡山踏査範囲図 S= 1/10000

⑩大平山周辺（字大平）

金山榑山館跡の南に位置する大平山は空中写真で見ると山体の南と北の斜面に大きな谷状地形が数本ずつ並列しており、大きな竪堀のように見える。

字大平の山を南東端の道路から東方向へ尾根沿いに登り踏査した。山は東西方向に長く、山の南斜面は山腹以上まで果樹園が広がっている。尾根南端付近では斜面の南北にテラスが存在し尾根は平坦であるが途中から北側が一段高くなる。東へ数十メートル進んだところで1.5 m以上の急斜面の段差を生じるが切岸とも異なる印象である。その上はまた平坦で東に続く。北側斜面にはテラス等はあまりみられない。山の中地点近くの尾根上には果樹園があり、そこから尾根上平坦面の中央を山道が東へ続く。道は窪んでおり北側に盛り上げた土が積まれている。

山の南・北斜面の並列する谷状地形は、幅が広く山頂平坦面の肩から山裾まで続く。谷状地形は1本1本を見ると稜がなだらかで人為的な印象は薄い。

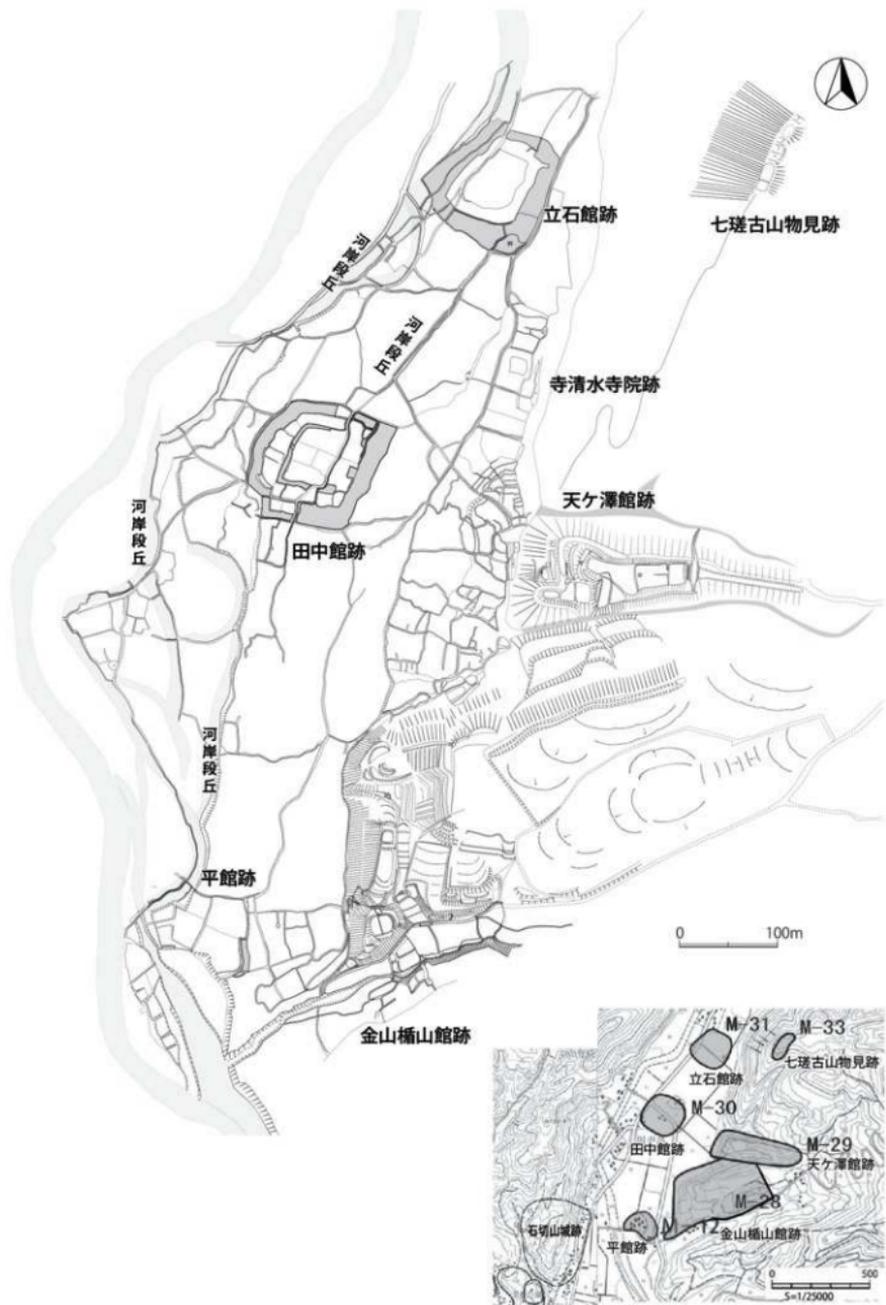
尾根東端に達すると深い谷地形となり東側の山地と自然に切り離されている。尾根東端付近の南斜面には果樹園跡とみられるテラスが多い。

次に大平山の東側を区切る谷を北から踏査したが、昨年的大雨被害で斜面が崩壊し、復旧工事がなされた後であったこともあり、遺構等は把握できなかった。

大平山は、尾根上が平坦で山の両側斜面には谷状地形が並列するが、堀や土塁等は見られず尾根上平坦面に曲輪的な区画も確認できない。南側斜面を中心に多くのテラスが見られるが果樹園による開発の可能性が強い。このことから大平山については現況からは直ちに中世城館址と呼べる状況は確認できなかった。



第32図 字大平踏査範囲図 S= 1/10000



第 33 図 金山地区城郭群概要図 S= 1/5000

20 石切山城跡

- (1) 調査日 平成27年7月6日～8日、30日、8月3日、19日
- (2) 調査場所 南陽市宮内字高日向山・金山寺裏山(字寺裏、通称「石切山」)
- (3) 調査目的

遺跡台帳整備のため分布調査未実施地について踏査する。金山城調査に関連し地形図を確認していたところ平館・金山橋山館と吉野川を挟んで向かい合う西側の山頂に堀切状の地形が見られたことから地形の成因を確認する。

- (4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査する。文献調査を行う。

- (5) 調査結果

- ①踏査結果

調査地は宮内地区と金山地区の境となっている山で、地元では通称「石切山」と呼ばれている。山肌には凝灰岩系の岩の露出が多く見られ、戦後しばらくまで石材の切り出しを行っていたという。昭和22年の航空写真でも山の斜面に石切場と思われる地山露出地点が写っている。石切山の西側には尻無沢と呼ばれる谷があり堤がつくられている。尻無沢を挟んで対岸に慶海山館が立地し、そのさらに西に宮沢城が立地する。

尻無沢の下堤前から農道を登り、上堤から東に折れて道沿いに踏査し、地権者からお話を伺った。尾根の最高所付近の南斜面に果樹園が広がる。かつて尾根の途中に山ノ神があったが現在は尾根頂に移転したとこと。

尾根を南に下り、藪に入るとすぐに西と東の両方から急峻にめぐりこんだ深い豎堀状の谷とその掘り残しによる狭い土橋が現れた。土橋を越えると広い曲輪状のテラスが広がる(曲輪Ⅱ)。東は宮内～金山地区が一望でき、東崖は急峻である。西側は半ばから約1m低くなり、いくつかの小テラスに分かれており曲輪と思われる。各曲輪の角等には粗雑な石垣がみられる。この西斜面一帯は複雑な構成になっており、曲輪と空堀、土塁、石垣等が見られ、連続折虎口と思われる構造も見られる。土橋による尾根の分断やこれらの構造から当該尾根は中世城館であった可能性が高い。字名の高日向山は広範囲な地名であるため、通称名から石切山城跡とする。新規遺跡である。

曲輪Ⅱの南端にも広く急峻で深い断崖のような豎堀と土橋がみられる。この豎堀の内側は岩が露出しており石切り場として利用されていたと思われる。土橋を越えると緩やかな登り斜面となり正面と左側面に土塁があり、土塁の切れ目から入ると広い平坦面がある(曲輪Ⅰ)。石切山城は、曲輪Ⅰ、Ⅱを土橋で連結する連廊式の城館址であると思われる。土塁北端の土橋に面する地点は楕円形状に広がっており檜台と思われる。北端の土塁は東側で1段低くなりそのテラスは東斜面に長く突き出す。曲輪は中央の南北方向の土塁によって東と西に区画されており、西側の曲輪が1段低い。東の曲輪の東側下方には帯曲輪が見られる。眺望が良く、盆地内と宮内～金山中里までの山間、金山地区の城館群が一望できる。

次に曲輪Ⅰから南へ踏査した。曲輪Ⅰの南端から尾根沿いに下るといくつかの腰曲輪と思われるテラスが存在する。山の西～南斜面一帯は荒廃園地で曲輪が段々畑跡か判断が困難である。上場ラインが画的に直線で造成されている段は除き、登るには厳しい傾斜角度と高さを有する段を曲輪と見なして踏査したが、今回西斜面は踏査できなかつ

た。西斜面へ曲輪が存在する可能性や南側の腰曲輪が西に延びている可能性もある。山の東側は急斜面である。尾根の半ばには高さ1 m程度の円形の土壇があり、宗教的な塚等の可能性もあるが檜台ではないかと思われる。

曲輪Ⅱ西側にある独立尾根を踏査した。上堤から農道を上がるとすぐに南側に広いテラス(曲輪Ⅲ)が広がる。曲輪の背後には高い切岸が作られ、側面の南側には堀切と腰曲輪がみられる。堀切を越えた南側には狭隘な小尾根が残る。その周りの斜面は急峻に削られており石切り場であったとみられる。曲輪Ⅲの上にも背後に大きな切岸を有する曲輪がある。東側に瘦尾根が続き狭い曲輪がみられるが、その尾根の東端は三方が垂直に近い断崖の狭隘な尾根になっており、その崖下は石切り場であったと思われる。

山の東斜面の中腹を中心に踏査した。東側の山裾は急傾斜地の崩壊防止工事がなされており改変された斜面が多い。農道を上がるといくつかのテラスが果樹園や荒廃園地となっている。曲輪Ⅰ直下には広く緩やかに東へ傾斜するテラスがあり曲輪(曲輪Ⅳ)と思われる。その北側は自然の谷地形で分断されている。曲輪Ⅳの東斜面には多くの腰曲輪が確認できるが、踏査期間中、当該東斜面で急傾斜対策工事(県事業)が始まり一番下方の腰曲輪が工事にかかる状況となったことから、急速工事立会を実施した。工事はコンクリートによる法面保護で切土・盛土は行われなかった。

曲輪Ⅲ北側を通る農道の北側には広い平坦地が広がっている。その奥の桜桃園は切岸のように急な斜面をもつ高台に立地しており、この一帯も城郭の一部であった可能性もある。

石切山の北端地形の把握と堀切等の有無確認のため上堤から尻無沢東側の農道を北へ登る。堤塘から約500 m進むと山の尾根が大きな谷状に窪む地形に達した。谷底は幅約15 mで平らになり、現在は果樹園になっている。谷の両側の岸は傾斜がやや緩いが、谷底から尾根頂までの比高差は大きい。自然地形を活かした城の北端と見ることもできるが、さらに周辺踏査が必要である。

②文献等調査結果

連郭式の曲輪Ⅰ・Ⅱともに土橋で結ばれるという形式は市内では他に類例がなく、土橋を形成する堅堀も深く広い。石切山城の特徴と言えるこの堅堀は、石切り場にもなったと考えられることから、本来的に館に伴うものか、たまたま石切りによって生じた地形かが問題となる。全山が凝灰岩質の岩山でありながら2箇所の土橋とも東西両側から同じように掘り込まれていることから、石材産出地点の制約等により偶然この形になったとは考えにくく、堅堀が先に穿たれており、岩盤が露出していたところを岩石採集場として再利用したと考えるのが妥当と思われる。

昭和23年の空中写真では、曲輪Ⅰの東側では堅堀の近くで地面が露出している様子が伺えるが、西側の露出地点は堅堀から距離がある。曲輪Ⅱでは地面が露出している様子は見られない。これらの観察から、昭和20年代に東側斜面では曲輪Ⅰの堅堀付近、西側斜面では曲輪Ⅱと曲輪Ⅲの間の峡谷と曲輪Ⅰの北西斜面が石切場となっていたものと思われる。

また、明暦3年(1626年)に上杉綱勝は、北条郷において6000人を動員した大規模な鷹狩りを行ったことが知られている。綱勝は12月23日に赤湯御殿を立出し、「宮内村之内石切場」にある「御小屋場」にむかったとされる(南陽市史中巻)。市史では、

この御小屋場を川樋村と金山村の間にあつたらしいとしているが、宮内村の石切場と記されていることから、御小屋場は宮内にあったと考えるべきであり宮内から金山を一望できる石切り場とすれば、今次踏査の石切山が有力候補地となる。藩主が狩りをする際の臨時の御殿として城館址が利用されることがあるため、鷹狩りの際に宮内石切場に御小屋場を設けた理由のひとつとして城館址の再利用も考えられよう。

さらにこの時の様子を記した御狩場之図（米沢市立図書館蔵）には、「吉野川の西の山の名は、けいかい山、八森、平立、逢山」と記載されている。けいかい山は宮内の慶海山、八森山は金山中里地区の西に小字名「八森」が残る。平立山は、吉野川東側に小字名「平館」が残る。逢山は不明である。このうち「平立山」は現存小字名の「平館」とは、吉野川の東西で食い違いを生じている。単なる誤記の可能性もあるが平立（館）の地名が吉野川西側にまで広がっていた可能性もある。仮に平立山が現在の石切山を指すとすれば、石切山城と平館及びその他の金山地区の城館址との関連も検討すべき課題となろう。

以上のことから、石切山城は深い豎堀からなる土橋で郭を繋ぎ、粗雑ながら部分的に石垣を用いる特徴を持つ連郭式の山城であると思われる。位置的に元々は宮沢城に関連する城館であったとも思われるが、吉野川を挟んで金山地区の平館と向かいあうような立地であることから、小滝口（最上境）の押さえの要として機能したとも考えられる。城の範囲が宮内地区と金山地区に跨るため金山地区城郭群に含めることもできる位置にある。



第34図 石切山城跡踏測図 S=1/4000

21 宮沢城跡

- (1) 調査日 平成 27 年 8 月 5 日～ 11 日、20 日、21 日、31 日、9 月 3 日、7 日、9 日
- (2) 調査場所 南陽市宮内字抱齋神堂、字館の上(宮沢城)、字菖蒲沢、字山王山
- (3) 調査目的

対象地は、中世城館址である宮沢城である。宮沢城は昭和 58 年に測量図(地形図)が作成されているが、地形図では城郭遺構の詳細がよく判別できない欠点があり、江戸中期～後期に描かれた「宮沢城絵図」(以下「絵図」とする。)との検証もこれまで充分に行われてこなかったため、城の構造が明確でない部分が多い。特に宮沢城の北側(北館との間)の城郭構造が曖昧であるため、昭和 58 年地形図を元に略測図を作成しながら遺構の把握を行う。

(4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査し略測図を作成する。埋没している堀跡等についてボーリングステッキ調査を行う。

(5) 調査結果

① 踏査結果

従来、大手丸と称される曲輪は絵図の記載を基に、東側から直線的に入るという認識であったが、実際、大手丸と称される曲輪の形状は馬出に近く虎口は食い違い構造になっている。また絵図には大手丸、南丸(三の郭)、二の丸(二の郭)、本丸及び本丸北側に土手又は築土手が描かれている。これらは土塁と解されており、「土手」は地表面が土・草の状況、「築土手」は地表面に小石等が混ぜられて突き固められている土塁の状況を表現したと思われる。これら土塁は、現況では本丸北側の堀沿いに部分的に残るのみであるが、本丸の土塁は昭和 50 年代後半まで一部残存していたといわれる。

本丸東側の市道に面した直線的な堀については、絵図には「田」と記され、他の堀と同様の水色で着色されている。現況では市道より 1 m 以上高いテラス帯になっており堀であるとすれば、土塁を組み合わせた横堀ということになる。後日ボーリング調査により畝堀の可能性が高まった。

本丸への登城ルートについては、南丸から二の郭、二の郭から帯曲輪を通って本丸という流れが考えられる。現在は本丸の南側に本丸に登る農道が切られているが、この農道の二の郭から本丸南側の帯曲輪へと登る部分のみが本来の道ではなかったかと推測する。ここから帯曲輪に登り、帯曲輪を東に進んで本丸入口に到達する。絵図では、この本丸登り口から本丸内にかけて築土手状のものが描かれ、南側の大手道と北側の北館方向への道へ分岐する特異な構造となっているが、現地を見る限り本丸への坂道は幅が狭く、道沿いに土塁を築くようなスペースは無い。この絵図と現地での相違については、後日ボーリング調査により横堀の堀底道であったことが判明した。

絵図では大手丸以外に本丸東側の「中段」と記される曲輪から堀の外まで続く道が描かれているため現地を確認した。堀上には土橋が構築され、道はコの字上に中段跡まで続き、途中、馬出状の腰曲輪と土塁を有する。絵図ではさらに中段跡から本丸へ直上する道が描かれているが、切岸のため直上は通常困難であり本丸の防壁上も問題があるため本来の通路は南側に回って空堀に橋を設けて渡らせるか、あるいは一段高い北側の曲輪(中段跡)に階段等で登らせるルートが考えられる。

本丸北側を踏査した。本丸北東側のくびれ部に魯台状の1段高い曲輪があることを確認した。絵図では本丸北側に幅二間の堀があり堀の外に土塁が描かれている。現況では本丸北西側～北側にかけて土塁跡と堀跡が残るが、堀跡は本丸北側付近で堀底が曲輪の平坦面と同一レベルになることで消滅する。この地点のレベルはそこから東側に階段状に連なる曲輪群の最高地点となる。現況ではここに絵図のような水堀があったとは考えにくく、土塁の痕跡もない。この曲輪群の北側には空堀が農道として利用されており、その北側には土塁が残りにさらにこの土塁の北側に2本目の空堀があり、この空堀は四の郭付近まで続くと思われる。

2本目の空堀の北側にさらにもう1本堀底道のような農道が西に続く。この道は絵図で「蔵屋敷」と記された小高い丘へと続く。蔵屋敷までは登り勾配で、道は途中鍵形に曲がり、左右に曲輪状のテラスが続く。蔵屋敷跡とみられる平坦地が尾根頂に広がり、尾根の北側は落差の大きい低地になる。低地北端には大きな堀切が掘られている。周知の宮沢城を見ると北側の守りが弱い印象があるが、蔵屋敷の北側の堀切までを宮沢城の範囲とみれば、必ずしも北の守りは弱くはないと思われる。この蔵屋敷に接するようにさらに北館が築城されていることになる。

宮沢城が中館、左館と呼ばれていたという伝承や、周辺の城館址の位置や距離をみると北館、南館を含んだこれらの城郭群全体を一つの城と見ることも可能な濃密な立地状況であることが見て取れる。

②本丸東側の堀に関するボーリング調査結果

本丸東側の市道に面する直線的な堀は、現行市道より1m以上高いことからその構造を調べるためボーリングステッキによる調査を行った。

南北に長い堀跡のうち、南側の地点A'-A(東-西)では「土塁～帯曲輪状のテラス～小土塁状地形～堀～切岸」という結果になった。堀の中にもテラス帯があることから単純な堀ではなく、畝堀や障子堀のような構造も検討する必要があることから、追加で縦方向にa-a'(南-北)を調査し、a-a'でも東西の畝状の高まりを検出した。現表土に残る畝とは位置が違うことや深さから、堀内に畝を残した畝堀である可能性がある。

次に、同様にE'-E、H'-H(東-西)の2箇所を調査した。この2箇所では堀の内側にテラス帯は無く、土塁から直接堀が落ち込んでいる。南-北の縦方向としてe-e'を調査したところ、旧水田に伴う現行畝の前後で堀が深く落ち込むことを確認した。畝は硬さ等から地山を掘り残している可能性があるため、堀として機能していた時にも畝が存在した可能性があり、やはり畝堀の可能性はある。

③本丸北側の堀に関するボーリング調査結果

本丸北側の堀を確認した。途中まで土塁が残存する最上段のテラスB-B'を調査、本丸切岸側から幅7～8mの堀が落ち込み、土塁残存基部と思われる高まりを生じる。続いてその1段下のテラスC-C'を調査した。本丸切岸直下は地山で、直下から1m離れた地点で堀の残存と思われる落ち込みを検出した。残存する堀の幅はわずかに1m程度である。次に同じテラスの東側の地点D-D'を調査したが堀跡は検出されなかった。これらのことから本丸北側は、端から端まで同一の構造をもつ水堀や横堀ではなく、尾根を断ち切る「堀切」が元になっている空堀と考えられる。

絵図では本丸西側にも堀があると記されていることから、二の郭と本丸の境について

調査した。二の郭南半のF-F'では、すぐに硬い地山となり堀は確認できず、周辺の点数箇所でも念のためボーリングステッキを刺したが堀は確認できなかった。二の郭北側の地点G-G'では、本丸切岸直下から幅約2mの堀が確認できた。堀は1地点及び現況農道北側付近でも確認したが、本丸に続く現行農道を境に二の郭南半には堀は延びていないことが判明した。この農道に沿うように西に屈曲する微低地がみられ、ちょうどその西側に空堀跡があることから、本丸西側を巡る堀はこの空堀につながると考えられる。

④ 絵図に描かれた本丸東側の道に関するボーリング調査結果

本丸東側の通路を兼ねる帯曲輪の2箇所(j-j', K-K')でボーリング調査を実施した。対象地は絵図では土塁を備えた通路として描かれているが、現況では土塁は無く幅1.5m程度の狭い帯曲輪の形状となっている。

ボーリング地点の2箇所ともに本丸切岸側から落ち込む溝状の土層を確認した。埋没する堀の深さは最深90cmである。これにより、当該帯曲輪状の地形は横堀が埋没したものである可能性が高まり、絵図が正しいとすれば土塁を伴う横堀で、絵図に描かれた通路は堀底道であると思われる。

⑤ 本丸西側の帯曲輪に関するボーリング調査結果

本丸東側の帯曲輪状の地形が実際は横堀であったことが判明したことから、同様に本丸西側を巡る帯曲輪について調査した。2地点で切岸側と中央付近の計4箇所についてボーリングステッキを刺したが特に溝状の落ち込みは確認できなかった。深さは全て概ね30cm弱である。したがって西側の帯曲輪は横堀ではないと思われる。

⑥ 四の郭北辺の堀に関するボーリング調査結果

絵図では、四の郭を巡る外堀が描かれている。現況では四の郭外郭線に沿って途中までは低い窪地が見られるものの、北館の一ノ郭南側付近では窪地は確認できない状況となる。窪地が途切れる西南には微かに低く、盛土したような幅16m程度の荒廃園地がある。荒廃園地には湿地にみられるツユクサや萱が繁茂し、地下の土壌を反映しているようである。この荒廃園地の東側は1段高い畑地及び果樹園となっており、四の郭とされるテラスとなっている。荒廃園地の窪地から、どのように南方向へ堀が続くか確認するため、2mグリットを基本として東-西方位にボーリングステッキを刺突し、地山までの深さを調査した。なお、農道交差点付近で高さ40cmの小型板碑を確認した。

地点L-L'において、1m以上落ち込む堀跡を検出した。堀底は中間地点で一旦畝状に隆起する。二重堀切か畝堀の可能性もあろう。埋没している堀の深さは1m以上あるとみられる。堀は両端が盛り上がり土塁を伴う可能性もある。宮沢城では、堀の上場に土塁を配置するような構造が多い。地点M-M'でも1m以上落ち込む堀跡を検出した。地点N-N'と地点O-O'は平坦で堀状の落ち込みは検出されなかった。これにより堀は単純に直線的に南側の大堀につながる形では無いことが分かった。微地形を観察し、その南側の地点P-P'で調査したところ堀状の落ち込みを検出した。深さは1m以上あるとみられる。P-P'の南側、南側大堀に接続すると思われる地点で大堀の岸が約8mの幅で弧状に挟れており、この地点がこの空堀の末端と思われる。さらに地点Q-Q'を追加調査し、L-L'、M-M'で確認された堀跡が続いていることを確認した。堀はO-O'地点及びその周辺には存在しないことから、南に折れて地点P-P'

につながると思われる。QとPの間は畑地で調査可能な地点は限られていたがP-P'中央から約10m北に行った地点でも地山まで80cmと深いことから堀跡が続いていると思われる。Q-Q'でも堀の中央が畝状に盛り上がることから二重堀切又は横畝堀であった可能性が高くなった。

⑦蔵屋敷跡西側の堀切に関するボーリング調査結果

本丸北側に位置する(伝)蔵屋敷跡は別郭的な様相を呈する曲輪である。昭和20年代の航空写真を観察していたところ、蔵屋敷跡西端に尾根を断ち切る二本の黒い縦筋(ソイルマーク)があることに気がついた。位置や形状から、蔵屋敷跡の曲輪西端を区画する二重堀切の可能性があると推測されたことからボーリングステッキにより地山までの深さを調査した。

地点R-R'において、8mの長さを1m間隔で調査したところ、2箇所の落ち込みを確認した。これは上記ソイルマークの位置とほぼ一致することから、この地点に二重堀切があったものと思われる。二重堀切が確認されたことにより北館との境が明確になり、蔵屋敷跡はひとつの郭(蔵屋敷郭)を成していたことが判明した。

⑧本丸東側の宮沢川と宮沢城への登城口について

本丸東側の堀となる宮沢川について、久保から菖蒲沢にかけて踏査し、宮内地区から宮沢城への登城ルート进行调查・検討した。

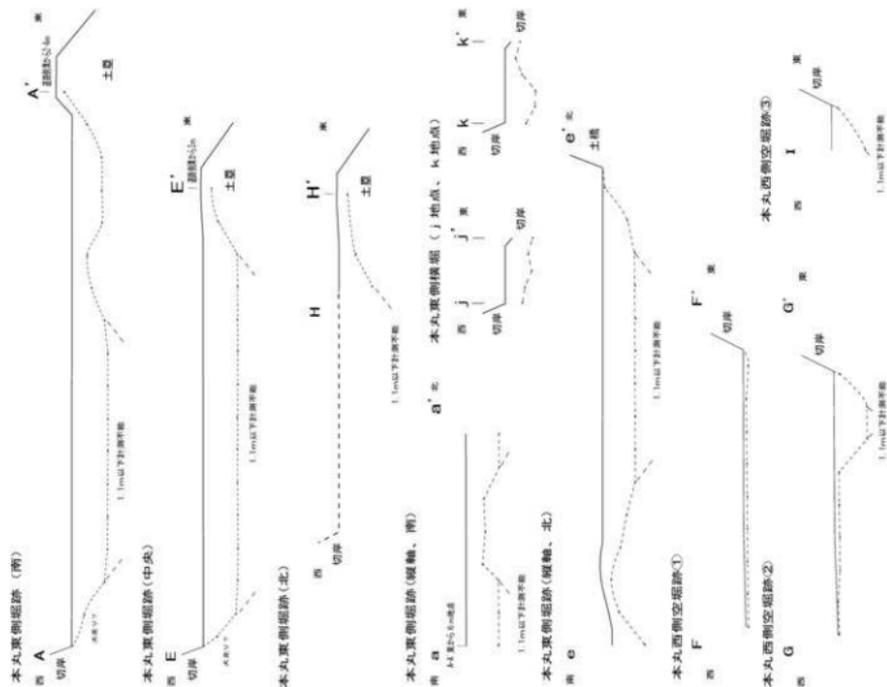
東側の堀の役を果たすのは宮沢川の浸食谷で、谷川と河岸段丘からなる谷地形が菖蒲沢の入口にあたる久保付近で開口する。現在宮沢城跡へ通じる熊野大社東側山裾を登る市道(本町菖蒲沢線)はかつては存在せず、明治26年字限図では城に続く道路は熊野大社境内を通過する道か、あるいは熊野大社西側からの道のみで、共に熊野大社北側で1本の道になる。

久保から菖蒲沢方向に続く市道(菖蒲沢線)もあるものの、現道のように久保の谷底から南館跡方向に登る道が無く、宮沢川の谷地形開口部西側は熊野大社のある小山で崖となっており、北へ進むと谷は狭くなり河岸段丘が西側から張り出し、崖の高低差は大きいことから、この谷底を通るルートは主たる登城口とは考えにくい。

熊野大社北側から延びる南北に走る古道が、おそらく主たる登城口と見られる。古道は南館跡の東を通り、大手丸南側の堀の外に達する。

この地点は、東側からの堀と南側からの堀の合流地点で、谷は深く広く広がり、南側の堀からの落差は大きく現行でも1m以上の崖状になっている。周辺は宅地化が進み、堀の形状は確認が困難であるが、明治26年字限図からは南側の堀底が階段状に東側の堀に向かって低くなる状況が読み取れ、大手丸東側では下段の段丘が弧状に張り出しており、市道及び住宅地の下に何らかの城郭遺構が埋没している可能性もある。この地点の堀の渡河方法は不明であるが、南側の堀を堰き止める土塁を土橋とした可能性もある。

なお、大手丸から北側の谷地形では、現行宮沢川に並行する河岸段丘が2段確認できる。このうち上段の段丘上には市道本町菖蒲沢が通り、道路沿いに宅地化が進んでいる。字限図では市道の宮沢城側に宮沢川から分岐した水路が走っており、現在もその名残として道路側溝が存在する。この水路も堀の機能を有したとも考えられる。



宮沢城跡平面 (南陽市教育委員会制作 昭和58年3月)

本丸北側堀跡 (階段状テラスの上段)

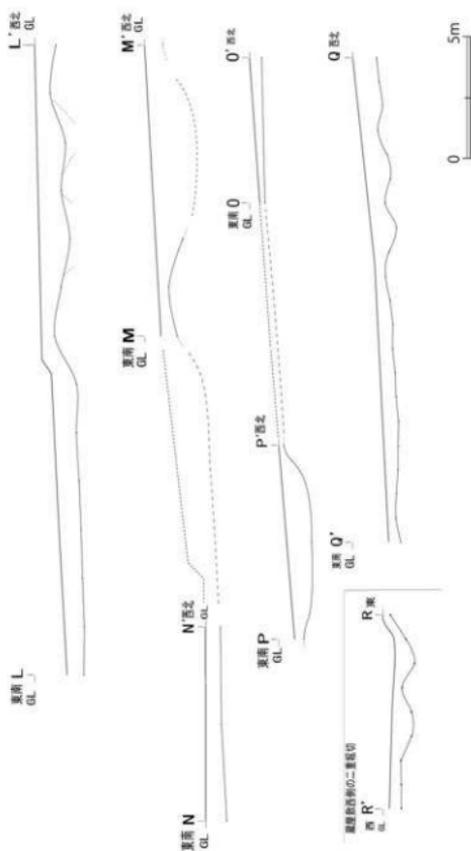
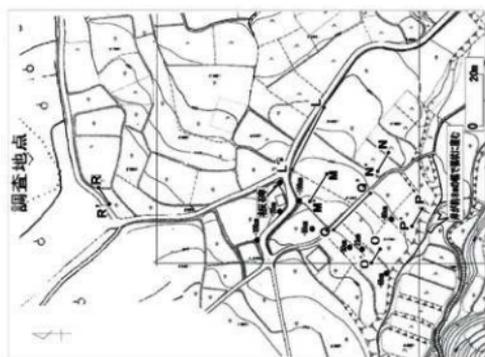


本丸北側堀跡 (階段状テラスの上から2段目西側)

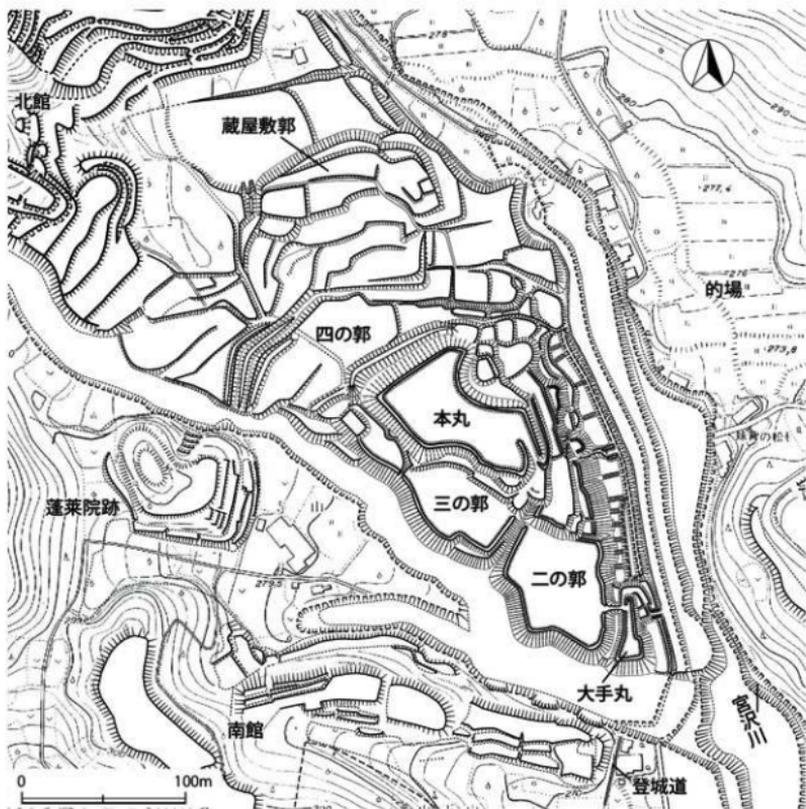


本丸北側堀跡 (階段状テラスの上から2段目東側)



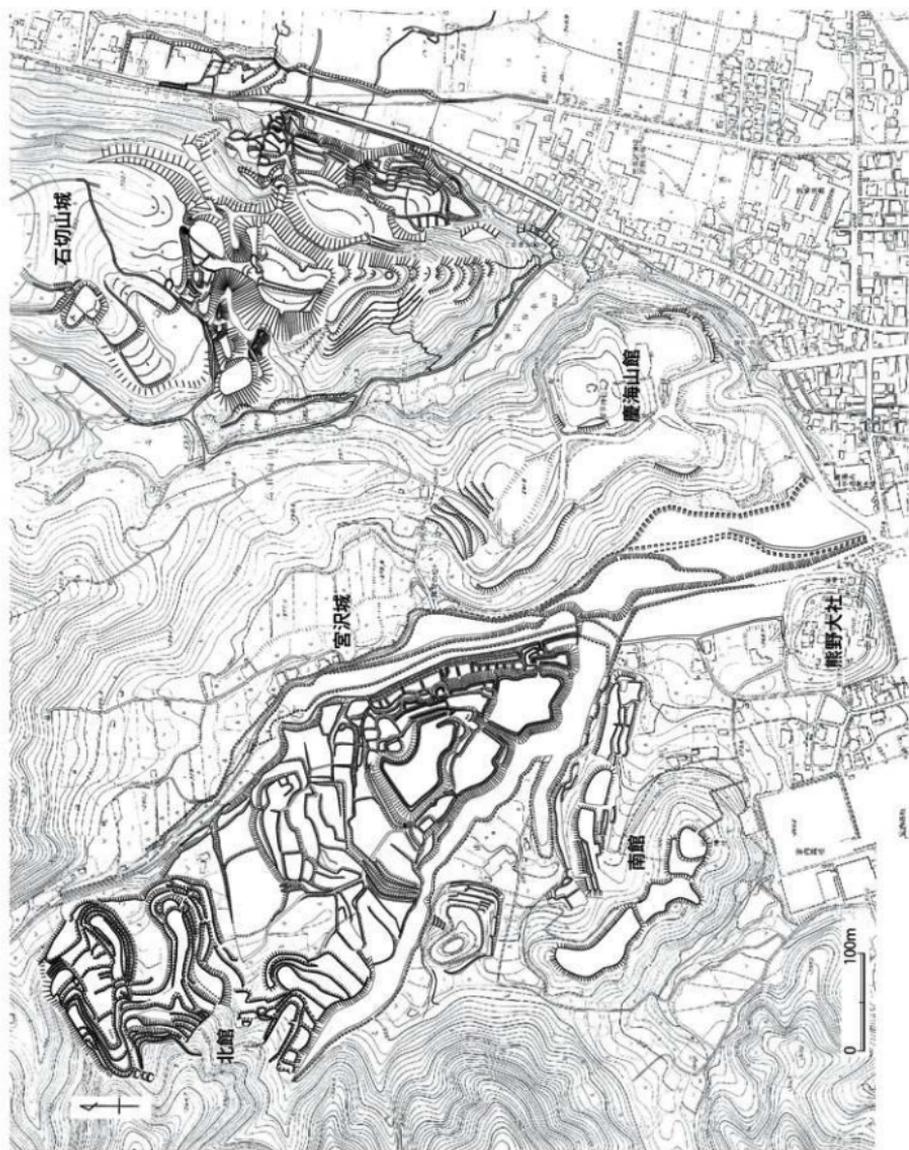


第 36 図 宮沢城跡ボーリング調査断面図 (2) 四の廓北西部堀切 S= 1/200



第 37 図 宮沢城跡略図 S= 1/3000

※注：上図は一部しか現存しない。宮沢城絵図及び地権者等からの聞き取り情報を元に記載した。



第 38 図 宮沢城及び周辺城館群と石切山城 S= 1/5000

22 岩部山周辺（岩部山岩陰、岩部山館跡）

- (1) 調査日 平成27年6月8日、9日、11日、11月9日
- (2) 調査場所 南陽市川樋字北沢、字郡石、字岩屋堂、字岩部山、字岩部
- (3) 調査目的

岩陰遺跡を把握するため岩部山南部の斜面を踏査する。併せて岩部山館跡の範囲確認を行う。

- (4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査する。

- (5) 調査結果

- ①南斜面東側（岩陰）について

岩部山南部東側の山裾に位置する岩崎神社の周辺を調査し、その後、岩部山三十三観音駐車場から三十三観音の参拝ルートに沿って岩陰や洞窟のある岩等を確認しながら踏査した。30番観音の彫られた岩の下に岩陰、20番観音の彫られた硯石洞窟を確認した。21番と31番観音の岩は石庇状に張り出している。枯葉の堆積が多く今回は遺物は採集できなかった。30番観音岩陰は、幅・奥行ともに2m以上を測る。20番観音の硯石洞窟は奥行き8.46m、断面の幅1.4m・高さ1.65mで、岩を削り貫いたような洞窟で床面も岩であり堆積物もなく人工的に掘ったような印象を受ける。最奥に観音像が置かれ、奥壁下部から水が染み出す。さらに三十三観音27番の天狗岩から参拝ルートを外れ山頂方向に向かい、岩部山城本丸の現状を確認した。

- ②岩部山の尾根（岩部山館跡）について

川樋地区の日影街道から踏査を開始、字北沢付近は昨年大雨で日影街道の橋が流されており、荒廃園地に多量の土砂が流れ込んでいる状況で、復旧工用の仮設道路が造られている。字北沢の日影街道付近は分布調査未実施地のため工事によって表土が見える箇所や掘削土を観察しながら踏査したが、遺物は確認されなかった。日影街道が通る南側の山裾付近にはいくつかのテラスと石垣が見られ、営農や鉱山に由来するものか、城館址に関係するものか今後さらに調査を継続する必要がある。

日影街道南側から登る。切通しに至る直前に2つの道が交わる地点に曲輪状のテラスを確認、その上方の切通しの南側に曲輪と帯曲輪を確認した。日影街道が岩部山を断ち切る大きな切通し部分から西から東方向へ岩部山の尾根を縦断し踏査した。この切通しは堀切の可能性がある。この切通しに近い尾根上の南北斜面には、小規模なテラスや竪堀状の落ち込みが見られる。

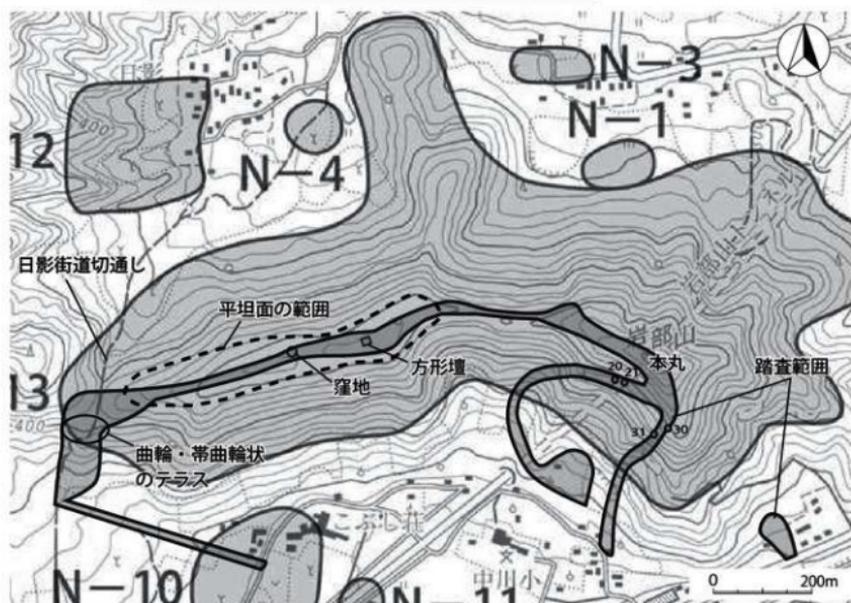
尾根は切通しの東側ですぐに平坦化し、幅広い大規模な平坦面が東へ300m以上続く。この岩部山尾根西端の幅広く長い平坦面は単なる自然地形とは思われない。山頂を大規模に平坦化したとすれば城館址関連遺構であることが考えられる。尾根の肩部、南北斜面の状況は今回は確認できなかった。

岩部山西半尾根の中間地点付近からは、平坦に近いが多少起伏のある広尾根に変化する。この地形変換地点に円形の窪地があり水溜めかと思われる。そのさらに東側、尾根西半部の最高地点付近で1辺6～7m、高さ約1mで周囲に幅1m程の溝を巡らせる方形壇（塚）を確認した。この土壇は、城館の施設、宗教的な土壇・塚、あるいは墳墓の可能性があらう。

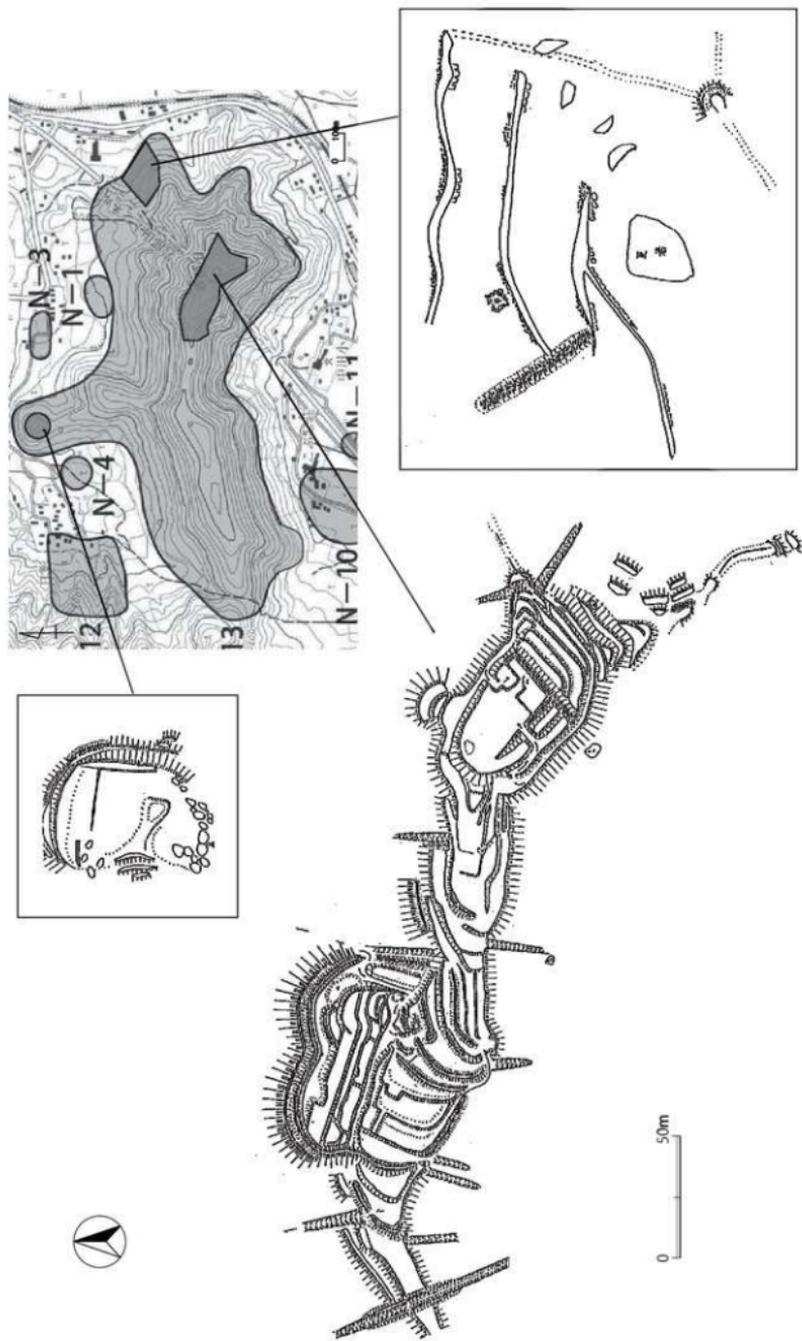
尾根中間点を過ぎると急に尾根が低くなり痩せ尾根となる。両側が急斜面の痩せ尾根を東へ進み、尾根が再び高くなる地点に縄張図に記載のある西端の堀切が現れる。堀切から東は周知の岩部山館跡である。それまでの西側とはまったく様相が異なり複雑で大規模な曲輪構成を見せる。基本的に土塁を用いるが一部に石垣が見られる。昨年・一昨年の豪雨災害及び今年の大雪による遺構の損傷は見られない。主郭を横切り、三十三観音の天狗岩方向に下山した。

今次調査により、従来の岩部山館跡の縄張り図には無い日影街道の堀切、尾根西端の広い平地、水溜め状の窪地、方形壇等の各種遺構の存在を確認した。周知の遺跡範囲はこれらを含んだ範囲であるが、一部西端については範囲を広げる必要がある。

GPS 情報	
方形壇	北緯 38 度 05 分 57 秒 東経 140 度 11 分 44 秒
窪地	北緯 38 度 05 分 57 秒 東経 140 度 11 分 44 秒
周知の城館址西端堀切	北緯 38 度 05 分 58 秒 東経 140 度 12 分 00 秒



第 39 図 岩部山踏査範囲図 S= 1/10000



第40图 岩部山部跡縄張り図 S=1/2000

23 天王山古墳群

- (1) 調査日 平成27年6月8日、9日、11日、11月9日
(2) 調査場所 南陽市梨郷字明神沢、字天王山、字石ヶ窪、字白山、字小寺坂、字冷水返り、
字円行寺（古墳所在地：梨郷字明神沢、字天王山）

(3) 調査目的

遺跡の保護のために古墳群の現状確認を行い、遺跡台帳整備のため古墳の墳形及び規模を再確認する。併せて古墳群の周辺についても踏査し、地形把握と未確認古墳の有無を調査する。

(4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査し、各古墳の概寸計測を行う。

(5) 調査結果

天王山古墳群は残存状況の良い古墳群である。古墳群には13基の古墳があるとされ、昭和63年度調査段階でTM3～15と仮付番されている。なお、仮番号TM1、2は天王山古墳群から離れた地点にある。古墳番号は昭和63年時と平成24年市報告書第5集でも違いがあるなど混乱がみられることから、今次調査により古墳番号を修正するものとする。なお特に混乱のある1～3号墳について、番号の変更過程を下記に記す。

報告年度	報告時の古墳番号		
昭和63年度	TM3	TM4	TM5
平成24年度	TM3	TM2	TM1
平成27年度	TM1	TM2	TM3

①天王山1号墳（TM1）

TM3～13とは様相が異なる小塚である。斜面を切って円～楕円形状の平坦面を形成し、そこにわずかに小塚状のマウンドを有する。構築方法は山寄式円墳と類似するが、マウンドが低く不明瞭であり古墳ではない可能性もある。中世の塚又は墳墓の可能性も視野にいれる必要があろう。

②天王山2号墳（TM2）

TM1と同様にTM3～13とは様相が異なる。TM1の西斜面に位置し、斜面を切って狭い平坦面を形成する。現状では明確なマウンドは無い。近隣の雨沼遺跡では直径2～3mの平面プラン円形、高さ20cm程のマウンド状地形が30基ほど確認され、うち6基を調査、土坑を伴う塚が含まれているとされている。牛ヶ首B遺跡でも4基のマウンド状地形が確認され、3基を調査したが、テラス状遺構ではないかとされている。これらのことから、TM1・TM2も小塚又はテラス状遺構である可能性があり、古墳ではない可能性がある。総合公園内遺跡群では時期不明の炭焼窯跡も確認されており、テラス状遺構には何らかの生産活動に関連する遺構が含まれている可能性もあろう。

③TM1・2類似の小テラス（xIKM1）

多目的広場の管理棟南側に位置する山の谷部（字石ヶ窪）の西に面した斜面にTM1、2に類似する小テラスを1箇所確認した。平面円形で上場では縦3.7m×横3mである。下場は不明瞭であるが、概ね縦7.7m×横5.2mで、斜面をわずかにカットし低平なテラス状になっている。自然地形の斜面と一体となり下場の傾斜変換角度はごくわずかである。自然地形である可能性もある。xIKM1から東北へ約60mには石ヶ窪B遺跡の塚状遺構（昭和63年時仮番号TM2）があった。なお、昭和63年時仮番号TM1は金山遺跡の東側、寺坂農免道路沿いに位置する。

④天王山3号墳 (TM3)

直径約6mの円墳で南側と北側に周壕を有する。尾根がやや北側に傾斜し始める付近に位置するため南側の周壕が深く、尾根を断ち切る。TM3から北の尾根はなだからかに下り、TM2付近で斜面が急になる。TM3からTM4までの間は平坦面が続く。

⑤天王山4号墳 (TM4)

主軸長約15mの前方後円墳である。降雪前に草刈し、墳形を確認した。くびれ部から側辺へ至るラインが曲線であることや後円部東西の側辺下場が直線ではなく丸く膨らむこと、北側で尾根を断ち切る周壕が東西端で丸く墳丘側にカーブすること等から前方後円墳であることを確認した。前方部は西側の崩れが大きい。

天王山の最高所(標高327m)に位置するが、尾根が平坦に南に長いため眺望はあまり良くない。

⑥天王山5号墳 (TM5)

直径約9mの円墳で、TM4の前方部西側に隣接して立地する。TM5の周壕はTM4の前方部西側のテラスを切っているように見える。墳丘は山の西斜面に面している。

⑦天王山6号墳 (TM6)

主軸長約18mの前方後円墳である。降雪前に草刈し、墳形を確認した。後円部北辺は、上場・下場ともに直線的で、後円部上場も東西辺が直線的であり、墳丘上から見ると後方部の角が丸みを帯びた前方後方墳にも見える。くびれ部から側辺へ至るラインが曲線であることや、後円部東西の側辺は下場が直線ではなく丸く膨らむこと、北側で尾根を断ち切る周壕が東西端で丸く墳丘側にカーブすること等から、前方後円墳であると判断した。

⑧天王山7号墳 (TM7)

主軸長約25m、天王山古墳群で最大の前方後円墳である。天王山の尾根最高部南端に位置し、標高約320m、最も眺望が良い場所に築造されている。後円部北側に周壕を巡らし、後円部の両側辺にはテラス帯がある。さらに前方部前面の尾根頂も広く平坦になっており、古墳に伴うテラスの可能性もある。墳丘の残存状況は良好である。

⑨天王山8号墳 (TM8) 及び枝尾根

直径約11mの円墳である。尾根南端をやや下った斜面に築造されている。北側に周壕を有する。この古墳の所在地点から尾根が分岐し、南方向と西方向に枝尾根が分かれる。南の枝尾根上にTM11が立地する。

⑩天王山9号墳 (TM9)

直径約7mの円墳とされる。西へ延びた枝尾根が東側の山に繋がる鞍部に立地している。墳丘西側に尾根を断ち切る周壕を有する。墳丘東側には削り残された尾根の隆起地形が墳丘から延びており、その先端に堀切がある。この堀切付近を前端とする前方部である可能性もあり、9号墳は小型の前方後円墳の可能性もある。前方後円墳の場合は、主軸長約12mである。

⑪天王山10号墳 (TM10)

主軸長約24mの前方後方墳である。TM11の立地地点から西へ分岐した枝尾根上に立地する。標高275mとTM7に比べ45m低い位置にあり、天王山古墳群中唯一

の前方後方墳で、この古墳のみ前方部を西に向ける。墳丘の残存状況は良好である。後方部東側に尾根を断ち切る周壕を有し、側辺部を狭いテラス帯が巡る。

⑫ 天王山 11 号墳 (TM 11)

直径約 9 m の円墳である。墳丘の北側に尾根を断ち切る周壕を持つ。この古墳の立地地点から尾根が西南と南に分岐する。南側の枝尾根は TM 11 からしばらくならだかに続き、傾斜が変化する位置に TM 12 が築造されている。

⑬ 天王山 12 号墳 (TM 12)

縦約 12 m × 横約 10 m の方墳である。北側に尾根を断ち切る周壕を有する。墳丘の側辺は両側とも急傾斜の斜面となる。南側に尾根の残存部分がいびつに残り、その先は急な斜面が下る。

⑭ 天王山 13 号墳 (TM 13)

直径約 8.5 m の円墳である。標高 245 m で山裾からの比高差約 25 m と天王山古墳群で最も低い位置に立地する。県指定文化財の嘉暦二年大日板碑の真上に位置し、急な斜面の途中にある尾根上のわずかな緩斜面に築造されている。

⑮ 古墳状隆起 (x TM 14、x TM 15)

TM 8 ~ TM 11 の間に約 30 m 間隔で並ぶ 2 箇所の古墳状隆起地形である。直径約 8 ~ 10 m 前後、平面円形状を呈する。緩やかなやや細い尾根上に立地し、立地的には TM 12 や TM 13 よりも古墳築造に適しているように見える。墳頂部平坦面や周壕等が不明瞭であることから古墳と断定できないため、古墳状の隆起地形としておく。

⑯ 古墳状隆起 (x TM 16、x TM 17)

TM 8 から南西方向に延びる尾根上にある方形 (横 5 m × 縦 12 m) のテラス及び直径 8 ~ 10 m 前後の小円形のテラスである。マウンドや周壕等が不明瞭であることから古墳とは確認できないが、人工改変地形として把握する。

⑰ 古墳状隆起 (x TM 18、x TM 19、x TM 20)

TM 10 から西南方向に下る枝尾根上に 3 つの連続する隆起地形があり、隆起地形西半は土取場により削り取られ急峻な崖になっている。直径約 8 m 前後と上記 TM 14 ~ 17 よりやや小さい平面円形を呈する。危険なため西側からの断面観察はできなかった。

⑱ TM 3 の西方斜面について

TM 3 の西側の山の斜面を踏査した。TM 3 の西には西に張り出した小さな枝尾根が 2 つ延びており共に尾根上に古墳は認められなかった。枝尾根のうち南側の尾根には長さ 6 m × 幅 4 m の小テラスが 1 箇所見られた。テラスの下を龍樹山に至る古道 (西辺を土塁状に掘り残している) が通ることから城館址関連遺構の可能性もある。西に張り出した枝尾根の北側は竜樹山に繋がる。その谷部で古道が尾根を切る切通しとなっている。

⑲ 梨郷神社西側の尾根 (字小寺坂) 踏査

梨郷神社に近い正元元年大日板碑の地点から、県が整備した遊歩道沿いに尾根を踏査した。板碑所在地の北側の山の斜面が窪地になっており鉢山の跡のように掘り込まれている。その上方の石祠の下にも、もう 1 箇所小ぶりの窪地がある。大きめの石が数個埋没しており鉢山跡のようである。梨郷地区では種芋等の貯蔵用に洞穴を掘った事例が多く見られるが、その多くは崖面に直接穴を掘っており、この 2 箇所のように楕円状の窪地を伴わない。この窪地の成因は不明であるが鉢山の試し掘りや坑道等の可能性がある。

竜樹山北東側に字金山の地名が残ることからも周辺地域で鉱山開発がなされていた可能性は高い。字小寺坂の尾根沿いには特に城郭遺構や古墳等は確認されなかった。尾根中腹付近に小さな石祠があり、その手前の地点はやや地膨れしているが古墳や塚とは言いがたい。

⑫ 字白山踏査

字白山田から上り、字白山の尾根を踏査した。字白山の尾根南端はやや平坦になっている。北西へ続く尾根には遊歩道が整備されている。古墳や曲輪等は確認されなかった。



第41図 天王山古墳群踏査範囲図 S=1/4000

24 竜樹山古墳群

(1) 調査日 平成27年11月4日、10日、12日、21日

(2) 調査場所 南陽市梨郷字竜樹山一、字竜樹山三～五

(古墳所在地：梨郷字竜樹山四、竜樹山五)

(3) 調査目的

遺跡の保護のために古墳群の現状確認を行い、遺跡台帳整備のため古墳の墳形及び規模を再確認する。併せて古墳群の周辺についても踏査し、地形把握と未確認古墳の有無を調査する。

(4) 調査方法及び内容

竜樹山古墳群には規模等が十分に計測されていない古墳があることから、墳形を再確認しながら各古墳の概寸計測を行う。

(5) 調査結果

今回は下草が枯れ、墳形を良く確認できたため、墳形について従前の報告から修正を要する古墳や新たな古墳可能性地点等が確認された。なお、従前の報告では古墳整理番号が経塚山古墳群からの連番で付番されており、竜樹山古墳群の古墳数に誤解を生じることから古墳番号を付け直した。

①竜樹山1号墳 (RM1：旧15号墳)

従来は狭小な前方部をもつ前方後方墳とされていたが、縦約21.7m×横約18.5mの方墳であることが判明した。古墳群中最南端の古墳で他の古墳の立地する主尾根から南に外れた枝尾根上に位置する。墳丘は中央付近から西へ一部崩落しており、崩落した土の堆積が前方部状に見えたものと思われる。墳丘の高さは南辺で約3.2mである。尾根の山側に周壕を有し、主軸方向は南北である。また、RM1からさらに南側に下り、尾根端まで踏査したが古墳は確認されなかった。

②竜樹山2号墳 (RM2：旧16号墳)

縦約21.6m×横約17.3mの方墳で、主尾根の南端部に位置する。墳丘は高く6号墳に次いで眺望が良かったため墳頂に見晴らし台と遊歩道が整備されている。墳丘南西辺はわずかな傾斜変換線(本来の下場)が尾根の自然地形の傾斜と一体化しており、西から見るとより墳丘がより高く見える。主軸方向は南西から北東である。

③竜樹山3号墳 (RM3：旧17号墳)

従来は前方後方墳とされる。南側に前方部状のマウンドがあるが幅約2mの周壕で墳丘から切り離されていることから前方部ではなく別の方墳(9号墳)と考えられる。したがって3号墳は前方後方墳ではなく、縦約19.4m×横約16.8mの方墳であると判断される。墳丘の東西辺は尾根斜面と一体化し、明確なテラス帯は確認できない。また、北側にも9号墳と同様に周壕を挟んで低い墳丘があり、方墳(10号墳)とみられる。

④竜樹山4号墳 (RM4：旧18号墳)

縦約11m×横約7.6mの平面長方形を呈する方墳である。細い主尾根上に立地し、墳頂を遊歩道が通るため墳丘上場のラインはなだらかになっている。

⑤竜樹山5号墳 (RM5：旧19号墳)

全長約18.4m、後方部縦約11.7m×横約12.5mの前方後方墳である。山頂から南に延びた主尾根上に立地し、前方部は尾根に沿って南に向く。従前は前方後墳後方形の塚とされていたが、北側は尾根の自然地形である。

⑥ 竜樹山6号墳 (RM6:旧20号墳)

竜樹山山頂に位置する方墳である。眺望が良く、墳頂に遊歩道と見晴らし場が整備されている。従来は、左右に方形壇を持つ前方後壇後方形の塚とされているが、中世に城館として再利用された際に方墳の三辺(東・西・南辺)に帯曲輪等を造成したことによる改変の結果と思われる。また、北辺は現況の主軸に対し斜めになっており、古墳の主軸の向きは本来この北辺に垂直であった可能性もある。墳丘の大きさは縦方向に上下2段の削平があるためはっきりしないが、縦は下段の場合約21m、上段の場合約16.4mで横は約16mと思われる。従来の記録では大きさが約40m前後という記載があるが、これは周囲の帯曲輪の範囲まで含めた数値であろうと思われる。

⑦ 竜樹山7号墳 (RM7:旧21号墳)

6号墳の北側に接するように主尾根上に築かれている。従来は左右に方形壇を持つ前方後壇後方形の塚とされているが、全長約20m、後円部直径約14mの前方後円墳である。古墳の東側は帯曲輪が作られており地形の改変が大きい。古墳西側はくびれ部付近にテラス帯が残り、墳丘はくびれ部西側で後円部から前方部へと移る曲線のラインがよく見える。古墳の北側に3段の階段状の曲輪があり、これが従来後壇とされた地形と思われる。現況ではあたかも双方中円墳のような構成になっているが、北側の壇の東西側辺はすべて後円部円周に直線的に接するように造成されており、くびれ部を形成しないことから古墳に伴う造成ではないと思われる。ただし一番上の壇の平坦面は古墳のテラス帯を利用している可能性がある。

⑧ 竜樹山8号墳 (RM8:旧22号墳)

竜樹山古墳群中、最北に位置し、従来、左右に方形壇を持つ前方後壇後方形の塚とされているが、現況では墳丘上の遊歩道と中世城館址の帯曲輪等により著しく地形が改変され、さらに東斜面が崩落しており、前方部状の地形は確認できず、長方形に近い隆起地形(方墳?)となっている。残存地形により墳形を推定し計測を行ったが、古墳でない可能性がある。隆起地形の残る範囲は下場で縦約16m×横約12mである。

⑨ 竜樹山9号墳 (RM9:旧17号墳前方部)

3号墳の南側に付随するように位置する縦10m×横8.4mの小型の方墳である。従来は3号墳の前方部とみなされていた。3号墳とは幅約2mの周壕で切り離される。墳頂を遊歩道が通り、上場のラインはなだらかになっており、墳丘西側は谷に向かって弧状に崩落している。

⑩ 竜樹山10号墳 (x RM10)

3号墳の北側に付随するように位置する縦8.5m×横9.6mの小型の方墳と思われる。3号墳とは幅約2mの周壕で切り離される。墳頂を遊歩道が通り、北辺の肩はかなり削られ尾根の自然地形に近い形状にまで起伏がなだらかになっている。古墳ではなく、尾根の自然隆起地形の名残である可能性もある。

⑪ 古墳状隆起 (x RM11)

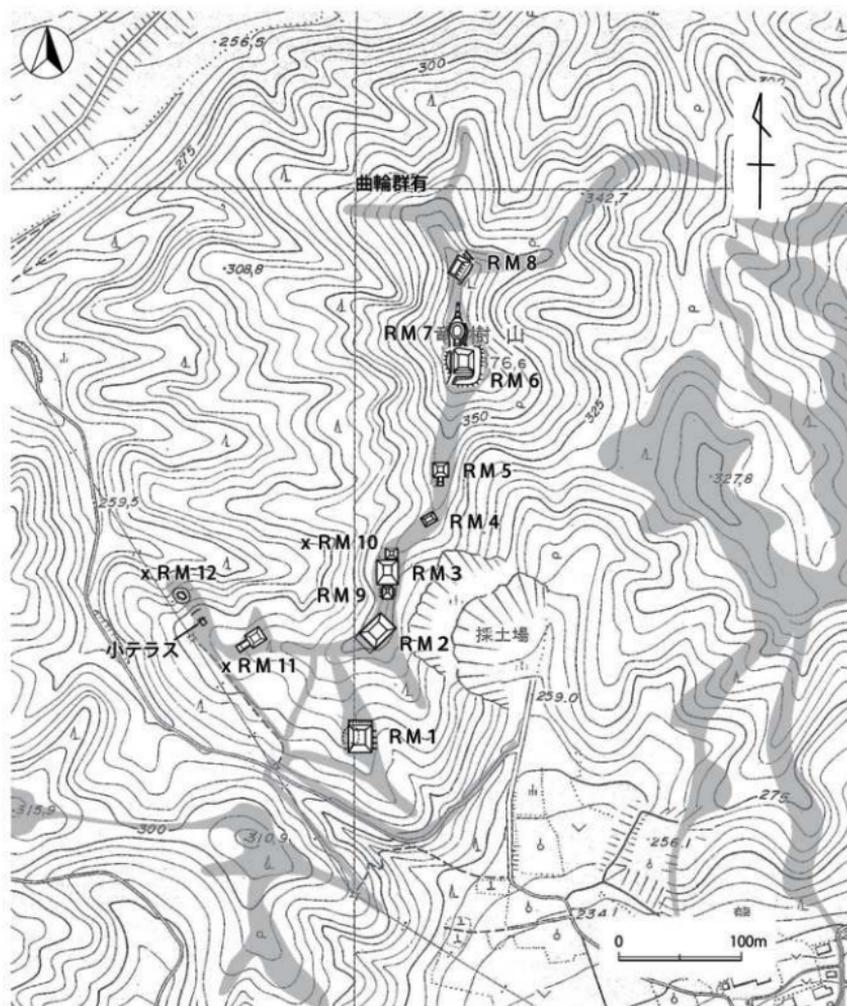
2号墳から西に下った尾根上に位置し、前方後方墳の可能性のある隆起地形である。遊歩道が前方部状地形の端部から後方部状地形の南側面を通過するため改変が著しいが方形に近い地形の高まりと前方部端を思わせる傾斜変換線を有し、とくに東辺は直線的である。縦約24m×後方部横約11.6mの前方後方墳の可能性もある。

⑫ 古墳状隆起 (x RM 12)

x RM 11 の西側の尾根端にあり、長さ約 7 m の平坦地の先に古墳状隆起地形がある。マウンド上に縦約 7 m × 横約 4 m の楕円形の平坦面があるが、尾根の左右には特にテラス帯等は見られない。直径 12 ~ 14 m の円墳の可能性があるが、数メートル上方にも小テラスがあるため中世城館址に伴う曲輪の可能性もある。

⑬ 8号墳の北側の尾根

竜樹山の主尾根は 8号墳の立地する尾根端部北側から急に下る。その尾根沿いに北側へ踏査し中世城館址調査で報告されている曲輪群を確認した。古墳は確認されなかった。



第 42 図 竜樹山古墳群踏査範囲図 S=1/4000

25 稲荷山古墳群

- (1) 調査日 平成27年10月5日、11月12日
(2) 調査場所 南陽市梨郷字稲荷山、字上館
(古墳所在地：梨郷字稲荷山、字上館)

(3) 調査目的

遺跡の保護のために古墳群の現状確認を行い、遺跡台帳整備のため古墳の墳形及び規模を再確認する。併せて古墳群の周辺についても踏査し、地形把握と未確認古墳の有無を調査する。

(4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査し、各古墳の概寸計測を行う。

(5) 調査結果

稲荷山の尾根沿いに5基の古墳が並ぶ。龍雲院西側の山道から登り竜樹山と稲荷山の間の道を西へ進んでから南の遊歩道に入り鉄塔方向に進む。鉄塔から西へ続く遊歩道を登ると稲荷山2号墳に到る。竜樹山古墳群同様に、従前の報告では古墳整理番号が経塚山古墳群からの連番で付番されており、稲荷山古墳群の古墳数に誤解を生じることから、古墳番号を付け直すものとする。

①稲荷山1号墳（I M 1：旧10号墳）

稲荷山山頂に所在し従来は方墳と報告されているが、墳丘南側に長さ約7mの前方部状の隆起地形があり、1号墳は全長約21mの前方後方墳の可能性がある。後方部の北辺と東南コーナー付近に周壕を有し、後方部西辺から前方部西辺にかけてはテラス帯が巡る。前方部端は、東角が2号墳の築造に伴い改変されていると思われ、西角側も遊歩道によって壊されている。前方部の高さは約0.4m、後方部の高さは約1.5mである。

②稲荷山2号墳（I M 2：旧11号墳）

従来、西を向く帆立貝式古墳とされているが、短小な前方部と言われていた箇所は後円部の墳丘が崩落したものであり、その反対側にあたる東側の枝尾根上に前方部があることを確認した。これにより2号墳は帆立貝式古墳ではなく、全長27mの前方後円墳であると判断される。後円部は、盆地方向から見える南側は墳丘が高く円形であるが、北側は1号墳に制約を受けたのか楕円形になっている。前方部の高さは約1.6m、後円部の高さは南側で最大3.3mである。この前方部を新規方墳と見た昭和61年の踏査記録を後日確認したが、くびれ部で切り離されていないことから前方後円墳としておく。

③稲荷山3号墳（I M 3：旧12号墳）

2号墳から南へ張り出す尾根沿いに約30m下ると3号墳が所在する。尾根沿いに南へ3基の古墳が周壕を接して連なる。3号墳は円墳とされ、尾根上に立地し、東側は急斜面に面している。下場で縦8.8m×横10.4mとやや横長の楕円形である。墳丘の高さは約1mである。

④稲荷山4号墳（I M 4：旧13号墳）

方墳である。主尾根上に立地し、東側は急斜面に面しており、3号墳とは周壕を境に隣接する。下場で縦12.5m×横13m、墳丘の高さは約1.8mである。

⑤稲荷山5号墳（I M 5：旧14号墳）

稲荷山の主尾根は5号墳付近で東西に分岐する。従来の記録では東西枝尾根のどちらに古墳が立地するのが曖昧であったが5号墳は尾根分岐地点に立地していることを確認

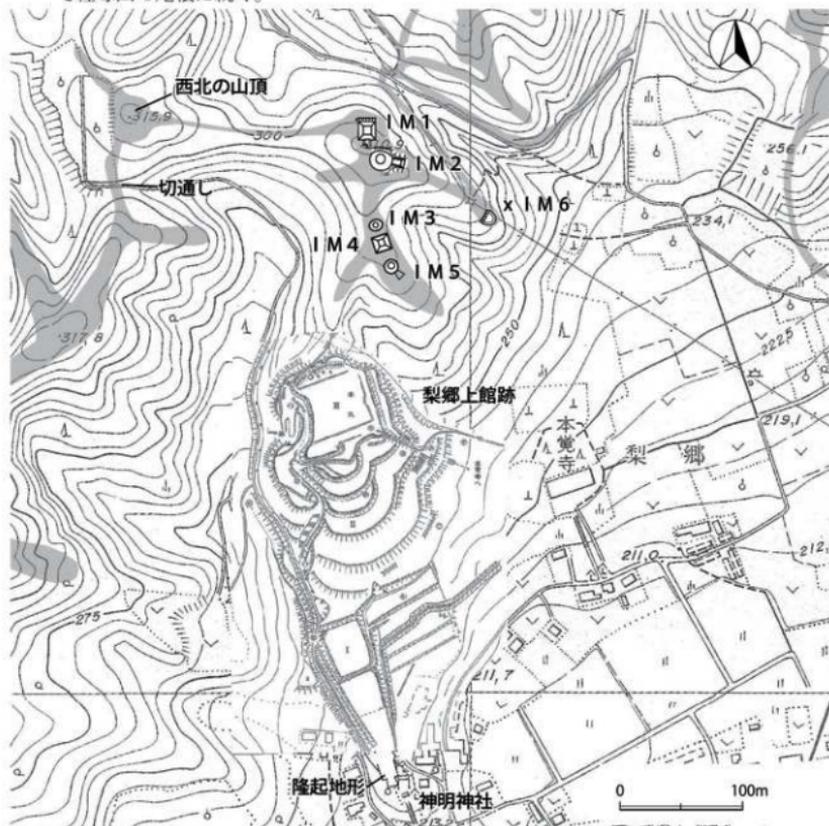
した。5号墳は円墳とされ主尾根南端部に立地する。下場で縦11m×横11m、墳丘高は北側で約1m南側で約1.4mとなる。南東に隆起地形が約6～7m続くことから前方部の可能性もある。その場合は全長18mの前方後円墳となるが、笹が密生し確認できなかった。5号墳西南側の枝尾根は谷状に落ち込み、梨郷上館の本丸のある尾根に続く。館跡付近で古墳は確認されていないが麓の神明神社裏には隆起地形がある。

⑥古墳状隆起 (x IM6)

稲荷山のIM2から東へ延びる枝尾根に立地する。昭和61年の踏査で確認されたテラス状の隆起地形で、平面形は半円形、上場は縦8m×横6mである。

⑦稲荷山古墳群西北の尾根 (字上館、字梨子木沢)

1号墳から西側へ遊歩道沿いに踏査した。遊歩道の通る細尾根には古墳等は見られない。尾根西端は尾根が高まって山頂はやや平坦になっている。山頂周辺を踏査した。山頂西側と南側でテラス状の地形が見られるが、北側・東側は自然傾斜とみられることから古墳では無いと見られる。遊歩道は南斜面を下り、切通しとなっている谷底を横切って経塚山の尾根に続く。



第43図 稲荷山古墳群踏査範囲図 S=1/4000

26 経塚山古墳群

- (1) 調査日 平成27年11月13日、16日、17日
(2) 調査場所 南陽市梨郷字鹿野、字梨子沢、字深沢、字経塚、字小山
(古墳所在地：梨郷字鹿野、字梨子沢、字深沢)

(3) 調査目的

遺跡の保護のために古墳群の現状確認を行い、遺跡台帳整備のため古墳の墳形及び規模を再確認する。併せて古墳群の周辺についても踏査し、地形把握と未確認古墳の有無を調査する。

(4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査し、各古墳の概寸計測を行う。

(5) 調査結果

龍樹山古墳群の南側を通る農道から登り、稲荷山古墳群を経由して遊歩道沿いに経塚山へ至る。稲荷山と経塚山の谷部の堀切状の切り通しから尾根沿いに登ると古墳群の北端になる。尾根には多くの起伏があり、古墳上を遊歩道が通るためか墳丘が尾根の起伏と同化し一見して古墳と判別できる状態の古墳は少ない。その中でもKM2、3、6、9は比較的旧状をとどめている。

①経塚山1号墳 (KM1)

方墳とされる。KM2とKM3に挟まれており、墳丘はやや低い。墳頂北側を遊歩道が通り削平されている。南西の角はKM2の周壕末端と重なって削られたのかマウンドは明瞭でなくなる。縦(南北)10m×横(東西)9.3mとしたが、横(東西)はさらに東側にもうひとつ傾斜変換点があり、そこまで計測すると縦10×横17～19mとなる。墳丘崩落土等で地形が乱れている可能性がある。

②経塚山2号墳 (KM2)

経塚山の主尾根南端に位置する主軸長約30mの前方後円墳である。後円部頂に虚空蔵様の小祠が建てられている。前方部は東南方向に延びており、前方部は中央に遊歩道が作られているため端部の上端肩がなだらかになり不明瞭になっている。遊歩道は前方部端部から前方部上を通り、後円部頂から右奥(北東方向)の墳丘斜面を下る。後円部北西側には周壕が巡る。

③経塚山3号墳 (KM3)

残存状況が良好な方墳である。遊歩道が墳丘北西辺を通り、墳丘を人が登らないため破損を免れている。主尾根に位置し主軸方向は南西である。墳丘の規模は縦16.4m×横15.3mである。

④経塚山4号墳 (KM4)

従来は方墳とされるが直径約20mの円墳であろう。尾根頂に立地するため尾根の自然地形と墳丘の境が明瞭でなく、さらに墳頂を遊歩道が通るため墳丘の肩部がなだらかになっている。現況からすれば自然隆起地形である可能性もある。

⑤経塚山5号墳 (KM5)

従来、KM4とKM6の間に位置すると報告されているが、KM4とKM6の間は平坦な細尾根が続いておりマウンドは確認できない。KM4とKM6の距離も約16mしか離れていないことから、従来報告にある直径17mの円墳は存在し得ないことがわか

る。KM6の北側にいびつな楕円状の隆起地形があることから、これをKM5とし、従来の記録は、KM5と6の位置と順を間違えたものと推測する。当該地形は現況で縦約27.5m×横18.8mである。マウンドの上を遊歩道が通るため地形の改変を受けている。現状を見る限り自然の隆起地形の可能性はある。

⑥経塚山6号墳 (KM6)

経塚山古墳群で実測図がある唯一の古墳である。主軸長約32mの前方後方墳とされる。墳丘上を遊歩道が通るため前方形部端部がなだらかになってしまっている。後方部の残存状況は比較的良好で、北側に周壕が明瞭に残る。

⑦KM5～7間の隆起地形 (x KM 10、11)

KM5～7の間には2箇所の隆起地形 (x KM 10、11) がある。形状はやや長方形に近いが上端・下端ともに曖昧で、現状では古墳ではないと思われる。これらの隆起地形は主尾根の北端にあたり東西の枝尾根に分岐し枝尾根は急に低くなる。北東側の枝尾根では主尾根直下を幅4mの堀切又は切通しが尾根を断ち切っている。同様の堀切は北西側の枝尾根でも見られることから、この2箇所の隆起地形は城館址に関連した遺構の可能性もある。

⑧経塚山7号墳 (KM7)

KM7は、北東側の枝尾根の半ばに位置し、北東枝尾根の最高所である。従来は、縦18m×横12mの長方形の方墳とされている。北側に短い前方形の地形があり、全長約23.5mの前方後方墳の可能性もあるが、遊歩道により墳丘が崩された箇所が前方形状になっている可能性もある。墳丘南側は自然の尾根地形に影響を受けて、南に長く伸びているように見える。斜面途中に傾斜変換点があった可能性もあるが遊歩道で均されている。現況で、墳丘の北側コーナーは丸みを帯びており、墳丘の平面形態は台形を呈する。墳形についてはさらに調査が必要であるが前方後方墳としておく。

⑨経塚山8号墳 (KM8)

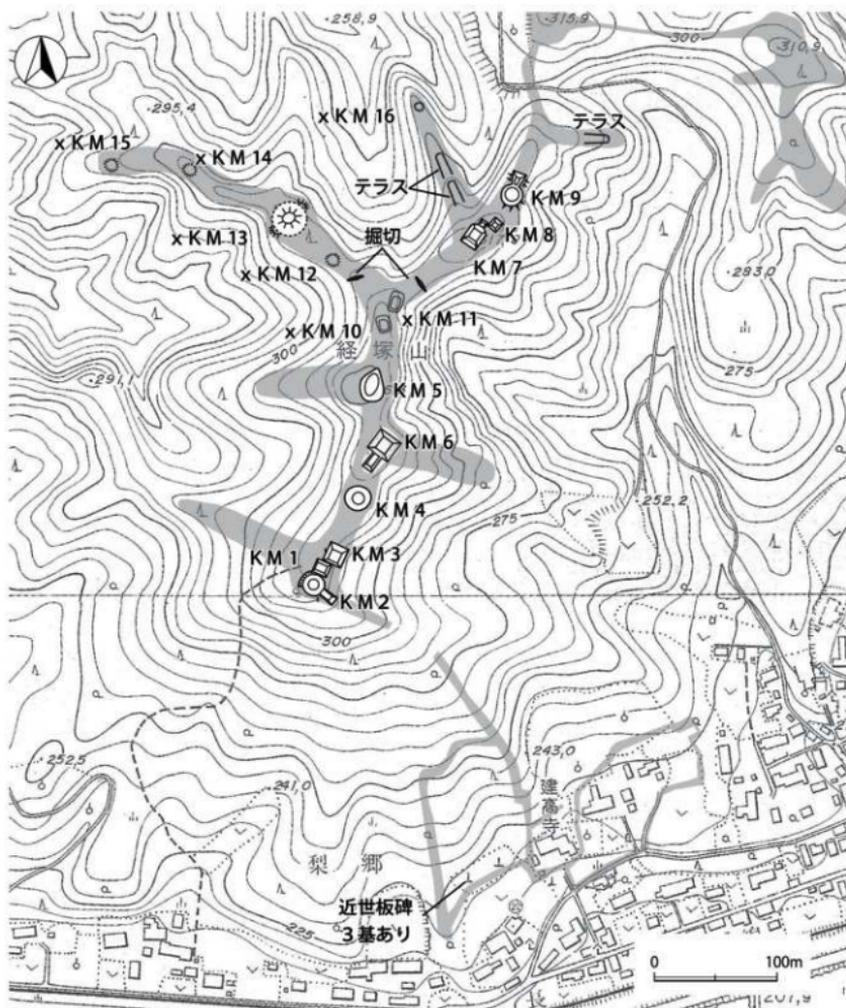
KM7の北側に付随するように隣接する小型の方墳である。縦約9.5m×横約10mである。墳丘上を遊歩道が通る。南側の周壕が7号墳との境となる。

⑩経塚山9号墳 (KM9)

従来は前方後方墳とされるが、後方部とされる墳丘の側辺の丸みとくびれ部の丸みから前方後円墳であると思われる。全長約26mで後円部直径は約17.5mである。梨郷地区の古墳群の中で唯一前方部が北を向く。

⑪その他の枝尾根

主尾根から左右に延びる7つの枝尾根を踏査した。そのうちx KM 10、11のある尾根頂から北西に長く延びた枝尾根上には、隆起地形が4箇所 (x KM 12～15) 確認される。この4地点のうち2地点目 (x KM 13) は尾根頂が直径約10mの円形テラスとなっている。この左右には長さ約7m、幅2.7mの腰曲輪状のテラスが存在する。中世城館址に伴う曲輪かと思われるが下場で直径約28mの円墳という可能性もある。その他の3か所は自然地形の可能性が高い。最も北西に位置する枝尾根上にはテラスが2か所あり、その先端には隆起地形 (x KM 16) がある。同様に最北端東側の小尾根上も緩やかにテラス状になっている。これらのテラスは城館址に関連する可能性もある。



第44図 経塚山古墳群踏査範囲図 S= 1/4000

古墳名	古墳番号	旧番号	形態	立地	備考	主軸長 (円墳は直径)		前方部前 横幅		前方部長		くびれ部 幅		前方 部側 辺長		後方部縦		後方部横		盛土高	周壕幅	
						下堀	上堀	下堀	上堀	下堀	上堀	下堀	上堀	下堀	上堀	下堀	上堀	下堀	上堀			下堀
天王山古墳群 1号墳	TM1	TM4	山笠式円墳?	山麓に近い北斜面	小塚、古墳でない可能性有	約5																
天王山古墳群 2号墳	TM2	TM3	山笠式円墳?	山麓に近い北斜面	小塚、古墳でない可能性有	約4																
天王山古墳群 3号墳	TM3	TM5	山笠式円墳?	山麓に近い北斜面	小塚、古墳でない可能性有	約6																
天王山古墳群 4号墳	TM4	TM6	円墳	広い主尾根、北斜面	眺望は西に限られる	約15	5.3															
天王山古墳群 5号墳	TM5	TM7	円墳	広い主尾根の高台西端		約9																
天王山古墳群 6号墳	TM6	TM8	前方後円墳	主尾根上		約17.5	6.6	4.6	7.8	4	4.2	6.1	12	7.1								
天王山古墳群 7号墳	TM7	TM9	前方後円墳	主尾根上、尾根南端部	最も眺望が良い	約24.6	7.3	3.4	9.5													
天王山古墳群 8号墳	TM8	TM11	円墳	主尾根の南斜面、南尾根	約11																	
天王山古墳群 9号墳	TM9	TM10	前方後円墳	主尾根の南斜面、南尾根	約12	5.2		5~6														
天王山古墳群 10号墳	TM10	TM12	前方後円墳	天王山と白山の鞍部	円墳の可能性有	約24	7.5	3.7	10	6.5												
天王山古墳群 11号墳	TM11	TM13	円墳	天王山から西に分岐する と吾郎杉尾根分岐地点																		
天王山古墳群 12号墳	TM12	TM14	方墳	天王山と白山の鞍部 TM11から西に分岐する	円墳の可能性有																	
天王山古墳群 13号墳	TM13	TM15	円墳	校庭根上		約9																
天王山古墳群 14号墳	TM14	TM16	方墳	主尾根南斜面の端部、こ れより下は斜面		縦約12.5																
天王山古墳群 15号墳	TM15	TM17	円墳	南斜面のわずかな隆起部 跡		約8.5																
天王山古墳群 16号墳	TM16	TM18	円墳	主尾根上	古墳状隆起、自然地形?																	
天王山古墳群 17号墳	TM17	TM19	円墳	主尾根上	古墳状隆起、自然地形?																	
天王山古墳群 18号墳	TM18	TM20	円墳	校庭根上	古墳状隆起、自然地形?マ ウンド西半分削平																	
天王山古墳群 19号墳	TM19	TM21	円墳	校庭根上		約8																
天王山古墳群 20号墳	TM20	TM22	円墳	校庭根上		約8																
竜樹山古墳群 1号墳	RM1	KM15	方墳	主尾根から南に分岐した 細い主尾根上	従来前方後方墳前方部とみ られたのは崩落部と確認	縦約21.7																
竜樹山古墳群 2号墳	RM2	KM16	方墳	細い主尾根上		縦約21.6																
竜樹山古墳群 3号墳	RM3	KM17	方墳	主尾根南斜面の端部	眺望が良い	縦約19.4																
竜樹山古墳群 4号墳	RM4	KM18	方墳	細い主尾根上	従来前方後方墳前方部とみ られたマウンドは別方墳	縦約11																
竜樹山古墳群 5号墳	RM5	KM19	前方後方墳	細い主尾根上		縦約18.4																
竜樹山古墳群 6号墳	RM6	KM20	方墳	竜樹山山頂	南側が二級、削平と推測。	縦約21																
竜樹山古墳群 7号墳	RM7	KM21	前方後円墳	山頂北側の細い尾根上	後円部東側下堀に崩落有、 北側に三段の曲輪	縦約19.9																
竜樹山古墳群 8号墳	RM8	KM22	方墳	山頂北側の細い尾根上、 東側崩落大、突出部がある		縦約15																
竜樹山古墳群 9号墳	RM9	-	方墳	尾根の北端部 細い主尾根上	とされるが確認できない。 従来、RM3前方部とされた マウンド	縦約10.1																

単位：m

古墳名	古墳番号	旧番号	形態	立地	備考	前方部前縁		前方部長		くびれ部幅		前方部		後方部幅		後方部幅		盛土高	周溝幅			
						下縁	上縁	下縁	上縁	下縁	上縁	下縁	上縁	下縁	上縁	下縁	上縁			下縁	上縁	
竜樹山古墳群 10号墳	x R M 10	-	方墳	細い主尾根上	RM3の北側周溝に隣接。	下縁	上縁	下縁	上縁	下縁	上縁	下縁	上縁	下縁	上縁	下縁	上縁		上縁下縁			
竜樹山古墳群	x R M 11	-	前方後方?	西に延びる主尾根上	古墳状隆起。前方後方(円墳)の可能性	約2.4	6	4.6	10.5	7	約6	4	-	8.5	4	9.6	3.3					
竜樹山古墳群	x R M 12	-	方墳?	主尾根西側が谷部に落ち込み始める地点	古墳状隆起。頂上は円形。円墳の可能性もある。	約14.1	-	-	-	-	-	-	-	13.1	6.7	11.6	6					
稲荷山古墳群 1号墳	I M 1	KM10	方墳(前方後方)	稲荷山山頂、西に枝尾根が分枝	円墳の可能性もある。	約14.4	(4)	(3.4)	(6.8)	(5)	(4.7)	(2.1)	-	14.4	6.6	13.5	6.4	1.45	5.6			
稲荷山古墳群 2号墳	I M 2	KM11	前方後円墳	山頂直下、東に枝尾根が分枝	前方後方墳? 円墳の可能性もある。	約27	7	4.8	9.6	7.2	6	4.2	-	17.4	8	-	-	1.7、後	2.9			
稲荷山古墳群 3号墳	I M 3	KM12	円墳	細い主尾根上	崩落土。前方部は東向き。楕円形	約10.4	-	-	-	-	-	-	-	楕10.4	4.5	-	-	1.0	3.3			
稲荷山古墳群 4号墳	I M 4	KM13	方墳	細い主尾根上	前東に前方部がある可能性あり。	約12.5	-	-	-	-	-	-	-	楕11	5.6	-	-	1.0	1.8			
稲荷山古墳群 5号墳	I M 5	KM14	円墳	細い主尾根上、尾根の南端部	古墳状隆起(テラス)あり。	約10	-	-	-	-	-	-	-	楕10	8	-	-	1.0	1.0			
稲荷山古墳群 1号墳	x I M 6	K M 1	方墳	東の枝尾根上	KM2と3に挟まれ墳丘は低い。遊歩道で削平。	約10	-	-	-	-	-	-	-	約10	8	-	-	10	4.7	9.3	4.9	1.0
経塚山古墳群 2号墳	K M 2	K M 2	前方後円墳	主尾根上、尾根南端部に近い	後円部頂上に遺跡残存の小さな立つ。	約29.6	7.2	4.6	13	9	6	4.5	-	16.6	8.5	-	-	後円部	5			
経塚山古墳群 3号墳	K M 3	K M 3	方墳	主尾根上	約16.4	-	-	-	-	-	-	-	-	約20	19.6	10	-	2	2.5			
経塚山古墳群 4号墳	K M 4	K M 4	円墳	主尾根上	約27.5	-	-	-	-	-	-	-	-	楕27.5	18	-	-	1.6	2			
経塚山古墳群 5号墳	K M 5	K M 5	円墳	主尾根上	不整形の楕円形を呈する。	約27.5	-	-	-	-	-	-	-	楕27.5	18	-	-	1.6	2			
経塚山古墳群 6号墳	K M 6	K M 6	前方後方墳	主尾根上	前方部端から後方部へ遊歩道、前方部端ライン不明瞭。	約32	9.2	5	14.8	11.8	8.2	4.6	14.2	-	18	12.2	20	9.4	後方部	4.8	1.4	
経塚山古墳群 7号墳	K M 7	K M 7	前方後方墳	北の枝尾根上	前方部は自然地形の可能性もある。	約23.5	6.5	4	5.4	4	5.2	2.6	-	-	18	8	14.6	7.6	2.4	3		
経塚山古墳群 8号墳	K M 8	K M 8	方墳	細い主尾根上	楕約9.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	9.5	3.8	8	3.9	-	-		
経塚山古墳群 9号墳	K M 9	K M 9	前方後円墳	細い主尾根上	約25.5	4.5	2.2	8	6	4.2	2.2	17.5	11	-	12	9	10	5.2	1.1	1.1		
経塚山古墳群	*KM10	-	方?	主尾根の北端部手前、西に枝尾根が分枝	古墳状隆起。方形にやや近い不整形。自然地形が崩壊。古墳の可能性もある。	楕約12	-	-	-	-	-	-	-	-	12	9	10	5.2	-	-		
経塚山古墳群	*KM11	-	方?	主尾根の北端部、北東段	古墳の可能性もある。	楕約14	-	-	-	-	-	-	-	-	14	8	8.2	6	-	-		
経塚山古墳群	*KM12	-	円?	尾根が分枝地点	古墳状隆起。自然地形?	8~10	-	-	-	-	-	-	-	楕8	10	-	-	-	-	-		
経塚山古墳群	*KM13	-	円?	KM10から分枝した枝尾根上	頂上は円形テラス、円墳が曲線の可能性あり。	約28	-	-	-	-	-	-	-	楕28	10	-	-	-	-	-		
経塚山古墳群	*KM14	-	円?	KM7から分枝した枝尾根上	古墳の可能性あり。	8~10	-	-	-	-	-	-	-	楕8	10	-	-	-	-	-		
経塚山古墳群	*KM15	-	円?	KM7から分枝した枝尾根上	古墳の可能性あり。	8~10	-	-	-	-	-	-	-	楕8	10	-	-	-	-	-		
経塚山古墳群	*KM16	-	円?	KM7から分枝した枝尾根上	古墳の可能性あり。	8~10	-	-	-	-	-	-	-	楕8	10	-	-	-	-	-		

27 砂田遺跡

- (1) 調査日 平成27年10月5日
- (2) 調査場所 南陽市池黒字砂田
- (3) 調査目的

対象地の一帯は広く水田が広がり、これまで遺跡有無の確認のための分布調査が実施できなかった地域である。今回、字砂田において水田の整備を行っていることを把握し、遺跡の有無確認のため現地踏査を実施した。

- (4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査する。

- (5) 調査結果

対象地は、周知の猫子前遺跡の南東約300mにあたり、北の上流方向には富貴田遺跡が所在する。織機川左岸の自然堤防が後背湿地にゆるやかに変化する自然堤防と低地の境目付近にあたる。

水田整備は現行水田の耕作土を20cm程度剥ぎ取り、土の入れ替えするもので、踏査時は、既に耕作土下の水田盤土層上面が露出している状況であった。この水田盤土の上面において、広範囲で須恵器片と土師器片の散布状況が確認された。表採された須恵器は平安時代の坏、坏蓋、甕で、土師器は坏である。

掘削深度が浅いため遺構は確認できず、遺物は下層から掻き揚げられたか又は流れ込んだ状況と思われる。新規遺跡である。



砂田遺跡表採遺物



第45図 砂田遺跡踏査範囲図 S=1/5000

28 坂井字戸瀬土、字下中島

- (1) 調査日 平成27年6月1日、10月30日
- (2) 調査場所 南陽市坂井字戸瀬土、字下中島
- (3) 調査目的

対象地は、遺跡未確認地であるが住宅建設の予定が生じたことから、遺跡台帳の整備を図るため踏査する。

- (4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査する。

- (5) 調査結果

対象地は、上無川左岸の自然堤防にあたり、現況は畑地及び果樹園である。字戸瀬土で須恵器裏片1点、字下中島で石器片1点を表採した。字下中島の地形は、北側に上無川が流れ、南側に堀の深い水路が流れており、字名のとおり川の中洲的な色合いが強い。今次踏査範囲の南側に自然堤防が広がることから、その微高地上に遺跡が存在する可能性があり、継続調査が必要である。



坂井地区表採遺物



第46図 坂井地区踏査範囲図 S= 1/3000

29 宮内字関口

(1) 調査日 平成27年12月15日

(2) 調査場所 南陽市宮内字関口

(3) 調査目的

対象地は、観音堂遺跡隣地で、分布調査未実施地である。自動車学校移転の予定が生じたことから、遺跡の有無を確認するため踏査する。

(4) 調査方法及び内容

写真撮影を行いながら踏査する。

(5) 調査結果

対象地は吉野川右岸にあたる。対象地中央を南北に吉野川旧河道が流れていたと思われる、東側の自然堤防は低く中州的な地形である。西側の自然堤防上に観音堂遺跡が立地するが、対象地は遺跡の範囲外で自然堤防東端の斜面にあたる。遺跡の所在地に比べ地形的に低い。地形の状況や踏査で遺物が確認できなかったことから、対象地内に遺跡が存在する可能性は低いと思われる。



第47図 宮内字関口踏査範囲図 S= 1/3000

III 試掘調査

1 長岡山東遺跡

- (1) 調査日 平成27年5月18日～21日
- (2) 調査場所 南陽市長岡字西田中西832
調査対象地(工事)面積3,126.26㎡
- (3) 調査原因 民間開発(93条)
- (4) 調査方法及び内容

当該地は周知の長岡山東遺跡内である。畑を盛土して約1m嵩上げる計画があることから、10mメッシュで幅1.2m×長10mのトレンチを14か所(TT1～TT14)を設定し、試掘調査を実施した。土層はトレンチ西壁を記録しTT5で深堀を行った。

(5) 結果

土層の確認と遺構・遺物の確認を行った。遺物は耕作土層から出土した。TP1、2、4からは土師器・須恵器が多く出土した。遺構は4ヶ所で検出された。

(6) 考察

対象地は長岡山丘陵の東に広がる緩傾斜地で、平成3年発掘調査地の東側にあたる。耕作土直下ですく地山となる地点が多く、時期は不明であるが広い範囲で削平を受けているものと思われる。対象地北東には崩れた壇状の隆起地形がある。

遺物はほぼ全面から出土したが出土層は全て耕作土であり、縄文土器から須恵器までが同一層から混在して出土する。遺物の出土量は対象地北端(TP1、2、4)で多い。

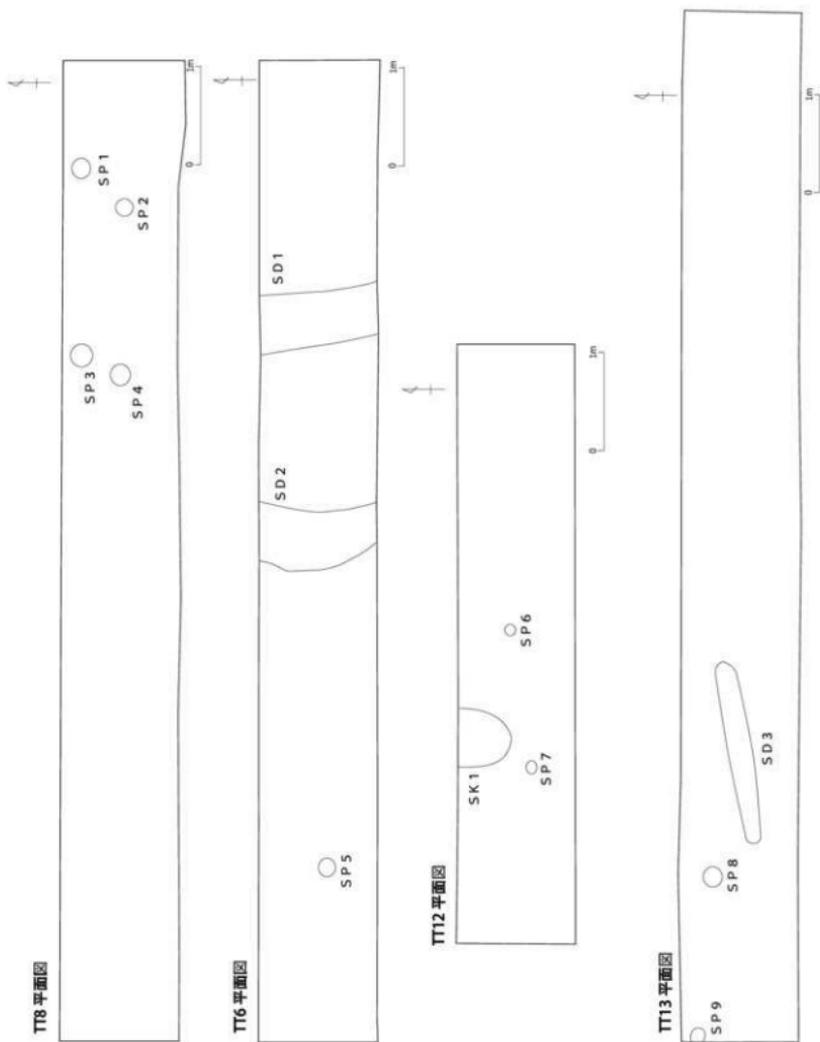
遺構は丘陵に近いTT6、TT8、TT12とTT13の4箇所で見積りと柱穴を検出した。遺構上部や浅い位置にあった遺構は削平により失われていると思われる。遺構の時代は不明である。畑地になる前は葡萄園であったため地山には葡萄の根や散水用エンビ管を埋めた溝等が残る。地形的には、長岡山東側は緩斜面が広がるが、長岡山西側では平成4年試掘調査や平成11年ボーリング調査で急激に地形が落ち込む状況が確認されている。



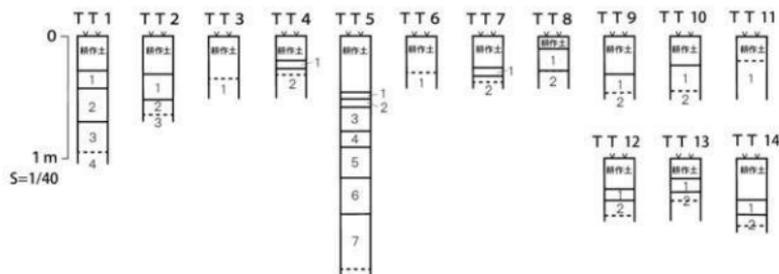
第48図 長岡山東遺跡開発予定地位置図 S=1/8000



第49図 長岡山東遺跡グリッド配置図
S=1/2500



第 50 図 長岡山東遺跡遺構平面図 S = 1/50



- TT 1
- 1 褐色砂質粘土
 - 2 黒色砂質粘土
 - 3 黒褐色砂質粘土
 - 4 褐色砂質粘土 (地山)
- TT 2
- 1 褐色砂質粘土
 - 2 黒色砂質粘土
 - 3 褐色砂質粘土 (地山)

- TT 3
- 1 褐色砂質粘土 (地山)

- TT 4
- 1 黒色砂質粘土 (10YR2/1)
 - 2 褐色砂質粘土 (10YR4/4)

- TT 5
- 1 灰褐色砂質粘土
 - 2 明褐色砂質粘土
 - 3 明褐色シルト粘土
 - 4 黒色シルト粘土
 - 5 暗灰色シルト粘土
 - 6 灰色粘土
 - 7 暗灰色粘土

- TT 6
- 1 褐色砂質粘土 (地山)

- TT 7
- 1 暗褐色砂質粘土
 - 2 褐色砂質粘土 (地山)

- TT 8
- 1 暗褐色砂質粘土
 - 2 褐色砂質粘土 (地山)

- TT 9
- 1 暗褐色砂質粘土
 - 2 褐色砂質粘土 (地山)

- TT 10
- 1 暗褐色砂質粘土
 - 2 褐色砂質粘土 (地山)

- TT 11
- 1 褐色砂質粘土 (地山)

- TT 12
- 1 暗褐色砂質粘土
 - 2 褐色砂質粘土 (地山)

- TT 13
- 1 暗褐色砂質粘土
 - 2 褐色砂質粘土 (地山)

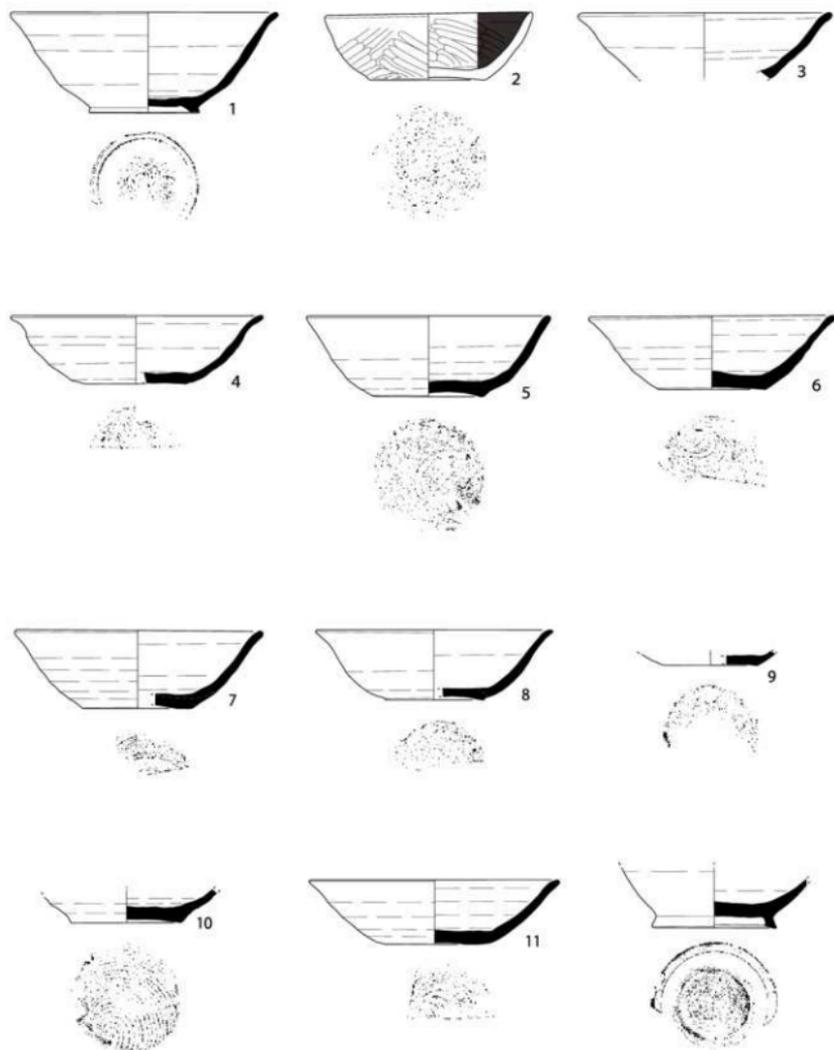
- TT 14
- 1 暗褐色砂質粘土
 - 2 褐色砂質粘土 (地山)



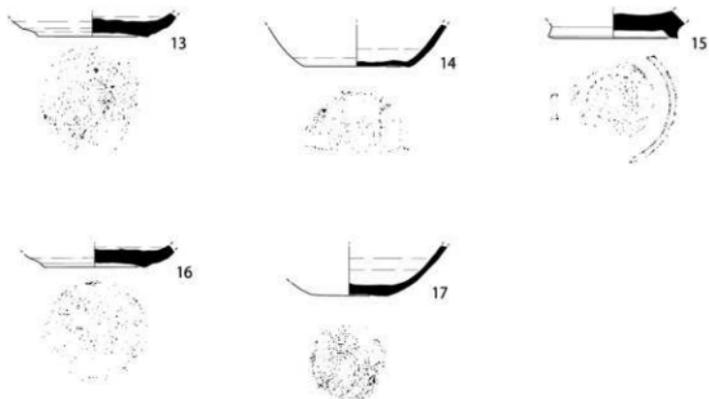
(参考) 平成4年度の長岡山丘陵西側の試掘地点の柱状図

(参考) 平成11年度の長岡山ボーリング調査柱状図

第51図 長岡山東遺跡トレンチ柱状図 S=1/40



TT1



TT4



2 沢田遺跡

- (1) 調査日 平成 27 年 5 月 7 ～ 19 日
- (2) 調査場所 南陽市島貫字六角（若狭郷屋字駅西 917 番地 5 ～ 917 番地 9）
調査対象地（工事）面積 4,510㎡
- (3) 調査原因 公共施設整備（94 条）
- (4) 調査方法及び内容

当該地は周知の沢田遺跡内である。平成 3 年度に対象地の一部で試掘調査を実施している。対象地に公共施設整備の予定があることから遺跡の状況把握のため試掘調査を行うものとした。調査対象範囲 4,510㎡について 20 m メッシュにより幅 1.6 m × 長 10 m のトレンチ 11 箇所を設定し試掘を実施した。現況は駐車場で盛土が厚いことから盛土の除去は重機を使用して行い、安全確保のため盛土掘削の幅を約 3 ～ 4 m とし、階段状にトレンチを掘り下げ予定の調査範囲を確保した。T T 1、4、5 においては一部深掘を実施した。記録後に埋め戻しを行った。

(5) 結果

土層の確認と遺構・遺物の確認を行った。遺物は対象地の北東部と南東部において土師器、須恵器の他、少量であるが弥生土器とみられる土器が出土した。遺構は竪穴住居及び柱穴で、遺構面までの深さは概ね 120cm である。北東部は工事において掘削しないことから現状保存とし、南東部を本調査対象とする。

(6) 考察

調査地は、南陽市島貫字六角に位置するが、字名は土地区画整理事業で字駅西に変わっている。周知の沢田遺跡の範囲内で吉野川の旧河道左岸にあたる。すぐ西隣に長堤跡と丸堤が位置し、自然堤防上に遺跡が立地する。対象地西側に設定した T T 7 ～ 10 及び T T 5 では遺構・遺物は検出されず、河川跡や湿地であったと思われる。

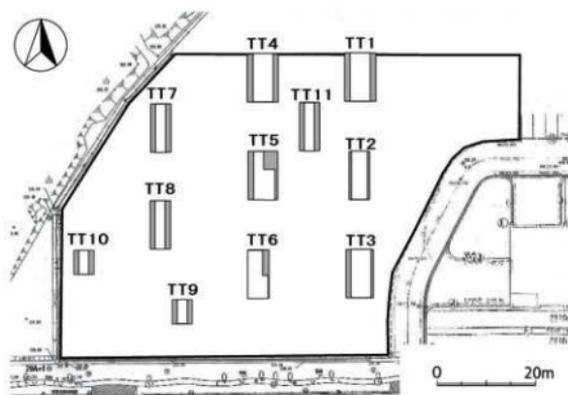
遺構・遺物は T T 1 ～ 4、6、11 で検出された。T T 1 では平安時代の竪穴住居 1 棟が検出されたほか弥生土器も出土した。

弥生土器が出土したことから、サブトレンチで平安時代の遺構面から 40cm 下まで掘り下げたが遺構は検出できなかった。T T 1 の遺構は記録保存を行った。本調査報告書で併せて報告する。T T 4、5 でも深掘を行ったが下層では遺構・遺物は確認できなかった。

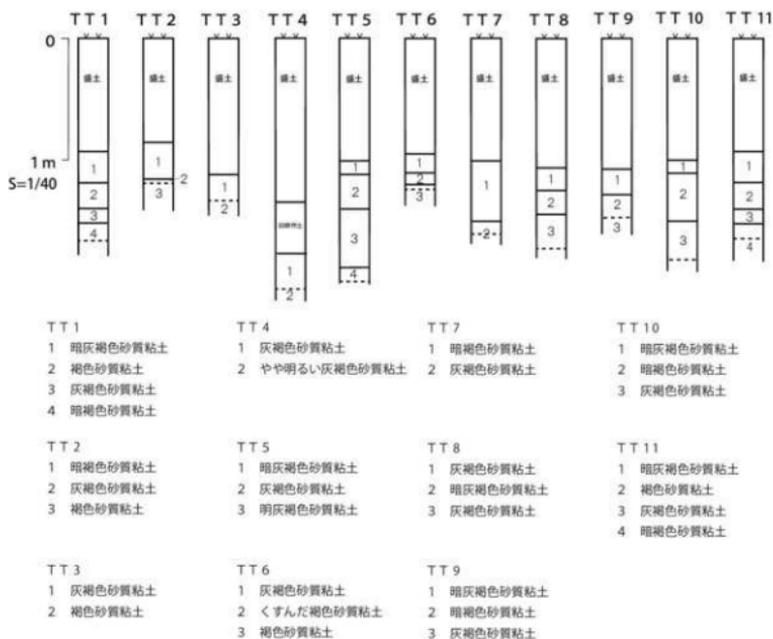
全地点で遺構面直上まで削平され遺構底面がわずかに残る状況と考えられる。



第 54 図 沢田遺跡開発予定地位置図 S= 1/5000



第 55 図 沢田遺跡グリッド配置図 S= 1/1000



第 56 図 沢田遺跡トレンチ柱状図 S= 1/40

3 沢見遺跡

- (1) 調査日 平成27年5月14～19日
- (2) 調査場所 南陽市若狭郷屋字沢見
調査対象地（工事）面積 1,019.7㎡
- (3) 調査原因 民間開発（93条）
- (4) 調査方法及び内容

対象地周辺では、昭和60年代に土器採集の情報があったが位置が不明で、平成9年度に山形県教育委員会が実施した試掘調査でも今次対象地を含む地域では遺跡が確認されなかった。調査担当者による沖郷条里制研究の過程で対象地東側に条里制に関わる南北方向の溝跡が存在する可能性が推測されたため、開発前に試掘調査を実施し遺跡の有無を確認する。調査対象範囲1,019.7㎡について10mメッシュで幅1m×長1mの試掘穴8か所と追加トレンチ（TT9）1か所の計9地点を設定した。このうちTP5、TP7を拡張してトレンチとし、手掘りで試掘調査を実施し、記録後に埋め戻しを行った。

(5) 結果

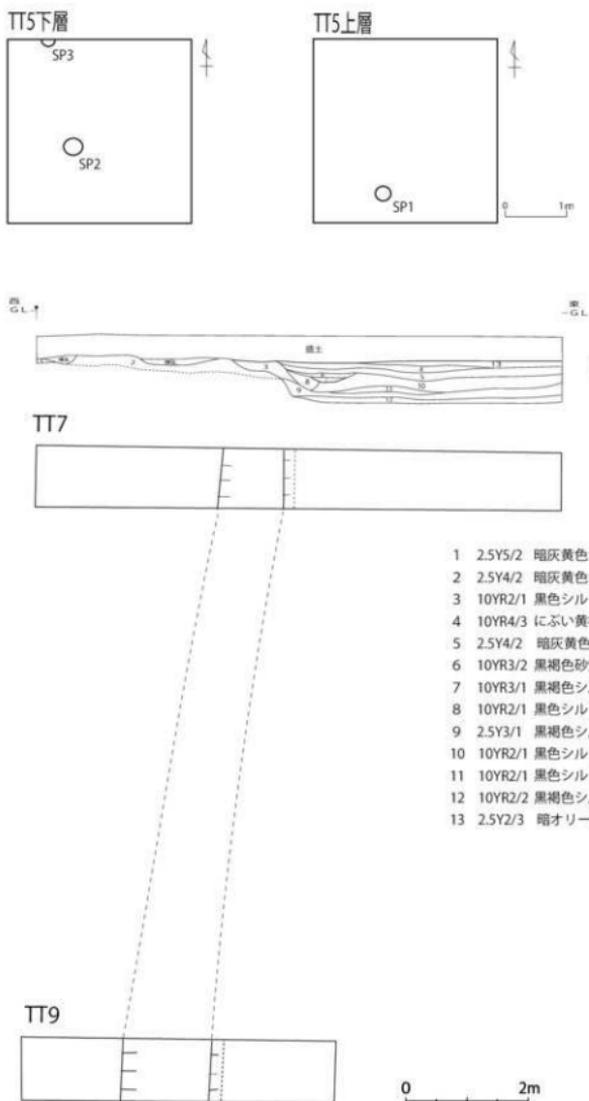
土層の確認と遺構・遺物の確認を行った。遺構・遺物は予想通り対象地の東半において検出された。遺物は土師器、須恵器及び弥生土器とみられる土器である。遺構は柱穴と幅7～8mの南北方向の平安時代の大溝と思われる。新規遺跡である。

(6) 考察

遺物はTT5、7、9、TP6で出土した。遺物は表土下40～50cm（第1文化層）及び75～80cm（第2文化層）から検出された。第1文化層は平安時代で、遺物は土師器及び須恵器である。第2文化層は弥生時代かと思われる。平成9年度の県試掘地点に近いTP3、4では遺構・遺物は確認されなかった。遺構はTT5～9の5箇所で見出され、TT5では上下の文化層両方で柱穴を検出した。TP6では須恵器片を含む土壌を検出した。TP7、8は土層から溝跡の可能性があると判断、拡張してトレンチとし、溝跡の方向を確認するためTT9を追加した。その結果TT7、9において遺物を多く含む大溝跡（SD1）を検出した。溝東端は調査地外にあると推定され溝最深部を中心とした場合、幅7～8mの南北方向の大溝と思われる。このSD1の第一次堆積層は黒味が強い粘土層で唐越遺跡で確認された区画溝の覆土と類似し8C前半とみられる遺物が出土している。SD1の底付近からは面取り加工のなされた棒状の木製品が出土している。溝は掘り直されていると考えられ、掘り直し後の溝底からは9Cの遺物が出土している。唐越遺跡の区画溝と今次検出のSD1は、距離にして約110m離れていることから、大溝は条里制に関係する可能性がある。（第55図）。

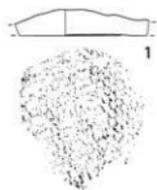


第57図 沢見遺跡開発予定地位置図 S=1/2000

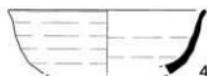
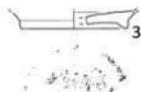
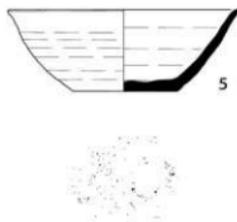


第 58 図 沢見遺跡遺構平面図・断面図 S= 1/80

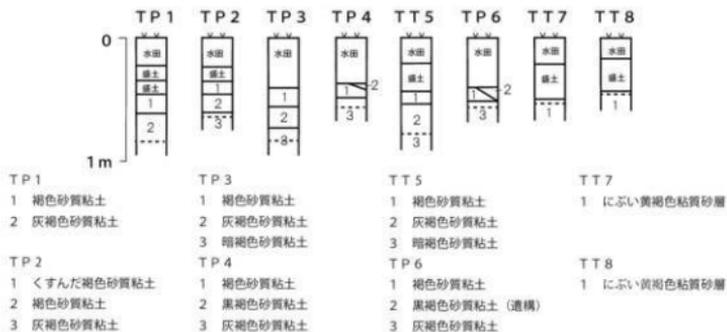
TT7 5D



TP6 SK



第59図 沢見遺跡出土遺物 S=1/3



第60図 沢見遺跡トレンチ柱状図 S= 1/40



第61図 沖郷条里制推定ラインと調査地 S= 1/10000

4 萩生田字上河原

- (1) 調査日 平成27年5月27日
- (2) 調査場所 南陽市萩生田字上屋敷 1359-3,4,5,6
調査対象地(工事)面積 683㎡
- (3) 調査原因 民間開発
- (4) 調査方法及び内容

対象地の西隣には萩生田遺跡が所在する。駐車場造成工事の予定が生じたことから萩生田遺跡の範囲を把握するため試掘調査を実施する。調査対象範囲683㎡について10mメッシュで幅1m×長1mの試掘穴8か所を設定した。

(5) 結果

土層の確認と遺構・遺物の確認を行った。遺物・遺物は出土しなかった。萩生田遺跡は当該地まで広がっていないことが確認された。TP3は果樹があるため試掘しなかった。

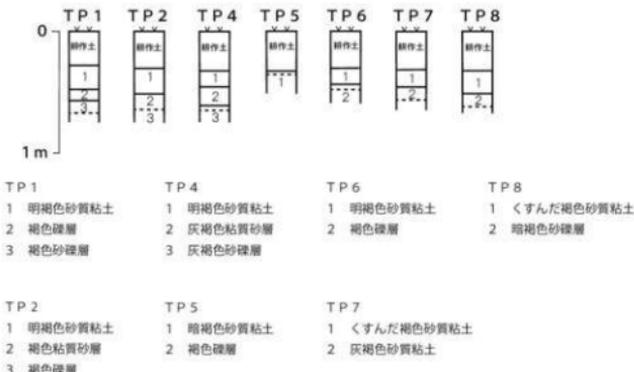
(6) 考察

表土層から川原石が多く混じる。耕作土の下には礫層が広がり60cm前後の深さに達すると水が湧き出す。下位層は砂礫、礫層であり、遺物・遺構ともに検出されなかった。

土層状況や地形図・字限図から今次調査地は旧吉野川の河川上にあたると思われる。



第62図 字上河原開発予定地位置図 S= 1/2000



第63図 字上河原トレンチ柱状図 S= 1/40

5 萩生田遺跡・高木遺跡

- (1) 調査日 平成 27 年 5 月 26 日～ 28 日
- (2) 調査場所 南陽市萩生田字久保（市道萩生田中央線）、字斎藤作
調査対象地（工事）面積 2,500㎡
- (3) 調査原因 市道整備事業（94 条）
- (4) 調査方法及び内容

対象地は萩生田遺跡の西端に位置する。市道側溝整備工事前の予定が生じたことから、萩生田遺跡の保護を図るため事前に試掘調査を実施し、遺跡の状況を把握する。調査対象範囲 2,500㎡について 10 m メッシュで幅 1 m × 長 20 m トレンチ 2 か所を設定し調査した。

(5) 結果

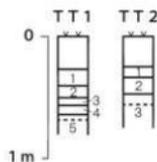
土層の確認と遺構・遺物の確認を行った。遺物は耕作土から出土した。遺構は確認されなかった。周辺踏査を行い、高木遺跡の南西で遺物が表採されることから高木遺跡の範囲を修正した。

(6) 考察

遺物は、平安時代の須恵器や土師器の他に永楽通宝 1 点が表土層及び旧耕作土から出土した。周辺遺跡で遺構面となる褐色粘土層直上から遺物が出土しないことから、遺物は流れ込みの可能性が高い。TT 1 中央付近で耕作土から掘り込まれている新しい溝跡があるが他に遺構は検出されなかった。地元の方によれば、対象地及びその西側の果樹園地と、対象地北西にある果樹園地の南側はかつて水田で、北西の果樹園地は低地を埋め立てたものとのこと。対象地は萩生田遺跡の西端にあっているが既存の遺跡範囲は妥当と考えられる。周辺踏査により高木遺跡の南西端に接する地点、対象地北側の字斎藤作の東側～字観音田南側一帯において奈良・平安時代の須恵器・土師器片を表採した。



第 64 図 萩生田遺跡開発予定地位置図 S= 1/2000



TT 1

- 1 暗褐色砂質粘土
- 2 褐色粘質砂層
- 3 黒褐色砂質粘土
- 4 暗褐色砂質粘土
- 5 灰褐色砂質粘土

TT 2

- 1 褐色砂質粘土
- 2 黒褐色砂質粘土
- 3 灰褐色砂質粘土

第 65 図 萩生田遺跡トレンチ柱状図

S= 1/40



萩生田遺跡出土の永楽通宝

6 宮内字大清水

- (1) 調査日 平成27年5月25日
 (2) 調査場所 南陽市宮内字大清水 4670-1
 調査対象地(工事)面積 1,561㎡
 (3) 調査原因 民間開発
 (4) 調査方法及び内容

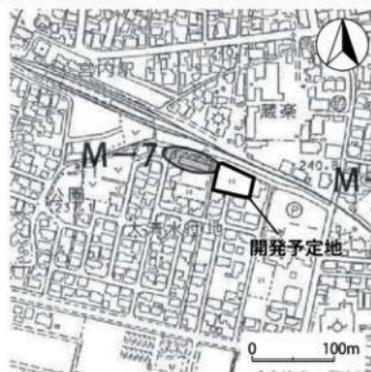
対象地は大清水遺跡の東に位置する。宅地造成の予定が生じたことから大清水遺跡の範囲を調査するため事前に試掘調査を実施し遺跡の状況を把握する。調査対象範囲 1,561㎡について 10mメッシュで幅 1m×長 10mのトレンチ7か所と幅 1m×長 1mの試掘穴 2箇所の計 9地点を設定し、うちトレンチ 5箇所と試掘穴 1箇所を調査した。

(5) 結果

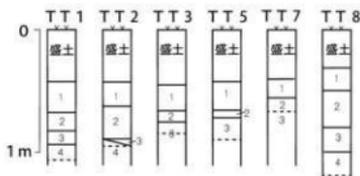
土層の確認と遺構・遺物の確認を行った。遺物は TT5 の旧表土層から出土した。遺構は確認されなかった。遺跡の範囲ではないと思われる。

(6) 考察

遺物は TT5 において須恵器片 1 点が旧耕作土層から出土した。おそらく流れ込みと思われる。遺構は検出できなかった。土層は耕地整理による盛土下に旧耕作土、暗褐色～黒褐色粘土が堆積する。下位層では灰色味が強まり、礫層に達すると字名「大清水」が示すとおり水が噴出する。特に東側では湧水が多く TT8 ではわずかに数分で 1×10m のトレンチ内に 40cm 以上の水が溜まる状況であった。対象地西側ほど黒味のある硬い粘土層が厚くなり、湧水も少なくなることから、大清水遺跡は対象地より西側に所在すると考えられる。TT2 では、深さ 90cm で西端から約 1.5m の範囲に黒色粘土層の堆積が見られ、西側に落ち込む地形がある可能性がある。

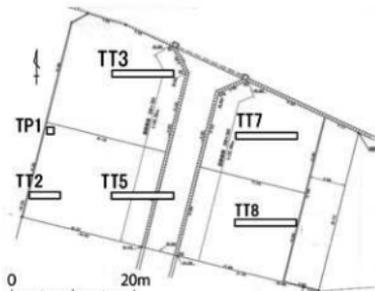


第 66 図 字大清水開発予定地位置図
S= 1/6000



TT1	TT3	TT7
1 褐色粘質砂層	1 くすんだ褐色砂質粘土	1 くすんだ暗褐色砂質粘土
2 やや細かい褐色粘質砂層	2 暗灰褐色粘土	2 暗灰褐色砂質粘土
3 暗褐色砂質粘土	3 暗灰色砂礫層	3 暗灰色砂礫層
4 やや重い褐色砂質粘土		
TT2	TT5	TT8
1 くすんだ褐色砂質粘土	1 くすんだ褐色砂質粘土	1 暗褐色砂質粘土
2 暗褐色砂質粘土	2 暗灰色褐色粘土	2 くすんだ暗褐色砂質粘土
3 やや重い暗褐色砂質粘土	3 黒褐色砂質粘土	3 暗褐色粘土
4 黒褐色粘土	4 暗灰褐色粘土	4 暗灰色砂礫層

第 67 図 字大清水トレンチ柱状図 S= 1/40



第 68 図 字大清水トレンチ配置図 S= 1/800

7 西原遺跡

- (1) 調査日 平成27年4月20～23日(試掘)、10月5日～12月2日(立会)
- (2) 調査場所 南陽市字西原750-1外
調査対象地(工事)面積17,579.56㎡
- (3) 調査原因 民間開発(93条)
- (4) 調査方法及び内容

対象地には西原遺跡が存在することから、遺跡内容の把握と保護を図るため試掘調査を実施した。調査対象範囲17,579.56㎡について、20mグリッドを設定し、幅1m×長1mの試掘穴38か所、幅1m×長5mのトレンチ3か所、幅1m×長10mのトレンチ1箇所、幅1m×長23mのトレンチ1箇所について試掘を実施し、掘削したトレンチは記録終了後に埋め戻しを行った。

(5) 結果

土層の確認と遺構・遺物の確認を行った。遺物は10地点から出土した。TT1から横位で埋納した合口甕が出土した。遺構は溝跡が2か所で確認されたが、柱穴や住居跡等は検出されなかった。10～12月の立会調査では主に断面観察で溝跡を確認した。平成28年1月以降、耕作土除去後に平面観察を行うため1月の以降調査は次回報告とする。

(6) 考察

現況は、果樹園、畑地、荒地である。調査地西端を織機川が南流しているが、現堤防外にも低平な荒地が南北に続いており織機川の河道であったと思われる。西原遺跡は、織機川左岸の南北に延びる自然堤防上の微高地に立地するとみられる。

地権者の話によれば、堤防外の低平地付近(対象地南西付近)に流行り病で亡くなった人の焼き場があった(近世)と伝えられており、遺物が散布する一帯はかつて一度水田にしたが水がかりが悪いため桑畑にし、その後、畑や果樹園になったとのことである。

遺物の出土層は主に耕作土層及び第1～2層である。遺物は須恵器(坏等)及び土師器(甕等)である。遺構はTT1及び5で溝跡が検出されたが時代不明である。TT5のSD2は幅8m程度の大溝である可能性がある。川辺のTP5(桜桃園内)で焼土が見られたが、営農に伴うものか又は地権者の言う焼き場に関係する可能性があろう。

①埋没地形について

今次調査地では西から東へ、旧河川→自然堤防→湿地→洪水等による真砂土で埋没した旧河道か水路跡→湿地→自然堤防と地形が遷移すると推測される。このうち、遺物が出土するのは主に2つの湿地帯の範囲内で、出土層は砂の多い黒褐色粘土層を中心としている。真砂土が覆う一帯の様相は、昨年の大震災で織機川が氾濫し被害を受けた状況と類似する。大雨等で土砂が水路や川を埋め尽くした可能性がある。西側の自然堤防から遺物が出ないことから微高地が削平され、均されている可能性もある。

②遺物(合口甕)について

遺物は、平安時代の土師器と須恵器で概ね9世紀後半～10世紀半ばと思われる。特にTT1一括出土した土師器甕と坏のセットは、横位で埋納した合口甕である。残念ながら出土時に調査員が離れた場所で重機に指示を出しており、その出土状況を記録することができなかった。一時作業を中断し調査員に連絡するという手順が作業員に徹底できなかったことが悔やまれる。地表から約40cmの深さで、南北方向に横位でつぶれて重なった土師器が出土し、上部の破片を取り上げたところ、土師器甕内から須恵器坏(第69図3)

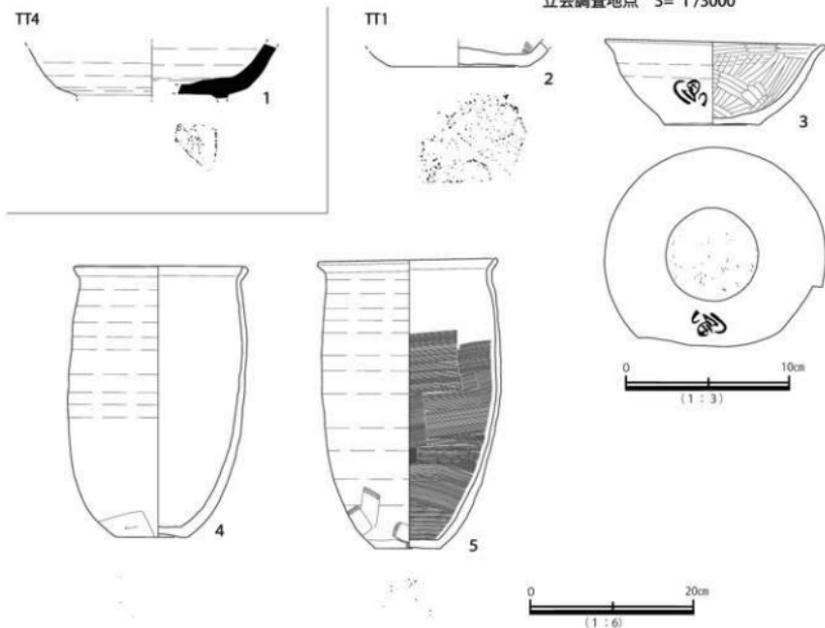
が出土したとのことである。これらの状況から長胴甕2固体(第70図4,5)を口縁部で合口して横位で埋設した埋納遺構である可能性が高い。出土状況を確認するため出土地点西側にTT1西壁をベルト状に残して2m×2mの拡張トレンチを設定して精査を行ったが土坑等の痕跡は確認できなかった。削平により土壌を掘り込んだ層が完全に失われ、土壌底面からの立ち上がり部分まで削られたが、土壌内の合口甕付近のみ偶然削り残されたものと思われる。また土壌北側は開発予定地のため調査できなかった。合口甕から一括出土した須恵器環(第69図3)には墨書で「富」と書かれており、祭祀遺構である可能性がある。

③立会調査(溝跡)について

立会調査を10月から実施した。防火水槽工事地(A地点)50㎡×深さ3mでは、遺物は確認できなかったが掘削地西半に大溝跡の落ち込みを確認した。溝跡は東半部の立ち上がりのみを検出した。上場幅3.2mで深さ1.8m、おそらく幅7~8m程の南北方位の大溝とみられ、TT5で検出したSD2に続く可能性がある。大溝の中心から織機川までの距離は川岸まで約109m、河川中央まで約115mである。また、TP9とTP44の間にあたるB地点では幅約1mの東西方位の溝跡が確認された。



第69図 西原遺跡トレンチ配置図及び立会調査地点 S=1/3000

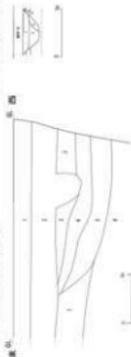


第70図 西原遺跡出土遺物実測図
1~3 : S=1/3、4~5 : S=1/6



立会地点 A (南壁)

立会地点 B (東壁)



T15 北壁断面図



- T11
- 1 暗褐色粘質粘土 (耕作土)
 - 2 暗褐色粘質粘土 (砂多)
 - 3 暗褐色粘質粘土 (粗砂多)
 - 4 暗褐色粘質砂層
 - 5 黒褐色粘質粘土
 - 6 暗褐色粘質砂層 (粗砂)
 - 7 暗褐色粘質粘土 (3mm 砂)
 - 8 暗褐色粘質砂層 (粗砂多)
 - 9 暗褐色粘質粘土

T15

- 1 暗褐色粘質砂層
- 2 暗褐色粘質粘土 (3mm 砂)
- 3 暗褐色粘質砂層
- 4 暗褐色粘質砂層 (粗砂)
- 5 やや明るい暗褐色粘質砂層 (2mm 砂)
- 6 暗褐色粘質砂層 (粗砂を漸く含む)
- 7 暗褐色粘質砂層

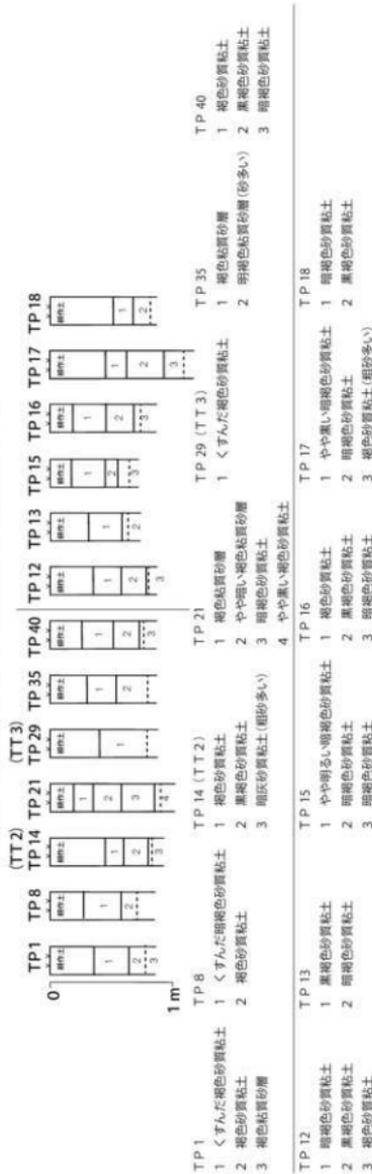
立会地点 A (南壁)

- 1 盛土
- 2 暗褐色粘質粘土 (粗砂)
- 3 暗褐色粘質粘土
- 4 灰色粘土
- 5 黒褐色粘質粘土
- 6 暗褐色粘質粘土
- 7 黒褐色粘質粘土

立会地点 B (東壁)

- 1 暗褐色粘質砂層
- 2 暗褐色粘質粘土
- 3 くすんだ暗褐色粘質粘土
- 4 暗褐色粘質砂層
- 5 暗褐色粘質粘土
- 6 暗褐色粘質砂層 (粗砂多)

第 71 西原遺跡 T 1、T 5 及び立会地点断面図 S=1/100



第 72 図 西原遺跡トレンチ支柱断面 S=1/40 ※横断 (TP1~40)・縦断 (TP12~18)

8 植木場一遺跡

- (1) 調査日 平成27年8月6日～10日(試掘)、11月4日(立会)
 (2) 調査場所 南陽市字露橋360-2
 調査対象地(工事)面積458.17㎡
 (3) 調査原因 民間開発(93条)
 (4) 調査方法及び内容

対象地は植木場一遺跡の範囲内である。個人住宅の立替工事が予定されているため既存建物の解体後に試掘調査を実施し、遺跡の内容や状況等を把握し遺跡の保護に努めるものとする。敷地458.17㎡のうち新築工事に係る68.7㎡を調査対象範囲とし、2m×5mのトレンチ1箇所を設定し調査した。表土層を重機で剥離し下層を手掘りで試掘を実施した。浄化槽工事の際に立会調査を実施した。

(5) 結果

遺物は土師器及び須恵器が出土した。遺構は溝跡とピットを検出した。立会調査地点は遺構・遺物共に未検出。

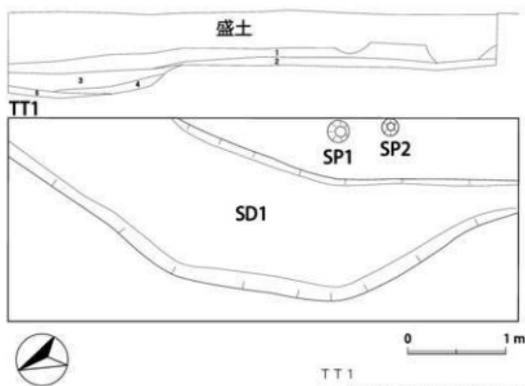
(6) 考察

遺構は、溝(SD1)1本、ピット2個を検出した。遺構面は、現表土から55cm下にある褐色砂質粘土層の地山である。遺物は土師器片及び須恵器片で、出土層は旧表土下の耕作土層及びSD1である



第73図 植木場一遺跡トレンチ配置図 S=1/500

TT1 東壁



TT1

- 1 10YR2/1 ぐすんだ黒褐色砂質粘土
- 2 10YR2/1 黒褐色砂質粘土
- 3 10YR2/1 暗い黒色砂質粘土
- 4 10YR1.7/1 黒色粘土
- 5 10YR2/1 黒褐色砂質粘土

SP断面図



SP1、SP2

- 1 10YR2/1 黒褐色砂質粘土
- 2 10YR2/1 黒褐色砂質粘土

第74図 植木場一遺跡TT1平面図・断面図 S=1/50

9 三間通字円蔵西

- (1) 調査日 平成27年8月26日～27日
- (2) 調査場所 南陽市字円蔵西
調査対象地（工事）面積 1,000㎡
- (3) 調査原因 民間開発
- (4) 調査方法及び内容

対象地は、東唐越館跡の隣接地で分布調査未実施地である。宅地造成工事の計画があることから東唐越館跡の範囲を把握するため試掘調査を実施した。

調査対象範囲 1,000㎡について、10mグリットを設定し、幅2m×長10mのトレンチ4箇所を設定し、試掘を実施した。埋没地形を把握するため、TT1とTT4を延長した。掘削したトレンチは記録後に埋め戻しを行った。

(5) 結果

対象地は、吉野川流域のカドミル毒特別対策事業地内で大規模な盛土工が実施され、盛土下の土は事業地外への移動が禁じられている地域である。遺物は確認されなかった。遺構も特に検出されなかったが、明治時代の字限図に描かれた道路と水路が検出された。

(6) 考察

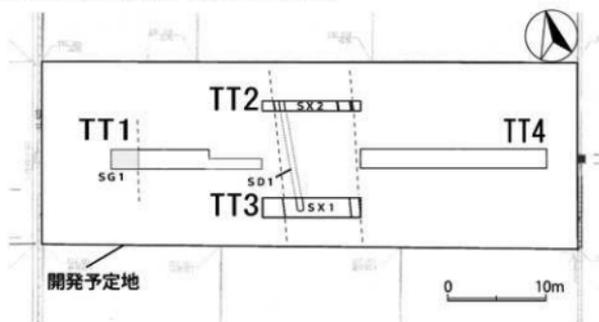
対象地は、東唐越館跡の東側に位置する。館跡は明治8年字限図で明瞭に確認でき、今次調査地には館の東側を流れる水路と道路が通っている。TT3西側の盛土下の層は重機の刃もなかなか通らないほど固く締まっていたが、TT3のSD1又はSX1、2が字限図に見られる水路でその西側の硬い土層は道路であると考えられる。

TT1：西端で河川跡（SG1）を検出した。溝あるいは水田に伴うと思われる新しい落ち込みが見られた。

TT2：中央付近に不明瞭な幅広い浅い落ち込み（SX2）が見られた。東側に新しい溝跡（SD1）がある。

TT3：TT2同様に中央付近に幅広い落ち込み（SX1）がある。SX2より輪郭が明瞭である。SX1とSX2は連続すると見られることから、幅広い溝跡か又は地形が変換するラインに沿って同一の土層が残存している状況が考えられる。西側に新しい溝跡（SD1）があり、その西側の土（土層第3層）は非常に硬い。

TT4：西端と東端に新しい溝跡がみられた。



第75図 三間通字円蔵西トレンチ配置図 S= 1/500



第76図 東唐越館跡と開発予定地

TT1北壁

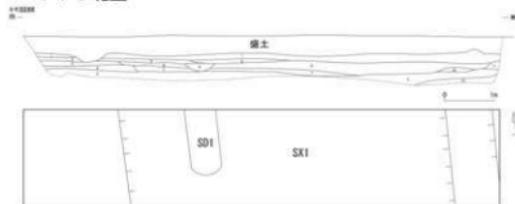


- | | | |
|-----------------------------|--------------------------------|-------------------------|
| 1 10YR3/2 黒褐色粘土 | 9 10YR4/1 褐灰色砂質粘土 (細砂多い) | 17 2.5Y3/2 黒褐色オレンジ混砂質粘土 |
| 2 10YR4/1 褐灰褐色砂層 (厚 2~5 cm) | 10 10YR3/1 黒褐色砂質粘土 | 18 10YR3/1 黒褐色砂質粘土 |
| 3 2.5Y3/2 黒褐色粘土 | 11 2.5Y3/2 黒褐色砂質粘土 (細砂多い) | |
| 4 10YR2/2 黒褐色粘土 | 12 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質粘土 (褐色混じる) | |
| 5 2.5Y4/1 黄灰色砂質粘土 (砂多め) | 13 10YR3/1 黒褐色砂質粘土 (硬い) | |
| 6 10YR3/1 黒褐色砂質粘土 | 14 2.5Y3/2 黒褐色砂質粘土 (褐色混じる, 細砂) | |
| 7 10YR3/2 黒褐色砂質粘土 (硬く締まる) | 15 10YR4/1 黄灰色シルト粘土 | |
| 8 10YR2/2 黒褐色粘土 | 16 10YR4/1 黄灰色砂質粘土 | |

TT2



TT3北壁



- | |
|--|
| 1 10YR3/1 黒褐色粘土 (粘性強い、硬く締まる) |
| 2 10YR4/2 灰黄褐色粘土
(10YR4/1 褐灰色粘土混入、粘性強い) |
| 3 10YR2/2 黒褐色粘土 (粘性強い、とても硬く締まる) |
| 4 10YR3/3 暗褐色粘土 (粘性強い) |
| 5 10YR6/3 にぶい黄褐色粘土
(粘性強い、締まり弱い) |
| 6 10YR2/2 黒褐色粘土
(粘性強い、硬く締まる、3より黒い) |
| 7 10YR2/1 黒色粘土 (粘性強い、硬く締まる) |
| 8 10YR3/1 黒褐色粘土 (粘性強い、硬く締まる) |
| 9 10YR2/2 黒褐色粘土 (粘性強い、硬く締まる) |
| 10 10YR2/2 黒褐色粘土
(粘性強い、硬く締まる、やや灰色味帯ひる) |
| 11 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘土 (粘性強い、くすむ) |
| 12 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘土
(粘性強い、締まり弱い) |

第77図 字内蔵西TT1、TT2、TT3平面図・断面図 S=1/100

10 宮内字桜田一

- (1) 調査日 平成 27 年 10 月 26 日
- (2) 調査場所 南陽市桜田一
調査対象地 (工事) 面積 9,000㎡
- (3) 調査原因 民間開発
- (4) 調査方法及び内容

対象地は、桜田遺跡隣接地で分布調査未実施地である。宅地造成工事の計画があることから遺跡範囲を把握するため試掘調査を実施した。

調査対象範囲 9,000㎡について、対象地に 20 mグリットを配し、幅 2 m×長 5 mを基本とするトレンチを 2 箇所、幅 1 m×長 1 mの試掘穴 11 箇所を設定し、手掘りによる試掘を行った。試掘後は埋め戻しを行った。

(5) 結果

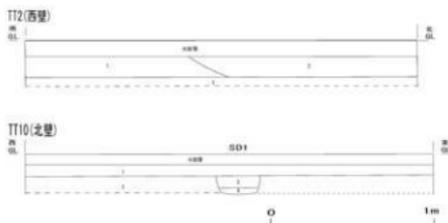
遺構・遺物は確認できなかった。

(6) 考察

遺構・遺物は検出されなかった。T T 10 では時代不明の溝跡が 1 箇所確認された。耕地整理による現水田層・盤土層下に旧水田と思われる層が残る箇所も見られるが、いずれの地点においても現表土下 60cm 以下になると礫層や砂利層に変化することから、今次調査地は全面にわたって河川跡及び河川敷跡の範囲に相当すると思われる。



第 78 図 桜田一トレンチ配置図
S= 1/3000



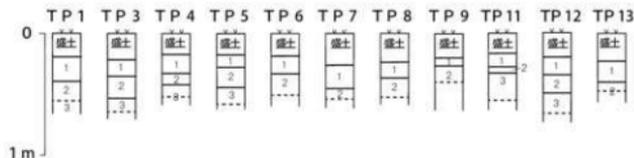
第 79 図 桜田一-TT 2、TT 10 断面図 S= 1/30

TT 2

- 1 暗褐色砂質粘土
- 2 暗褐色砂質粘土 (礫多い)
- 3 褐色砂質粘土

TT 10

- 1 暗褐色砂質粘土
- 2 黒褐色砂質粘土
- 3 褐色砂質粘土 (橙色混入り)
- 4 暗褐色砂質粘土 (橙色混入り)



TP 1	TP 3	TP 4	TP 5	TP 6	TP 7	TP 8	TP 9	TP 11	TP 12	TP 13
1 暗褐色砂質粘土 (礫多い)	1 暗褐色砂質粘土 (礫多い)	1 暗褐色砂質粘土 (礫多い)	1 暗褐色砂質粘土	1 暗褐色砂質粘土	1 暗褐色砂質粘土	1 暗褐色砂質粘土	1 暗褐色砂質粘土 (礫多い)	1 灰褐色砂質粘土	1 暗褐色砂質粘土	1 暗褐色砂質粘土 (礫多い)
2 褐色砂質粘土 (礫多い)	2 灰褐色砂質粘土 (礫多い)	2 暗褐色砂質粘土 (礫多い)	2 暗褐色砂質粘土	2 暗褐色砂質粘土 (礫多い)	2 暗褐色砂質粘土 (礫多い)	2 暗褐色砂質粘土 (礫多い)	2 暗褐色砂質粘土 (礫多い)	2 黒褐色粘土	2 暗褐色粘土	2 褐色粘質砂層 (礫多い)
3 灰褐色砂質粘土	3 暗褐色粘質砂層 (礫多い)	3 褐色砂質粘土	3 褐色砂質粘土	3 褐色粘質砂層 (礫多い)						
TP 3	TP 5	TP 9	TP 11	TP 12	TP 13					
1 暗褐色砂質粘土	1 暗褐色砂質粘土	1 暗褐色砂質粘土 (礫多い)	1 灰褐色砂質粘土	1 暗褐色粘土	1 暗褐色砂質粘土					
2 灰褐色砂質粘土	2 褐色砂質粘土	2 褐色砂質粘土 (礫多い)	2 褐色粘質砂層 (礫多い)	2 褐色粘質砂層 (礫多い)	2 褐色粘質砂層 (礫多い)					
3 褐色粘質砂層	3 褐色砂質粘土 (砂多い)	3 褐色砂質粘土 (砂多い)	3 褐色粘質砂層	3 褐色粘質砂層	3 褐色粘質砂層					

第 80 図 桜田一トレンチ柱状図 S= 1/40

11 東六角遺跡

- (1) 調査日 平成27年10月16日
 (2) 調査場所 南陽市三間通字六角西197
 調査対象地(工事)面積2,200㎡
 (3) 調査原因 民間開発(93条)
 (4) 調査方法及び内容

対象地は、東六角遺跡の西端にあたる。宅地造成工事の計画があることから、遺跡の内容を把握するため試掘調査を実施した。

調査対象範囲2,200㎡について、幅2m×長5mを基本とするトレンチを設定した。当初は6箇所を計画したが、対象地内に昭和61年県教委による試掘調査地点が2箇所あることから実施にあたって4箇所設定し、TT3のみ1m×1mの試掘穴とした。手掘りによる試掘を行い、試掘後は埋め戻しを行った。

(5) 結果

遺構・遺物は確認できなかった。

(6) 考察

県教委試掘地点2箇所と同様に、遺構・遺物は検出されなかった。対象地の西北から東南方向に自然地形とみられる幅広い低地(暗褐色～黒褐色粘土層)が続く状況が確認された。遺跡は、対象地東側の微高地上に立地するとみられ、この低地は後背湿地にあたるものと思われる。



第81図 東六角遺跡トレンチ配置図
S= 1/2000



第82図 東六角遺跡トレンチ柱状図 S= 1/40

13 三間通字西野々（古墓地）

- (1) 調査日 平成27年9月28日（踏査）、10月20日（試掘）
- (2) 調査場所 南陽市字西野々（古墓地：三ヶ山家墓地）
調査対象地面積 144㎡
- (3) 調査原因 河川改修事業
- (4) 調査方法及び内容

対象地は、分布調査未実施地である。吉野川河川改修事業による河川拡幅に伴う堤防整備の計画地である。佐藤鎮雄氏（市文化財保護審議会委員）から、当該地に方形壇を伴う古墓地があるという情報がよせられたことから、現地を確認し、遺跡の有無を確認するため調査した。周辺踏査を実施後、調査対象範囲 144㎡について方形壇側辺の東側と南側に計2箇所のトレンチ（幅1m×長2m）を設定し、手掘りによる試掘を行った。試掘後は埋め戻した。

(5) 結果

方形壇は近世墓地に伴う塚である。

(6) 考察

①踏査

調査範囲は三間通地区の字西野々で吉野川左岸の段丘上にあたる。古い墓地が2箇所存在する。そのうち吉野川に近い位置にある古い墓地を墓地Aとし、JR線路に近い墓地を墓地Bとする。今回の河川改修事業にかかるのは墓地Aである。

墓地Aは低平な方形壇を成しており、壇上の平坦面に墓石が立ち並ぶ。墓石群は中央に「天和三年」（1683年）銘の墓があり、両脇に五輪塔と「延享元年」（1744年）銘の墓が並び周辺に小型の墓石や地藏仏が取り囲む。北側奥には小型近世板碑が1基存在する。石材は全て凝灰岩である。

方形壇は、下場で南北長9.7m×東西長8.9m、上場で南北長7.5m×東西長6.7m、壇の高さは48～50cmである。周辺に周壕等の落ち込みは見られない。遺物は確認できない。壇上の天和三年墓石等の正面に横長（幅約50～60cm×長さ約5m）に川原石が敷き詰められている。

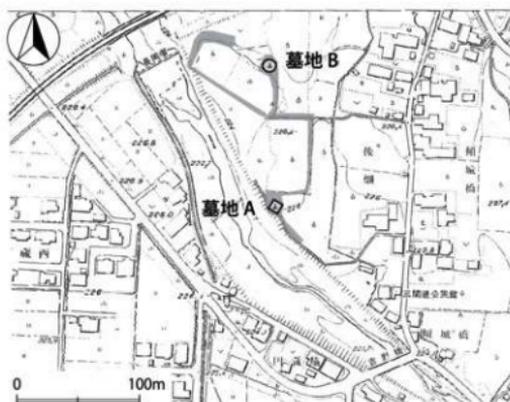
墓地Bは吉野川左岸の河岸段丘上に位置し、板碑4基を含む墓石群が所在している。墓地Bの南側の低い窪地は、旧河道の蛇行部を埋め立てた三間通地区児童公園跡である。板碑は、一番大きなものは三界万霊塔となっており、高さ120cm、横32cmと細長い。他の3基は、高さ87cm×幅35cm、高さ60cm×横20cm、高さ50cm×横20cmと小型で碑面は摩耗している。

②試掘

方形壇は近世墓地に伴う塚であると判断された。方形壇は、周辺を整地し川原石を多く混ぜた粘土を積み上げて形成されている。周壕は存在せず、塚の盛土構築法も異なることから古墳では無いと思われる。遺物はTT1において塚から転げ落ちたと思われる墓石上部（宝珠）がの表土層から1点出土したのみである。

TT1：耕作土直下で硬い地山で、塚の周囲を整地していると思われる。盛土部分は、暗褐色粘土に15～20cmほどの扁平な川原石を多く混ぜて積み上げている。

TT2：TT1と同様に耕作土直下は地山となる。遺構・遺物は確認されなかった。塚の盛土は川原石や炭粒を含む。



第85図 三間通古墓地調査位置図 S= 1/4000



第86図 三間通古墓地Aトレンチ配置図 S= 1/500



第87図 三間通西野々方形壇エレベーション図 S= 1/80

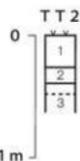
TT1 (北壁)



TT1

- 1 暗褐色砂質粘土
- 2 褐色砂質粘土 (川原石混じり)
- 3 明褐色砂質粘土 (地山、岩盤風化土)

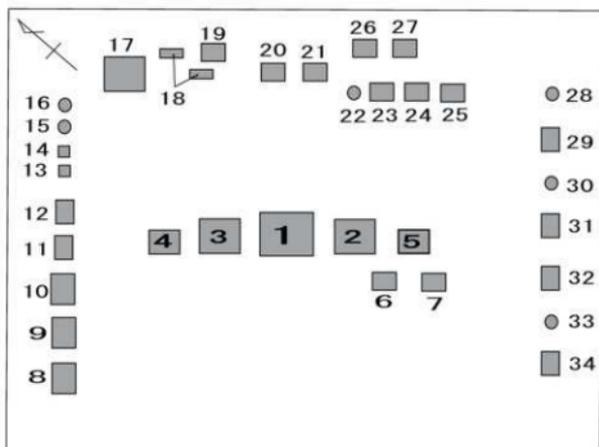
第88図 古墓地A TT1断面図 S= 1/40



TT2

- 1 暗褐色砂質粘土
- 2 やや黒い暗褐色砂質粘土 (川原石混じり)
- 3 灰色味のある褐色粘土 (地山)

第89図 古墓地A TT2柱状図 S= 1/40



NO	年号	形式	備考
1	天和二年 (1683 年)	笠塔婆	
2	享保七年 (1722 年)	別石五輪塔	
3	延享元年 (1744 年)	笠塔婆五輪塔	
4	不明	櫛形	2名を記銘
5	宝暦十一年 (1761 年)	櫛形 二連	
	安永九年 (1780 年)		
6	天保十四年 (1843 年)	駒形	
7	天保十四年 (1843 年)	櫛形 二連	
	天保十四年 (1843 年)		
8	文久三年 (1863 年)	笠塔婆	
9	□永二年	尖頭角柱	
10	天□□年	櫛形	
11	不明	櫛形	
12	□□十四年	尖頭角柱	
13	不明	小型塔	本来 1 基の万年塔内に納められていたものと思われる。
14	不明	小型塔	
15	不明	地藏菩薩座像 (丸彫形)	
16	不明	地藏菩薩立像 (有像櫛型)	
17	不明	万年塔	
18	不明	板碑型	
19	不明	万年塔の屋根か	
20	不明	角台頭角柱	家紋入り、台座に浮彫有り
21	□□十年	櫛形	
22	不明	地藏菩薩座像 (丸彫形)	
23	文化五年 (1808 年)	櫛形	
24	文政四年 (1821 年)	櫛形	2名を記銘
25	不明	無縫塔	
26	不明	万年塔か	
27	不明	不明	破損
28	不明	地藏菩薩立像 (丸彫形)	
29	享保十七年 (1732 年)	櫛形か?	上部欠損
30	不明	地藏菩薩立像 (有像櫛型)	
31	文化十二年 (1815 年)	櫛形	
32	文政二年 (1819 年)	尖頭角柱 二連	
33	不明	地藏菩薩立像 (箱仏)	別材笠有
34	安政□年	平頭角柱	

第 90 図 西野々古墓地内 墓石配置図及び一覧表

14 岩屋堂遺跡

- (1) 調査日 平成27年11月6日～9日
- (2) 調査場所 南陽市川樋字岩屋堂503番1、502番、501番、500番2(岩屋堂遺跡)
調査対象地面積4,126.61㎡
- (3) 調査原因 民間開発(93条)
- (4) 調査方法及び内容

対象地は岩屋堂遺跡の範囲である。対象地に介護保険施設にかかる造成工事の計画が生じたことから、事前に試掘調査を実施し遺跡の保護を図るものとする。

調査対象地4,126.61㎡について、20mメッシュを基本に幅1m×長1mの試掘穴18か所を設定した。調査の状況によりTT10、11は試掘せず、遺跡範囲を精査するためにTT1～6付近に10mメッシュで11箇所の試掘穴及びトレンチA～Kを追加し、計27箇所を手掘りにより調査し、試掘後は埋め戻した。

(5) 結果

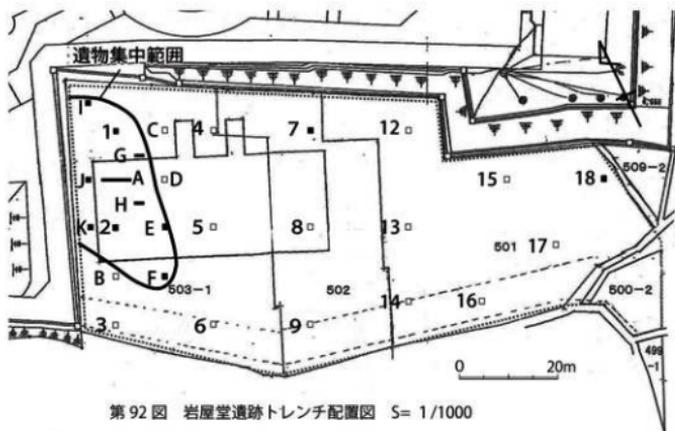
対象地西端、周知の岩屋堂遺跡の範囲内から縄文土器片が出土した。

(6) 考察

対象地は、西側から東側へ傾斜する扇状地状の地形を呈し、さらに南側と北側に埋没谷状の小河川跡があるとみられる。地形は対象地西端が一番高く、今次確認遺跡の中心となっている。遺物は、縄文土器及び石器でTP1、TP2、TP7、TP18、TP-A、TP-E、TP-F、TP-I、TP-Kから出土した。TP2とTP-K付近で最も出土量が多く、TP1とTP-Iが数点、他は1～2点である。TP-Kからは1点のみ古墳時代の土師器片が出土している。TP1、TP2、TP-K、TP-Fでは焼土の可能性のある赤みを帯びた層が見られ、柱穴は確認できなかったが一部で落ち込みがみられる。遺物の出土量と焼土等から遺跡の中心はTP2付近とみられる。



第91図 岩屋堂遺跡開発予定地査位置図 S=1/5000



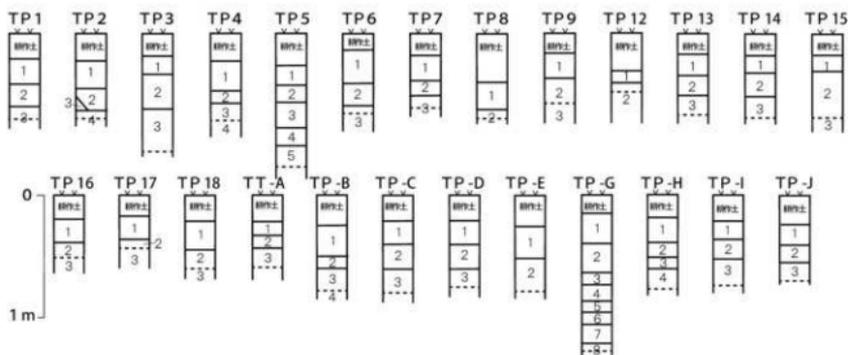
第92図 岩屋堂遺跡トレンチ配置図 S= 1/1000



第93図 岩屋堂遺跡T T-F、K断面図 S= 1/40



岩屋堂遺跡出土遺物



- | | | | |
|--|---|--|---|
| <p>TP 1</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 褐色砂質粘土 2 暗褐色粘質砂層 3 明褐色粘質砂層 | <p>TP 8</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 暗褐色砂質粘土 2 褐色粘質砂層 | <p>TP 17</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 褐色砂質粘土 2 暗褐色粘質砂層 3 褐色砂礫層 | <p>TP-G</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 褐色砂質粘土 2 くすんだ褐色粘質粘土 3 暗褐色粘質砂層 4 より黒い暗褐色粘質砂層 5 褐色粘質砂層 6 暗褐色粘質砂層 7 くすんだ褐色粘質砂層 8 褐色砂質粘土 |
| <p>TP 2</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 褐色砂質粘土 2 暗褐色粘質砂層 3 赤褐色粘質砂層 4 明褐色粘質砂層 | <p>TP 9</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 褐色砂質粘土 2 暗褐色砂質粘土 3 明褐色粘質砂層 | <p>TP 18</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 暗褐色砂質粘土 2 やや明るい暗褐色砂質粘土 3 褐色砂礫層 | <p>TP-H</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 褐色砂質粘土 2 暗褐色粘質粘土 3 くすんだ褐色砂質粘土 4 褐色砂質粘土 |
| <p>TP 3</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 褐色砂質粘土 2 暗褐色砂質粘土 3 暗灰褐色粘土 | <p>TP 12</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 暗褐色砂質粘土 2 褐色粘質砂層 | <p>TP-A</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 褐色粘質砂層 2 暗褐色粘質砂層 3 褐色砂質粘土 | <p>TP-I</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 褐色砂質粘土 2 くすんだ褐色砂質粘土 3 暗褐色砂質粘土 4 褐色砂質粘土 |
| <p>TP 4</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 褐色砂質粘土 2 くすんだ褐色砂質粘土 3 暗褐色砂質粘土 4 明褐色粘質砂層 | <p>TP 13</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 褐色砂質粘土 2 暗褐色砂質粘土 3 明褐色粘質砂層 | <p>TP-B</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 褐色粘質砂層 2 暗褐色粘質砂層 3 灰色味のある暗褐色粘質砂層 4 褐色粘質砂層 | <p>TP-J</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 褐色砂質粘土 2 暗褐色砂質粘土 3 より黒い暗褐色砂質粘土 |
| <p>TP 5</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 褐色砂質粘土 2 暗褐色砂質粘土 3 より暗い暗褐色砂質粘土 4 やや黒い暗褐色砂質粘土 5 明褐色粘質砂層 | <p>TP 14</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 褐色砂質粘土 2 くすんだ褐色砂質粘土 3 灰褐色粘質砂層 4 灰色砂礫層 | <p>TP-C</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 褐色砂質粘土 2 暗褐色砂質粘土 3 より黒い暗褐色砂質粘土 | <p>TP-D</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 ややくすんだ褐色砂質粘土 2 褐色砂質粘土 3 暗褐色砂質粘土 |
| <p>TP 6</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 褐色砂質粘土 2 暗褐色砂質粘土 3 明褐色粘質砂層 | <p>TP 15</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 褐色砂質粘土 2 暗褐色砂質粘土 3 褐色砂礫層 | <p>TP-E</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 褐色砂質粘土 2 暗褐色砂質粘土 | |
| <p>TP 7</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 褐色粘質砂層 2 暗褐色粘質砂層 3 灰褐色粘質砂層 4 褐色粘質砂層 | <p>TP 16</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 褐色砂質粘土 2 暗褐色砂質粘土 3 灰色粘土 | | |

第 94 図 岩屋堂遺跡トレンチ柱状図 S= 1/40

15 檜原遺跡

- (1) 調査日 平成27年11月10日(踏査)、25日(試掘)
 (2) 調査場所 南陽市西落合字東原466-1(檜原遺跡)
 調査対象地面積716㎡
 (3) 調査原因 民間開発(93条)
 (4) 調査方法及び内容

対象地は檜原遺跡の範囲である。対象地に個人住宅建築の計画が生じたことから、事前に試掘調査を実施し遺跡の保護を図るものとする。

調査対象地716㎡について、10mメッシュを基本に幅1m×長1mの試掘穴5か所を設定し手掘りにより試掘を行い、試掘後は埋め戻した。

(5) 結果

対象地西側のTP2で須恵器片が出土した。遺構はTP2で柱穴が1か所確認された。

(6) 考察

対象地は、上無川右岸の自然堤防にあたり、対象地西側の道路工事の際に県埋文センターが本調査を実施した。主として中世の建物を検出し、対象地北側に屋敷跡を推定している(2007「檜原遺跡発掘調査報告書」)。立地的には置賜郡衙関連遺跡である中落合遺跡の真西にあたり、対象地南辺を通る道は中落合館跡の中央を東西に通過する古道の名残である。

踏査では、対象地外の東側で須恵器片を表採した。対象地東側に小さな古墓地があり、万年塔1基と地蔵2基が微小なマウンドの上に立てられている。マウンドは、東西約5m×南北約6mの方形でマウンドの高さは約35cmである。マウンドの西に農作業小屋が建てられており、その基礎までマウンドだとすれば、東西約9m×南北約6mの長方形となる。地元の方の話によれば、その東南側にかつてもっと墓地があったが別の場所にまとめて供養塔を建てたとのこと。

遺物は、TP2から須恵器裏片1点のみであった。遺構は、TP2の北西角で柱穴が1つ検出された。遺構面は地表面から約53cm下である。遺物はその柱穴に近い遺物包含層から出土している。



第95図 檜原遺跡トレンチ配置図 S= 1/2000



第96図 檜原遺跡トレンチ柱状図 S= 1/40

16 若狭郷屋字石田（字西田）

- (1) 調査日 平成27年12月16日
- (2) 調査場所 南陽市若狭郷屋字石田（字西田、字玉ノ木）797-3
調査対象地面積 1,975㎡
- (3) 調査原因 民間開発
- (4) 調査方法及び内容

対象地は分布調査未実施地で西田遺跡の東側にあたる。対象地に介護福祉施設の建築計画が生じたことから、事前に試掘調査を実施し遺跡の有無を確認するものとする。調査対象地 1,975㎡について、20 mメッシュを基本に幅 1 m×長 1 mの試掘穴 8か所を設定し手掘りにより試掘を行い、試掘後は埋め戻した。

(5) 結果

遺物は 5 地点で出土したが、出土層から流れ込みと思われる。遺構は確認されなかった。

(6) 考察

対象地は、旧吉野川左岸の後背湿地にあたり、西隣の微高地上に西田遺跡が所在する。遺物は、土師器及び須恵器が TP 1, 3, 4, 6, 8 の 5 地点から出土したが、いずれも水田盤土及びその下の浅い層から出土し、摩滅しているものがみられることから遺物は流れ込みと思われる。土層の確認のため試掘穴に加え、ボーリングステッキにより対象地西端から東へ調査した。その結果、周辺の遺跡で平安時代の遺構面になる褐色粘土層が対象地西端で盤土直下にみられた。西田遺跡もこの層上に立地すると思われ、対象地北西角の畑地でも遺物が採集されることから、西田遺跡の範囲はこの褐色粘土層の範囲まで広がると考えられる。この褐色粘土層は対象地西端から東に進むにつれ徐々に深くなり西から 12 m 付近で検出されなくなる。代わって西から約 12 ~ 50 m (TP 1, 3, 4 付近) では礫層や礫混じりの粘土層が主体となり、河川跡のような状況となる。さらに西端から 50 m 以上東では灰色粘質砂層が広がる。



第 97 図 字石田トレンチ配置図 S= 1/4000



第 98 図 字石田トレンチ柱状図 S= 1/400

IV 立会調査

1 太子堂遺跡

- (1) 調査日 平成27年6月1日
- (2) 調査場所 南陽市柗塚字太子堂
- (3) 調査原因 民間開発
- (4) 調査方法及び内容

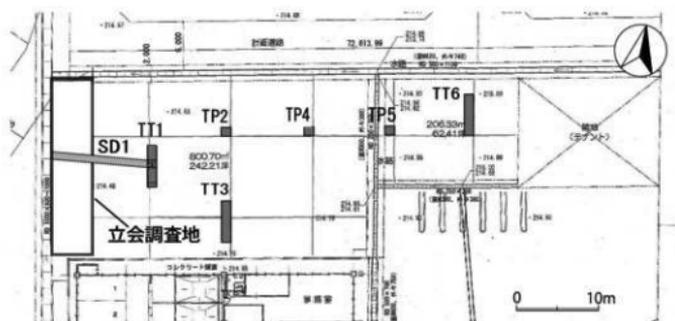
当該地は、周知の太子堂遺跡の東端及びその隣地にあたる。調査対象地 110㎡の工事に際し、掘削状況を確認し、遺構・遺物の有無の確認と地質の確認を行った。

(5) 結果

平成26年度試掘調査で確認された溝跡（SD1）を検出。遺物の出土はなかった。

(6) 考察

遺物は出土しなかった。平成26年度試掘調査のTT1で確認された溝跡（SD1）が東西方位の溝であることが確認された。さらにピット1箇所（SP1）を確認した。



第99図 太子堂遺跡調査位置図 S= 1/600

立会調査地西壁

南

北



第100図 太子堂遺跡深掘部西壁 S= 1/40

2 荻字神明森

- (1) 調査日 平成27年7月15日
- (2) 調査場所 南陽市荻字神明森 1499
- (3) 調査原因 民間開発
- (4) 調査方法及び内容

当該地は中世城館址の熊野館の南東約400mに位置する丘の中腹にあたり、分布調査未実施地であることから、土工事の際に遺構・遺物の有無の確認及び記録を行うこととした。工事は、携帯電話鉄塔設備の拡張工事である。調査対象範囲87.65㎡のうち80cmの深掘りを行った地点で幅2m×長5mを調査した。

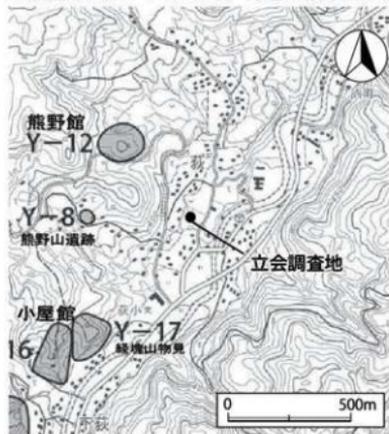
(5) 結果

遺物は検出されなかった。時期不明のピットを検出したが比較的新しい杭跡と思われる。

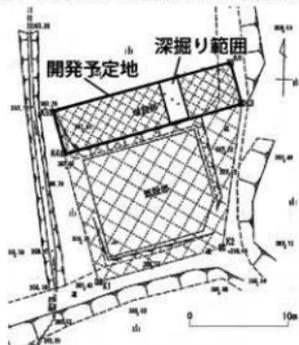
(6) 考察

対象地は吉野川右岸の丘の上にあたり、熊野山から東に続く傾斜地の中腹に位置する。周辺には段々畑が多くみられ、山裾側のいくつかのテラス上に住宅が建っている。対象地内を踏査したが遺物は採集できなかった。

掘削箇所では、地表面から約75cm深で、西北から南東に約80cm間隔で並ぶ直径約20cmのピットを3箇所検出した。杭列跡と思われるが覆土が上層と同質であるため、比較的新しいと思われる。ピットが掘りこまれている層には、凝灰岩系の風化礫が多く混ざっている。この礫は地山由来のものと思われ、対象地より上の斜面から流れ込んだものと思われるが、ブロック状に見られることから、自然に流れ込んだというより人為的に地山の土を捨てたような印象を受ける。対象地では遺構・遺物は確認できなかったが、対象地南側の宅地に挟まれた小道の脇には小社（神社）があり城館址に続く道であることや、周辺の段差の大きいテラス等、付近に城館址に関連する何らかの遺構がある可能性もあろう。



第101図 字神明森調査位置図 S=1/20000



第102図 字神明森立会調査図 S=1/500



- 1 明褐色砂質粘土
- 2 褐色砂質粘土（凝灰岩礫混じる）
- 3 明褐色砂質粘土（地山風化土）
- 4 明褐色粘土（地山）

第103図 字神明森柱状図 S=1/40

3 神明前遺跡

- (1) 調査日 平成27年7月22日～28日
- (2) 調査場所 南陽市池黒字神明前
- (3) 調査原因 下水道工事
- (4) 調査方法及び内容

当該地は分布調査未実施地である。別所館跡の立地する山裾を通る道にあたり、応徳三年棟札のある池黒皇大神社の隣地である。別所B遺跡、館山遺跡に挟まれた地域であることから工事の際に立会い及び周辺踏査を行い、遺跡の有無の確認を行う。

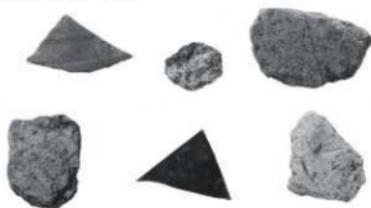
(5) 結果

工事地内で遺物・遺構は検出されなかったが、工事地南側の畑地で広く遺物の散布状況が確認された。新規遺跡である。

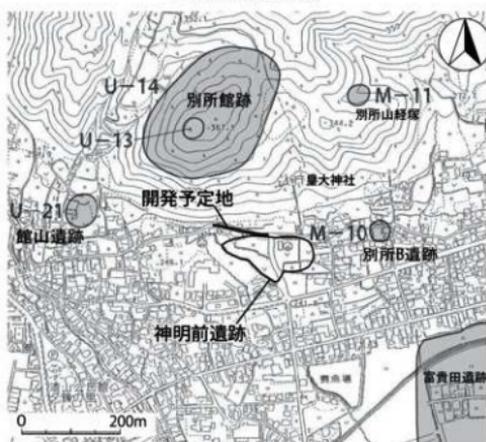
(6) 考察

工事を実施する道路の南側に広がる畑地において、地表面踏査により平安時代とみられる須恵器片、土師器片を表採した。字名から神明前遺跡とする。神明前遺跡は山裾の高台を中心に広がるものと思われる。

工事箇所は市道内であるが、道路は山の斜面を切って作られており、道路工事による盛土層の下はすぐに硬い地山となっており、既に表土層は削平されている。掘削範囲内では遺構・遺物は確認されなかった。



神明前遺跡表採遺物



第104図 神明前遺跡調査位置図 S= 1/10000

4 宮内字桜田二

- (1) 調査日 平成27年7月29日～8月25日
- (2) 調査場所 南陽市宮内字桜田二
- (3) 調査原因 下水道工事
- (4) 調査方法及び内容

当該地は分布調査未実施地である。清水上遺跡の隣地にあたるため遺跡の有無と清水上遺跡の範囲を調査するため、下水道工事にあわせ立会調査を行う。

(5) 結果

工事地内で遺物・遺構は検出されなかった。対象地は河川跡と思われる。

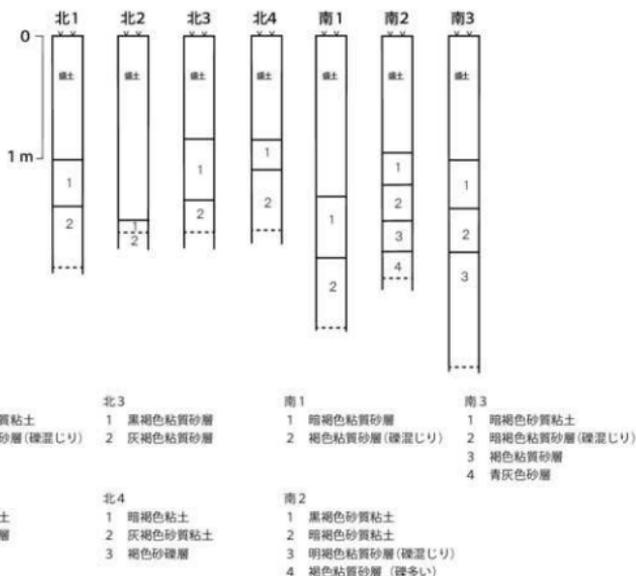
(6) 考察

遺構は検出されなかった。遺物は、北工区の北①地点において盛土直下の旧耕作土層から縄文土器片が1点出土したが土層の状況から流れ込みと思われる。

いずれの地点でも盛土が厚く、旧耕作土及び盤土層下は礫層となり、河川跡と思われる。当該地に遺跡は無いとみられる。



第105図 宮内字桜田二調査位置図 S=1/4000



第106図 宮内字桜田二柱状図 S=1/40

5 漆山字広面四

- (1) 調査日 平成27年6月1日(踏査)9月9日(立会)
- (2) 調査場所 南陽市漆山字広面四 136-1
- (3) 調査原因 民間開発
- (4) 調査方法及び内容

当該地は分布調査未実施地である。豚舎増築工事に伴い遺跡の有無を確認するため周辺踏査及び工事立会を行う。

(5) 結果

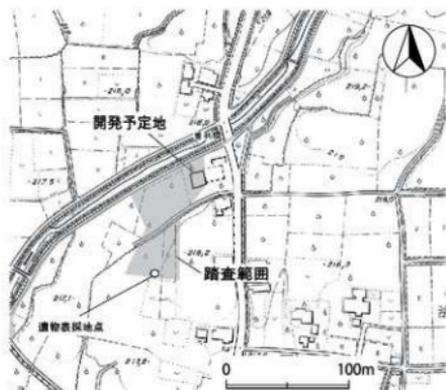
工事地内で遺物・遺構は検出されなかった。

(6) 考察

対象地は、上無川左岸の自然堤防にあたり現況は豚舎、畑地及び果樹園である。周辺踏査で開発予定地南側の畑地(字広面四)で須恵器坏片1点を表採している。基礎工事の際に立会を行ったが遺構・遺物は確認されなかった。対象地南側の自然堤防上に遺跡がある可能性があり、継続調査が必要である。



漆山字広面四表採遺物



第107図 漆山字広面四調査位置図 S= 1/4000

6 若狭郷屋敷跡

- (1) 調査日 平成27年6月1日(踏査) 9月9日(立会)
- (2) 調査場所 南陽市若狭郷屋敷字内方、字浦城
- (3) 調査原因 下水道整備
- (4) 調査方法及び内容

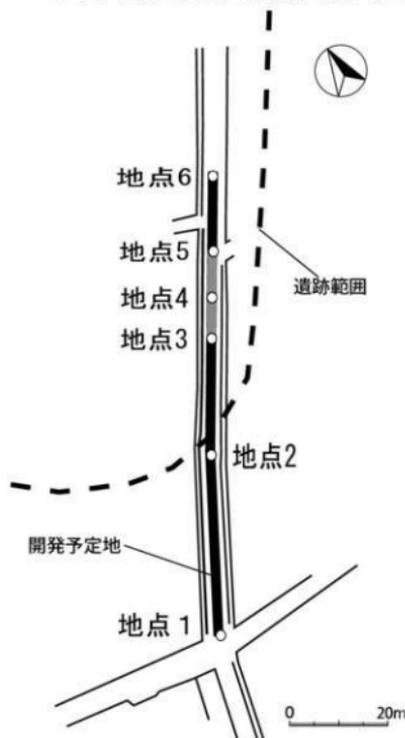
当該地は、周知の若狭郷屋敷跡の範囲にかかることから、調査対象地の下水道敷設工事に際し、掘削状況を確認し、遺構・遺物の有無の確認と地質の確認を行った。

(5) 結果

工事地内で遺物・遺構は検出されなかった。

(6) 考察

工事範囲のうち6地点で確認した。地点2の排土(黒色粘土)中から土師器片1点を確認したが流れ込みの可能性がある。地点3～5にかけて最深部に黒色粘土層が約30m続いている。地点3の南側、地点5の北側では最深部の層として灰色シルト粘土層が続くことから、地点3～5間の黒色粘土層の範囲は小河川跡等の可能性がある。地点2付近でも最深部に黒色粘土層がみられ、工事の安全対策上その幅は押さえることができなかったが、おそらく黒色粘土層の幅は広くないものと思われ、溝跡の可能性もある。



第108図 若狭郷屋敷跡調査位置図
S= 1/1000



第109図 若狭郷屋敷跡柱状図 S= 1/40

7 東屋敷遺跡

- (1) 調査日 平成27年12月7日
- (2) 調査場所 南陽市漆山字東屋敷
- (3) 調査原因 道路整備
- (4) 調査方法及び内容

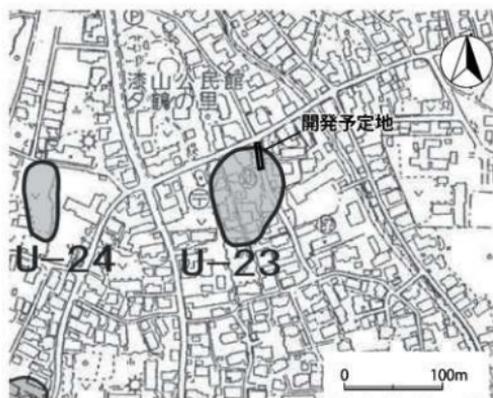
対象地は、周知の東屋敷遺跡の範囲である。道路整備事業による水路入替え工事に際し、掘削状況を確認し、遺構・遺物の有無の確認を行った。

- (5) 結果

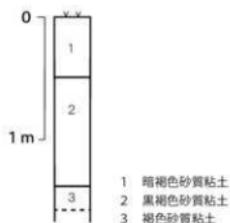
工事地内で遺物・遺構は検出されなかった。

- (6) 考察

工事は既存水路の撤去・入替えにとどまり、土工事は最小限で新たな掘削はなかったため、既存水路を外した際の断面で土層等を確認した。遺構・遺物は確認されなかった。



第110図 東屋敷遺跡調査位置図 S= 1/5000



第111図 東屋敷遺跡柱状図 S= 1/40

8 俎柳字中丸

- (1) 調査日 平成27年12月15日～
- (2) 調査場所 南陽市俎柳字中丸
- (3) 調査原因 下水道整備事業
- (4) 調査方法及び内容

対象地の現況は道路である。周知の内城館跡隣地であることから、掘削の際に立会調査を行い、土層観察と遺構・遺物の有無の確認を行った。

(5) 結果

工事地内で遺物・遺構は検出されなかった。

(6) 考察

①地点1（西端南本管接続地点）

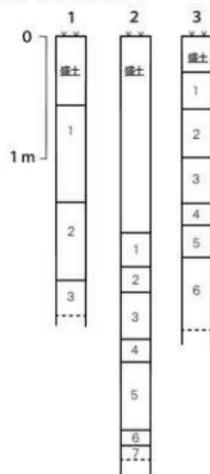
幅1m×横5mを掘削。遺構・遺物はない。掘削が繰り返されており、土層1～2は攪乱層の可能性もある。

②地点2（西端マンホール地点）

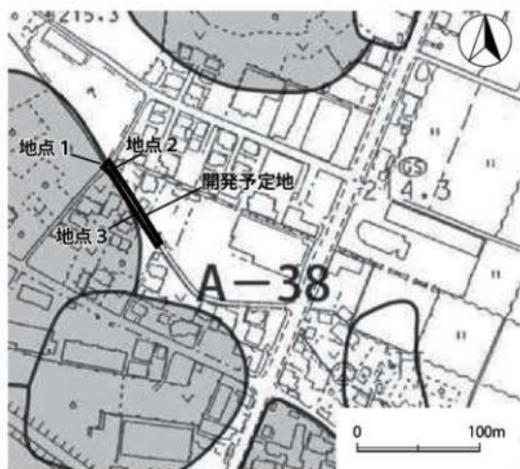
幅2m×横2mを掘削。掘削が繰り返されたためか盛土が厚い。道路面から約2.5m下の暗灰色砂質粘土層には植物遺体がまばらに含まれる。遺構・遺物はない。

③地点3（工事区中央地点）

幅2mで掘削。遺構・遺物はない。安全対策上、堀底付近の断面観察はできなかったが、地表から約3m下の堀底面は灰色粘質砂層となっている。



- | | |
|--------------------------|----------|
| 地点1 | 地点3 |
| 1 オリーブ褐色砂質粘土 | 1 褐色粘土 |
| 2 灰褐色粘土 | 2 暗褐色粘土 |
| 3 灰色粘質砂層（砂多い） | 3 灰色砂質粘土 |
| 地点2 | 4 暗灰色粘土 |
| 1 灰色粘土 | 5 灰色粘土 |
| 2 暗灰色粘質砂層 | 6 灰色粘質砂層 |
| 3 灰色粘土 | |
| 4 やや暗い灰色砂質粘土
（植物遺体含む） | |
| 5 灰色粘質砂層 | |
| 6 やや暗い灰色粘土
（植物遺体含む） | |
| 7 暗灰色粘土
（植物遺体含む） | |



106 第112図 字中丸調査位置図 S= 1/4000

第113図 字中丸柱状図 S= 1/40

9 市内全域（防災無線）

(1) 調査日 平成27年10月29日～12月29日

(2) 調査場所 南陽市内

(3) 調査原因 防災無線局整備事業（94条）

(4) 調査方法及び内容

対象地は74地点で市内全域にわたる。工事は主に各地区の消防施設敷地内に防災無線拡声器を備えた鉄塔を整備するものである。一部の消防施設は周知の遺跡内に所在することから立会調査を行い、遺構・遺物の有無の確認を行った。

(5) 結果

掘削面積は各地点約1㎡で、深さ1.1m、支柱深さ2.7mである。既存施設内での工事が多く、今次工事に伴い遺構は検出されなかった。遺物はNO6 俎柳公民館駐車場で土師器片が表土層から出土、流れ込みとみられるが、近隣に周知の遺跡が無いことから新規遺跡が近くに存在する可能性がある。

NO	名称	地区	所在地	NO	名称	地区	所在地
1	高平山中継局	吉野	太郎字立岩山	38	南陽高校	宮内	桜田
2	十分一山中継局	赤湯	赤湯字土平山	39	内原ポンプ庫	宮内	宮内字内原一
3	大橋再送信子局	赤湯	大橋字沢田	40	新田公民館	中川	新田
4	鍋田公民館	沖郷	鍋田字的場	41	公立置賜南陽病院	宮内	吉野町下
5	中ノ目公民館	沖郷	中ノ目字塔場浦	42	南町中ポンプ庫	宮内	宮内字阿弥陀堂
6	俎柳公民館	赤湯	俎柳字東畑	43	宮内公民館	宮内	宮町
7	沖田ポンプ庫	沖郷	沖田字館ノ内	44	尾島会館	金山	金山字尾島
8	宮崎集落センター	沖郷	宮崎字上川田	45	川樋ポンプ庫	中川	川樋字大谷地
9	萩生田公民館	沖郷	萩生田字石田	46	川樋公民館	中川	川樋字天矢場
10	沖郷小学校	沖郷	高梨	47	中川公民館	中川	小岩沢
11	沖郷中学校	沖郷	鳥貫	48	元中山ポンプ庫	中川	元中山字諏訪原
12	赤湯中学校	赤湯	石田	49	中川中学校	中川	小岩沢字代
13	赤湯小学校	赤湯	長園	50	森合	中川	森合
14	樽塚二公民館	赤湯	樽塚字押出	51	金山公民館	金山	金山字巻ノ沢 他
15	樽塚一公民館	赤湯	樽塚字中谷地三	52	黒在家六角ポンプ庫	金山	金山
16	未定	赤湯	松沢字松沢前三	53	太郎地区集会所	吉野	太郎字前田
17	市道川尻線	赤湯	松沢字宮原	54	茶畑	吉野	下萩字茶畑
18	金沢公民館	赤湯	金沢字万平	55	萩小学校	吉野	萩
19	北町	赤湯	北町	56	居残沢	吉野	萩字中錯
20	清水町公民館	赤湯	赤湯字新田前	57	南陽市立小滝小学校	吉野	小滝
21	川尻交差点	赤湯	赤湯字川尻	58	市役所	赤湯	三間通
22	烏帽子山公園	赤湯	表町	59	宮内中学校	宮内	東町上
23	花見町公民館	赤湯	二色根字下川原一	60	西工業団地	漆山	池黒字簀子屋敷
24	二色根公民館	赤湯	二色根字中川原	61	南陽ふれあいの丘	宮内	田町下
25	萩生田ポンプ庫	沖郷	萩生田字上屋敷	62	防災センター	沖郷	若狹郷屋字駅西
26	長湊ポンプ庫	沖郷	長湊	63	東和田	梨郷	和田字東前田
27	砂塚公民館	梨郷	砂塚字古屋敷	64	漆山16組ポンプ庫	漆山	漆山字柳田一
28	梨郷公民館	梨郷	竹原	65	和泉町一	宮内	宮内字久根崎
29	梨郷集会所	梨郷	梨郷字中巻三	66	米沢信用金庫前賢鐘台	赤湯	桜木町二
30	露橋コミュニティセンター	沖郷	露橋	67	郡山公民館	沖郷	郡山字中ノ坪
31	梨郷神社前	梨郷	竹原字七間地	68	樽塚一緑地	赤湯	樽塚字堀田
32	漆山小学校	漆山	16組	69	関根集会場	沖郷	関根字前田二
33	夕鶴の里	漆山	漆山字北目	70	酒町部落会館	吉野	萩字中酒町
34	宮内児童遊園	宮内	黄金町	71	新屋敷	吉野	萩字新屋敷
35	矢ノ目多目的集会所	漆山	池黒字台ノ上	72	巻	梨郷	梨郷字下巻二
36	蒲生田公民館	沖郷	蒲生田字町屋敷	73	平野	梨郷	梨郷字平野
37	市民体育館	赤湯	上野	74	大洞	中川	川樋

下八ッ口遺跡 遺物観察表

種別 番号	種別	器種	計測値(mm)			外面	内面	底部	出土地点
			口径	底径	器高				
1	陶器	すり鉢	-	(132)	-	12	-	-	砂塚公民館敷地内

西原遺跡 遺物観察表

種別 番号	種別	器種	計測値(mm)			外面	内面	底部	出土地点・備考
			口径	底径	器高				
1	須恵器	環	-	-	-	9	ロクロ	ロクロ	不明 TT4
2	土師器	甕?	-	(84)	-	7	-	-	木炭痕 TT1
3	土師器	環	134	56	51	5.5	ロクロ	ミガキ	回転系切 TT1・外面体部墨書「富」
4	土師器	甕	213	88	333	9	ロクロ・ヘラケズリ	ロクロ	不明 TT1
5	土師器	甕	224	80	357	6	ロクロ・ヘラナデ	ハケメ	不明 TT1

沢見遺跡 遺物観察表

種別 番号	種別	器種	計測値(mm)			外面	内面	底部	出土地点・備考
			口径	底径	器高				
1	土師器	甕	-	-	-	11	-	-	瀬代前 TT7 SD 底
2	須恵器	環	-	56	-	5	ロクロ	ロクロ	回転系切 TT7 SD 底
3	土師器	高台環	-	(64)	-	5	ロクロ	ロクロ	回転系切 TT7 SD 底
4	須恵器	環	(120)	-	-	4	ロクロ	ロクロ	- TT7 SD 底
5	須恵器	環	(141)	63	50	5	ロクロ	ロクロ	回転系切 TP6 SK

長岡山東遺跡 遺物観察表

種別 番号	種別	器種	計測値(mm)			外面	内面	底部	出土地点・備考
			口径	底径	器高				
1	須恵器	高台環	(156)	66	63	4.5	ロクロ	ロクロ	回転系切 TT1
2	黒色土器	環	126	70	41	5	ミガキ	ミガキ・黒色処理	回転系切か? TT1
3	須恵器	環	(156)	-	-	4	ロクロ	ロクロ	- TT1
4	須恵器	環	(156)	60	42	4.5	ロクロ	ロクロ	回転系切 TT1
5	須恵器	環	(146)	68	50	5	ロクロ	ロクロ	回転系切 TT1
6	須恵器	環	(150)	66	46	5	ロクロ	ロクロ	回転系切 TT1
7	須恵器	環	(150)	(66)	48	4.5	ロクロ	ロクロ	回転系切 TT1
8	須恵器	環	(144)	(60)	42	5	ロクロ	ロクロ	回転系切 TT1
9	須恵器	環	-	58	-	3	ロクロ	ロクロ	回転系切 TT1
10	須恵器	環	-	68	-	4	ロクロ	ロクロ	回転系切 TT1
11	須恵器	環	(152)	(60)	40	4.5	ロクロ	ロクロ	回転系切 TT1
12	須恵器	甕?	-	76	-	5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切 TT1
13	須恵器	環	-	68	-	5	ロクロ	ロクロ	回転系切 TT1
14	須恵器	環	-	(68)	-	3	ロクロ	ロクロ	回転系切 TT1
15	須恵器	甕?	-	78	-	9	ロクロ	ロクロ	回転系切 TT1
16	須恵器	環	-	62	-	6	ロクロ	ロクロ	回転系切 TT1
17	須恵器	環	-	46	-	3	ロクロ	ロクロ	回転系切 TT1
18	須恵器	環	-	66	-	4.5	ロクロ	ロクロ	回転系切 TT4
19	須恵器	環	-	60	-	4	ロクロ	ロクロ	回転系切 TT4
20	土師器	環	-	44	-	3.5	ロクロ	ロクロ	回転系切 TT4



夷平山の谷地形遠景(南から)



夷平山の谷地形高所にある神社(西南から)



夷平山の谷地形(高所から、北から)



秋葉山・団子山東斜面(東から)



秋葉山東斜面の枝尾根(西から)



赤瀬八幡宮上のテラス(西から)



字蒲生田山の谷にある石垣のテラス(南から)



字名子山・長清水(南から)



大沢山3号墳跡付近（東から）



大沢山の谷際の石材（南西から）



上野山の坑道陥没穴（東から）



上野山の坑道陥没穴内部



大沢山南斜面（南から）



長峰山の尾根（南から）



二色根古墳群 山裾部（東から）



二色根山西側斜面（東から）



七両坂古墳遠景（北から）



七両坂古墳の現況（東から）



昭和 56 年撮影の七両坂古墳（西南から）



字十分一山二の石材群遠景（南から）



字十分一山二の石材群 A 地点（東から、古墳の）



字十分一山二の石材群 B 地点（東から、古墳の）



字十分一山二の石材群 A 地点マウンド（北西から）



字十分一山二の石材群 B 地点マウンド（北西から）



松沢字外山の尾根（東から）



松沢古墳群東側のゴロ帯（西から）



松沢古墳群東側のA地点 地薔れ(東から)



松沢古墳群東側のB地点 積石(西から)



細田遺跡（南から）



漆山字西高堰（古墳跡か、南東から）



平野古窯跡西方の黒色範囲（窯跡か、東から）



平野古窯跡西方の黒色範囲（窯跡か、南から）



町河原遺跡遠景（北東から、手前：旧河道）



町河原遺跡近景（北から）



金山字南沢周辺（西から）



金山字砥石沢のスリ山（南から）



金山字砥石沢の坑道（南から）



漆房遺跡遠景（西から）



平野山田遺跡南側（近景、西から）



平野山田遺跡北側（近景、東から）

図版5 町河原遺跡、金山字南沢・字砥石沢、漆房遺跡、平野山田遺跡



砂塚字堂ノ越の方形壇（西南から）



下八ッ口遺跡（手前：恩賜郷倉、南から）



打越遺跡近景（南から）



漆山館跡北側尾根上の堀切（西から）



稲荷山物見跡南尾根（南から）



稲荷山物見跡主郭（神社、南東から）



稲荷山物見跡主郭北側の二重堀切（南から）



稲荷山物見跡北尾根の曲輪（北から）



阿弥陀山物見跡北側堀切（西から）



阿弥陀山物見跡主郭（南東から）



阿弥陀山物見跡東尾根（西から）



阿弥陀山物見跡南斜面の帯曲輪（東から）



字兒子神浦の尾根（北から）



乳子神社東側に開口する貯蔵穴（東から）



乳子神社入口（南から）



字毘沙門沢（南から）

図版7 阿弥陀山物見跡、字兒子神、字毘沙門沢



竈山館跡 子易神社入口 (南から)



竈山館跡南側二重堀切の一つ (西から)



竈山館跡尾根の曲輪群 (南から)



竈山館跡北側二重堀切 (南から)



竈山館跡東側谷の古墓地 (南から)



竈山館跡北側尾根頂の円形塚状地形 (西から)



全城院北側の尾根 (東から)



全城院北西側 尾根頂の虚空蔵祠 (南から)



金山橋山館跡（南から）



金山橋山館跡北側堀切（東から）



金山橋山館跡南西曲輪の板碑等（南から）



金山橋山館跡西側曲輪の古墓地（板碑有）（西から）



金山橋山館跡東側のコ型地形（南から）



金山橋山館跡北側尾根の谷地形（東から）



金山橋山館跡東側丘陵最高所南斜面（東から）



金山橋山館跡東側台地上の緩斜面（西から）



天ヶ澤館跡遠景（西から）



天ヶ澤館跡主郭東端堀切（北から）



天ヶ澤館跡主郭東端の土塁（北から）



天ヶ澤館跡西斜面の帯曲輪（北から）



七瑾古山物見跡遠景（北西から）



七瑾古山物見跡山頂平坦面（北から）



七瑾古山山頂石祠（南から）



七瑾古山山頂東斜面に多く見られる窪地



田中館跡遠景（北から）



田中館跡（南から）



田中館跡近景（西から）



立石館跡遠景（南から）



竜ノ口神社（南から）



字寺清水遠景（北から）



字八幡山 八幡神社方向（南から）



字八幡山～字三ノ入沢 古墓地（西から）



字大平南西斜面（南から）



字大平の尾根（東から）



字大平（山） 東端の谷地形（北から）



大平山北側山裾の古墓地（北から）



平館跡近景（南西から）



平館跡と金山橋山館跡（西から）



平館跡から田中館跡方向に続く河岸段丘（北から）



田中館跡から立石館跡方向に続く河岸段丘（北から）



石切山城跡遠景（南から）



平館から見る石切山城跡



石切山城跡の曲輪Ⅱ北側の土橋（堀内から、東から）



石切山城跡の曲輪Ⅱ北側の土橋（西から）



石切山城跡の曲輪Ⅰ北側の土橋（北から）



石切山城跡の曲輪Ⅰ北側の土橋（南東から）



石切山城跡の曲輪Ⅱ（北から）



石切山城跡の曲輪Ⅱ西の石垣（北から）



石切山城跡の曲輪Ⅱ西側の曲輪と土塁(東から)



石切山城跡の曲輪Ⅱ西側 虎口付近(東から)



石切山城跡の曲輪Ⅲと曲輪Ⅱ間の堀切(北から)



石切山城跡の曲輪Ⅲの切岸(北から)



石切山城跡の曲輪Ⅳ東側(南西から)



石切山城跡の曲輪Ⅳ東側(南から)



石切山城跡東側帯曲輪 工事立会(南東から)



石切山城跡東側帯曲輪 工事立会(北東から)



宮沢城大手丸から三の郭への土橋（東から）



宮沢城本丸北東側の堀底道のある横堀現況



宮沢城跡本丸南側の帯曲輪（東から）



宮沢城跡本丸北側の空堀と土塁（東から）



宮沢城跡蔵屋敷郭へ通じる道（東南から）



宮沢城跡蔵屋敷郭の南側の曲輪（西から）



宮沢城跡蔵屋敷郭北側の堀切埋没地点（西から）



宮沢城跡北端の堀切（西から）



岩部山南側山麓の岩崎神社（南から）



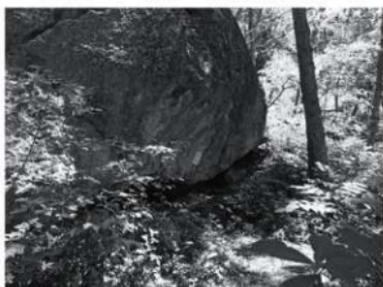
岩部山三十三観音 20 番硯石洞窟（西から）



岩部山三十三観音 20 番硯石洞窟（南から）



岩部山三十三観音 21 番の岩庇（東から）



岩部山三十三観音 30 番の岩陰（西から）



岩部山三十三観音 31 番の石庇（東南から）



岩部山麓跡本丸（北から）



岩部山麓跡本丸（南から）



岩部山館跡西側の日影街道切通し（南から）



日影街道切通し南側の曲輪（北から）



岩部山尾根の方形壇



岩部山館跡 堀切（南から）



岩部山館跡 切岸（北から）



岩部山館跡 石垣



岩部山館跡 竪堀



岩部山館跡 本丸（西から）



天王山1号墳



天王山2号墳



天王山3号墳



天王山4号墳 (前方部東側から)



天王山5号墳



天王山6号墳 (前方部東側から)



天王山7号墳 (前方部側から)



天王山9号墳 (西から)



竜樹山1号墳(北西から)



竜樹山2号墳(北から)



竜樹山9号墳、3号墳(南から)



竜樹山10号墳(南から)



竜樹山4号墳(北から)



竜樹山5号墳(北から)



竜樹山6号墳(南から)



竜樹山7号墳(南から、前东部方向から)



竜樹山 8号墳 (東から)



竜樹山 xRM11 (東から)



竜樹山 XRM12 (東から)



稲荷山 1号墳 (南から)



稲荷山 2号墳 (東から、前方面から)



稲荷山 3号墳 (北から)



稲荷山 4号墳 (南から)



稲荷山 5号墳遠景 (南西から)



経塚山1号墳（南から）



経塚山2号墳（南から、前方部から）



経塚山3号墳（北から）



経塚山4号墳（南から）



経塚山6号墳（南から）



奥から経塚山5号墳、xKM10、xKM11（北から）



経塚山7号墳（北から）



経塚山9号墳（北から）



経塚山北側の切通し（西から）



経塚山 x KM 13 平坦面（南から）



KM 7 の北側尾根（南から）



KM 6 の南側尾根（北から）



建高寺西側尾根（北から）



建高寺西側尾根の南端（北から）



砂田遺跡東側（北から）



砂田遺跡西側（南から）



宇土瀨土 (南から)



字関口 (南から)



長岡山東遺跡試掘地(北から)



長岡山東遺跡T T 1 (西から)



長岡山東遺跡T T 2 (東から)



長岡山東遺跡T T 3 (東から)



長岡山東遺跡T T 4 (東から)



長岡山東遺跡T T 5 (東から)



長岡山東遺跡TT 6 (東から)



長岡山東遺跡TT 7 (東から)



長岡山東遺跡TT 8 (東から)



長岡山東遺跡TT 9 (東から)



長岡山東遺跡TT 10 (東から)



長岡山東遺跡TT 11 (東から)



長岡山東遺跡TT 12 (東から)



長岡山東遺跡TT 13 (東から)



長岡山東遺跡 TT 14 東から



長岡山東遺跡試掘地東北の隆起地形 (南から)



沢田遺跡試掘地 (北東から)



沢田遺跡 TT 1 (南から)



沢田遺跡 TT 2 (南から)



沢田遺跡 TT 3 (北から)



沢田遺跡 TT 4 (南から)



沢田遺跡 TT 5 (北から)



沢田遺跡 TT 6 (北から)



沢田遺跡 TT 7 (北から)



沢田遺跡 TT 8 (北から)



沢田遺跡 TT 9 (北から)



沢田遺跡 TT10 (北から)



沢田遺跡 TT11 (北から)



沢田遺跡 TT1 竪穴住居 (南西から)



沢見遺跡全景 (南東から)



沢見遺跡 TP 1 (南から)



沢見遺跡 TP 2 (南から)



沢見遺跡 TP 3 (南から)



沢見遺跡 TP 4 (南から)



沢見遺跡 TP 5 (南から)



沢見遺跡 TP 6 (南から)



沢見遺跡 TP 7 (南から)



沢見遺跡 TP 8 (南から)



沢見遺跡 T T 9 (南から)



沢見遺跡 T T 7 (西から)



沢見遺跡 T T 7 大溝 (西から)



沢見遺跡 T T 5 (SP3)



字上河原試掘地全景 (西北から)



字上河原試掘 T P 1 (南から)



字上河原試掘 T P 2 (南から)



字上河原試掘 T P 4 (南から)



字上河原試掘 T P 5 (南から)



字上河原試掘 T P 6 (南から)



字上河原試掘 T P 7 (南から)



字上河原試掘 T P 8 (南から)



秋生田遺跡試掘地全景 (南から)



秋生田遺跡 T T 1 (南から)



秋生田遺跡 T T 2 (南から)



字斎藤付近: 遺物表採地点 (南から)



宇大清水試掘地全景（東北から）



宇大清水TP 1（南から）



宇大清水TT 2（西から）



宇大清水TT 3（西から）



宇大清水TT 5（西から）



宇大清水TT 7（西から）



宇大清水TT 8（西から）



西原遺跡試掘地全景（南東から）



西原遺跡TP 1 (南から)



西原遺跡TP 8 (南から)



西原遺跡TP 12 (南から)



西原遺跡TP 13 (南から)



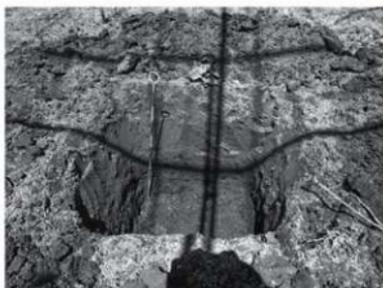
西原遺跡TP 15 (南から)



西原遺跡TP 16 (南から)



西原遺跡TP 17 (南から)



西原遺跡TP 18 (南から)



西原遺跡TP 21 (南から)



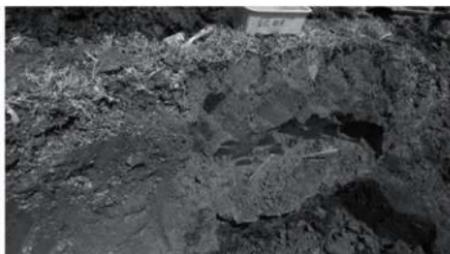
西原遺跡TP 35 (南から)



西原遺跡TP 40 (南から)



西原遺跡TT 1 (東南から)



西原遺跡TT 1 (合口裏出土地点) (東から)



西原遺跡TT 2 (北から)



西原遺跡TT 3 (西から)



西原遺跡TT 4 (南から)



西原遺跡TT 5 (西から)



植木場一遺跡試掘地全景（北から）



植木場一遺跡TT1（南から）



植木場一遺跡SP1半裁



植木場一遺跡SP2半裁



植木場一遺跡立会調査（南から）



宇円蔵西試掘地全景（東から）



宇円蔵西TT1（西から）



宇円蔵西TT2（西から）



字円蔵西 T T 3 (西から)



字円蔵西 T T 4 (西から)



東唐越館跡の掘跡 (東から)



東唐越館跡 (東から)



字桜田一試掘地全景 (南西から)



字桜田一 T P 1 (北から)



字桜田一 T T 2 (北から)



字桜田一 T P 3 (北から)



字桜田一TP 4 (西から)



字桜田一TP 5 (東から)



字桜田一TP 6 (北から)



字桜田一TP 7 (北から)



字桜田一TP 8 (北から)



字桜田一TP 9 (北から)



字桜田一T T10 (西から)



字桜田一TP 11 (北から)



字桜田一TP 12 (南から)



字桜田一TP 13 (北から)



東六角遺跡試掘地全景 (南西から)



東六角遺跡TT 1 (北から)



東六角遺跡TT 3 (南から)



東六角遺跡TT 2 (西から)



東六角遺跡TT 4 (南から)



西野々古墓地 A (南から)



西野々古墓地 B (東から)



西野々古墓地 A TT1 (東から)



西野々古墓地 A TT2 (南から)



岩屋堂遺跡試掘地 (西から)



岩屋堂遺跡 TP1 (南から)



岩屋堂遺跡 TT-G (南から)



岩屋堂遺跡 TP-J (南から)



岩屋堂遺跡TT-A (東から)



岩屋堂遺跡TT-H (東から)



岩屋堂遺跡TT-K (南から)



岩屋堂遺跡TP2 (東から)



岩屋堂遺跡TP-E (南から)



岩屋堂遺跡TP-F (南から)



岩屋堂遺跡TP13 (南から)



岩屋堂遺跡TP17 (南から)



檜原遺跡試掘地全景 (南西から)



檜原遺跡試掘地東側の古墓地(南西から)



檜原遺跡 TP 1 (南から)



檜原遺跡 TP 2 (南から)



檜原遺跡 TP 3 (南から)



檜原遺跡 TP 4 (南から)



檜原遺跡 TP 5 (南から)



宇石田試掘地全景 (南西から)



字石田TP 1 (南から)



字石田TP 2 (南から)



字石田TP 3 (南から)



字石田TP 4 (南から)



字石田TP 5 (南から)



字石田TP 6 (南から)



字石田TP 7 (南から)



字石田TP 8 (南から)



宇太子堂立会調査地(東から)



宇太子堂 SD1(東から)



宇神明森立会調査地(南から)



宇神明森立会 掘削部(南から)



宇桜田二南工区 立会調査地(西から)



宇桜田二北工区 立会調査地(西から)



宇桜田二南工区②(西から)



宇桜田二南工区③(西から)



宇桜田二南工区④(西から)



字桜田二北工区
② (西から)



字桜田二北工区
③ (西から)



字広面四立会調査地 (西から)



字広面四遺物表探地点 (南西から)



若狭郷屋敷跡立会調査地 (南から)



若狭郷屋敷跡 地点②(北から)



若狭郷屋敷跡
地点③ (南から)



若狭郷屋敷跡 地点④、⑤ (南から)



東屋敷遺跡立会調査地(北から)



東屋敷遺跡 掘削地



字中丸立会調査地(西から)



字中丸 地点①(南から)



字中丸 地点②(北から)



字中丸 地点③(西から)



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



1 TT1出土



2 TT1出土



3 TT1出土



4



5



6



7



8



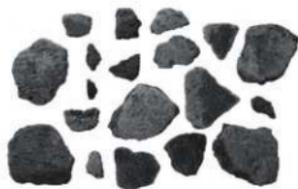
1 TT5出土



2 TT5出土



3 TT5下層出土



4 TT5下層出土



5 TT6出土



6 TT7出土



7 TT7 SD出土



8 TT7 SD出土



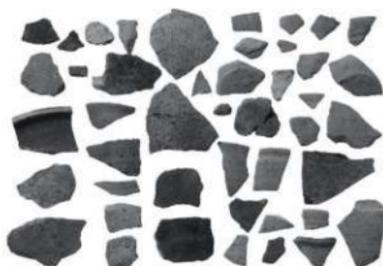
9 TT7 SD出土



10 TT7 SD出土の木製品



11 TT7 SD出土



12 TT7 SD出土



13 TT9 SD出土



1 TT1出土



2 TT1出土



3 TT1出土



4 TP 17出土



5 TP 18出土



6 TP 28出土



7 TP 40出土



8 TP 41出土

南陽市埋蔵文化財調査報告書第13集
南陽市遺跡分布調査報告書(4)
2016年3月31日

発行 南陽市教育委員会
〒999-2292 山形県南陽市三間通436番地の1
電話 0238-40-3211(代)

印刷 南陽印刷株式会社
〒999-2221 山形県南陽市二色根5-11
電話 0238-43-3028

